宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第60集

MOTOJYŌ

本　城　跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶＩ

2002年

宮崎県埋蔵文化財センター

『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第60集』
「本城跡」　（2002　宮崎県埋蔵文化財センター）

正誤表

訂　正　箇　所	誤	正
本文25頁14行	曲輪Ｘに～	曲輪Ⅸに～

本　城　跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶＩ

2002年

宮崎県埋蔵文化財センター

北西から見た本城跡

序

宮崎県教育員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け平成７年度から東九州自動車道（西都～清武）建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う発掘調査報告書であります。掲載した宮崎市古城町所在の本城跡は、平成８年から平成９年の２ヵ年にわたり調査を行ったものです。調査の結果、当遺跡の丘陵では縄文時代から近世にかけての人々の生活の痕跡が確認されました。なかでも、遺跡の主要な時代である中世から近世にかけての城跡は、見張り台や堀切・虎口といった施設が確認され当時の縄張りの一端が解き明かされるとともに、近隣には、古城・山ノ城といった地名もあり関わりが推定されます。また、多量の土師器や陶磁器が出土しました。これらの遺構・遺物は、今後、当地域の歴史を解明するうえで貴重な資料と言えるでしょう。

本書が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜りました先生方に対して厚く御礼申し上げます。

平成14年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　矢野　　剛

例　言

1　本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した本城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は日本道路公団福岡建設局の依頼を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、平成８・９年の２カ年にわたり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成８年５月７日から平成９年８月12日まで行った。

4　現地での実測等の記録は、崎田一郎・髙橋祐二・小山博・橋本英俊・代田博文（現 南郷町教育委員会）が行い地形測量図については有限会社ジパング・サーベイに委託した。

5　本書で使用した写真は、崎田一郎・橋本英俊が撮影し、空中写真は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

6　整理作業は埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、遺物の実測、トレースは整理作業員の協力をえて崎田・橋本が行った。

7　本書で使用した位置図は国土地理院発行の５万分の１図を基に作成し、周辺地形図は宮崎市作成の１万分の１図を基に作成した。

8　本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。レベルは海抜絶対高である。

9　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB・・・掘立柱建物　　SC・・・土坑　　SE・・・溝状遺構　　SI・・・集石遺構

10　土器の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。

11　陶磁器類の整理にあたって、家田淳一氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示賜った。

12　本書の執筆・編集は橋本が行った。

13　出土遺物・その他諸記録は埋蔵文化財センターに保管している。

14　報告書内での調査区割と平成８・９年度の概要報告の曲輪番号との対照は次のとおりである

北側の城……曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ・曲輪Ⅵ

南側の城……曲輪Ⅶ・曲輪Ⅷ・曲輪Ⅸ

本　文　目　次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
第２章　調査の経過
　第１節　調査区の設定 …… 5
　第２節　調査日誌 …… 5
第３章　調査の記録
　第１節　縄張図から見た本城跡 …… 11
　第２節　中世から近世の遺構・遺物 …… 11
　　１　曲輪Ⅳ …… 11
　　２　曲輪Ⅴ …… 11
　　３　曲輪Ⅵ …… 12
　　４　曲輪Ⅶ …… 16
　　５　曲輪Ⅷ …… 25
　　６　曲輪Ⅸ …… 25
　　７　出土遺物 …… 37
　第３節　城跡に関わらない遺構・遺物 …… 88
第４章　まとめ …… 93

挿　図　目　次

第１図　位置と周辺の城跡 …… 3
第２図　遺跡の周辺地形 …… 4
第３図　調査区とグリッド配置図 …… 7
第４図　本城跡縄張図 …… 9
第５図　曲輪Ⅳ～Ⅵ遺構分布図 …… 13
第６図　曲輪Ⅳ遺構分布図 …… 15
第７図　曲輪Ⅴ・Ⅵ遺構分布図 …… 17
第８図　曲輪Ⅴ－Ⅵ断面図 …… 19
第９図　曲輪Ⅵ土塁断面図 …… 19
第10図　曲輪Ⅵ道１土層断面図 …… 20
第11図　曲輪Ⅶ～Ⅸ遺構分布図 …… 21

第12図　曲輪Ⅶ堀切１平面・土層断面図 …… 23
第13図　曲輪Ⅷ堀切２平面・断面・土層断面図 …… 24
第14図　曲輪ⅧSE１平面・断面・土層断面図 …… 26
第15図　SB１・SB２ …… 27
第16図　SB３・SB４ …… 28
第17図　SB５・SB６ …… 29
第18図　SC１・SC２・SC４・SC５ …… 30
第19図　SC６～SC８・SC10・SC12 …… 31
第20図　SC13～SC16・SC18・SC20 …… 32
第21図　SC21～SC25 …… 33
第22図　SC３・SC11・SC17・SC19 …… 34
第23図　SC９・SC26・SC27 …… 35
第24図　土師器実測図（１） …… 38
第25図　土師器実測図（２） …… 40
第26図　土師器実測図（３） …… 41
第27図　土師器実測図（４） …… 42
第28図　土師器実測図（５） …… 44
第29図　土師器実測図（６） …… 45
第30図　土師器実測図（７） …… 46
第31図　土師器実測図（８） …… 47
第32図　陶磁器実測図（１） …… 49
第33図　陶磁器実測図（２） …… 50
第34図　陶磁器実測図（３） …… 51
第35図　陶磁器実測図（４） …… 53
第36図　陶磁器実測図（５） …… 54
第37図　陶磁器実測図（６） …… 55
第38図　陶磁器実測図（７） …… 57
第39図　陶磁器実測図（８） …… 58
第40図　陶磁器実測図（９） …… 60
第41図　陶磁器実測図（10） …… 61
第42図　陶磁器実測図（11） …… 63
第43図　陶磁器実測図（12） …… 64
第44図　陶磁器実測図（13） …… 65
第45図　銭貨（１） …… 67

第46図　銭貨（2）…… 68
第47図　銭貨（3）…… 69
第48図　金属製品実測図 …… 70
第49図　金属製品・石製品実測図 …… 72
第50図　石製品・土製品実測図 …… 73
第51図　SI１・SI２・SI３ …… 89
第52図　縄文～古代遺物実測図 …… 90
第53図　石器実測図 …… 91

表　目　次

第１表　掘立柱建物（SB）計測表 …… 36
第２表　土坑（SC）計測表 …… 36
第３表　本城跡出土土器観察表（1） …… 74
第４表　本城跡出土土器観察表（2） …… 75
第５表　本城跡出土土器観察表（3） …… 76
第６表　本城跡出土土器観察表（4） …… 77
第７表　本城跡出土土器観察表（5） …… 78
第８表　本城跡出土陶磁器観察表（1） …… 79
第９表　本城跡出土陶磁器観察表（2） …… 80
第10表　本城跡出土陶磁器観察表（3） …… 81
第11表　本城跡出土陶磁器観察表（4） …… 82
第12表　本城跡出土陶磁器観察表（5） …… 83
第13表　本城跡出土陶磁器観察表（6） …… 84
第14表　本城跡出土銭貨計測表 …… 85
第15表　本城跡出土金属製品計測表 …… 85
第16表　本城跡出土石製品計測表 …… 86
第17表　本城跡出土土錘計測表（1） …… 86
第18表　本城跡出土土錘計測表（2） …… 87
第19表　本城跡出土土器観察表（6） …… 92
第20表　本城跡出土石器観察表 …… 92

図　版　目　次

巻頭図版　　北西から見た本城跡
　図版 1　曲輪Ⅳ～Ⅵ（南から） …… 97
　　曲輪Ⅳ～Ⅵ（真上から）

図版２　曲輪Ⅳ（真上から）…… 98
曲輪Ｖ（真上から）
図版３　曲輪Ⅵ（真上から）…… 99
曲輪Ⅶ～Ⅸ（北西から）
図版４　曲輪Ⅶ～Ⅸ（北西より）…… 100
堀切と曲輪
虎口（正面が曲輪Ｖ）
虎口と道２
調査区外堀切土層断面Ⓑ地点
曲輪Ⅶ堀切１検出状況（東より）
曲輪Ⅶ堀切１完掘状況（北より）
曲輪Ⅷ・Ⅸ堀切２（西より）
図版５　曲輪Ⅷ・Ⅸ堀切２（南より）…… 101
曲輪Ⅷ SE１（南より）
SC１遺物出土状況（東より）
SC１完掘状況（東より）
SC２完掘状況（南より）
SC８検出状況（西より）
SC25半載状況（北より）
SC25完掘状況（真上から）
図版６　SC26完掘状況（南より）…… 102
曲輪Ｖ井戸跡
ＳＩ１半載状況（東より）
ＳＩ２（南より）
ＳＩ３（東より）
土師器出土状況（曲輪Ｖ）
銭貨出土状況（曲輪Ｖ）
弥生土器出土状況（曲輪Ｖ）
図版７　出土遺物（１）土師器 …… 103
図版８　出土遺物（２）土師器・陶磁器 …… 104
図版９　出土遺物（３）陶磁器 …… 105
図版10　出土遺物（４）陶磁器・弥生土器・土師器 …… 106
図版11　出土遺物（５）銭貨・金属製品・石製品・土製品・縄文土器・石器 …… 107

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は平成元年２月に基本計画がなされ、平成３年12月３日に整備計画策定、そして平成５年11月19日に建設大臣から日本道路公団に東九州自動車道（西都～清武間）の施行命令が出された。その間宮崎県教育委員会文化課では、平成３年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事によって影響を受ける部分について工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成７年度の清武工事区より開始された。本城跡は平成５年度から実施されている中近世城館跡緊急分布調査により、縄張りや見張り台などの施設から城跡であると推定されていた。城跡は谷を挟んで南北に広がっている。路線は城跡の主郭部分には係らないものの、西側の曲輪部分に大きく影響を及ぼしている。

第２節　調査の組織

本城跡の調査の組織は次のとおりである。

調査主体　宮崎県教育委員会

教 育 長	田原直廣（平成８年度）
	岩切重厚（平成９年度）
	笹山竹義（平成10～12年度）
	岩切正憲（平成13年度）
文化課長	江崎富治（平成８年度）
	仲田俊彦（平成９～11年度）
	黒岩正博（平成12・13年度）
埋蔵文化財係長	面髙哲郎（平成８年度）
	北郷泰道（平成９～11年度）
	石川悦雄（平成12・13年度）
主査（調整担当）	永友良典（平成８年度）
	柳田宏一（平成９年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長	藤本健一　（平成 ８・９年度）
	田中　守　（平成10・11年度）
	矢野　剛　（平成12・13年度）
副参事	木幡文夫　（平成８年度）
副所長	岩永哲夫　（平成８・９・12・13年度）
	江口京子　（平成11年度）
	菊地茂仁　（平成12・13年度）
調査第一課長	面髙哲郎（平成12・13年度）

調査第一係長	谷口武範（平成13年度）
調査第二係長	長津宗重（平成12・13年度）
主事（調整担当）	飯田博之（平成８年度）
主査（調整担当）	菅付和樹（平成９～11年度）
主任主事（調査担当）	崎田一郎（平成８～11年度・12年度主査）
主事（調査・編集担当）	橋本英俊（平成８～11年度・12年度主任主事）
調査員（嘱託）	代田博文（平成９年度）

第３節　遺跡の位置と環境

本城跡は宮崎市古城町時雨から字本城にかけて所在する。遺跡は宮崎平野を東に見渡せる標高約110ｍの比較的急峻な２つの山にわたって築かれている。海岸線から９ｋｍほど西に位置する。城跡の東側には古城谷・北川内谷があり、その谷に挟まれて中世山城跡である山ノ城跡（大田城跡）・古城跡が位置し、さらに東約１㎞に伊東氏48城に数えられる曽井城跡（現野崎病院）を望むことができる。一方西側は比高差約60ｍに古城川を見下ろし、水運が監視できる地勢にある。遠く北側には宮崎城の立地する竹篠台地を見晴らすことができる。

遺跡の所在する古城は、日向国宮崎郡に属し、中世には大田村に含まれ近世に分村している。建久８年（1197）の「日向国図田帳」に、八条女院領国富荘の一円荘のうちに地頭平五の所領として「大田百丁」と見える。大田一帯は大淀川河口部右岸に位置し、南朝方の肝付氏の勢力と北朝方の伊東氏や土持氏・島津氏の勢力の争奪の地となった場所である。「日向記」によると、慶長５年（1600）10月、宮崎城を攻め取った伊東勢は稲津掃部助を同城に在城させ、本城など５カ所に陣を張っている。近隣の山ノ城跡は伊東氏庶家の山ノ城氏の居城で、主郭と推定される曲輪や堀切がみられ、古城跡は帯曲輪や堀切が確認できる。周辺には伊満福寺・護東寺などの寺跡も立地している。

〈参考・引用文献〉

宮崎県史刊行会　『宮崎県史』通史編　中世　1998

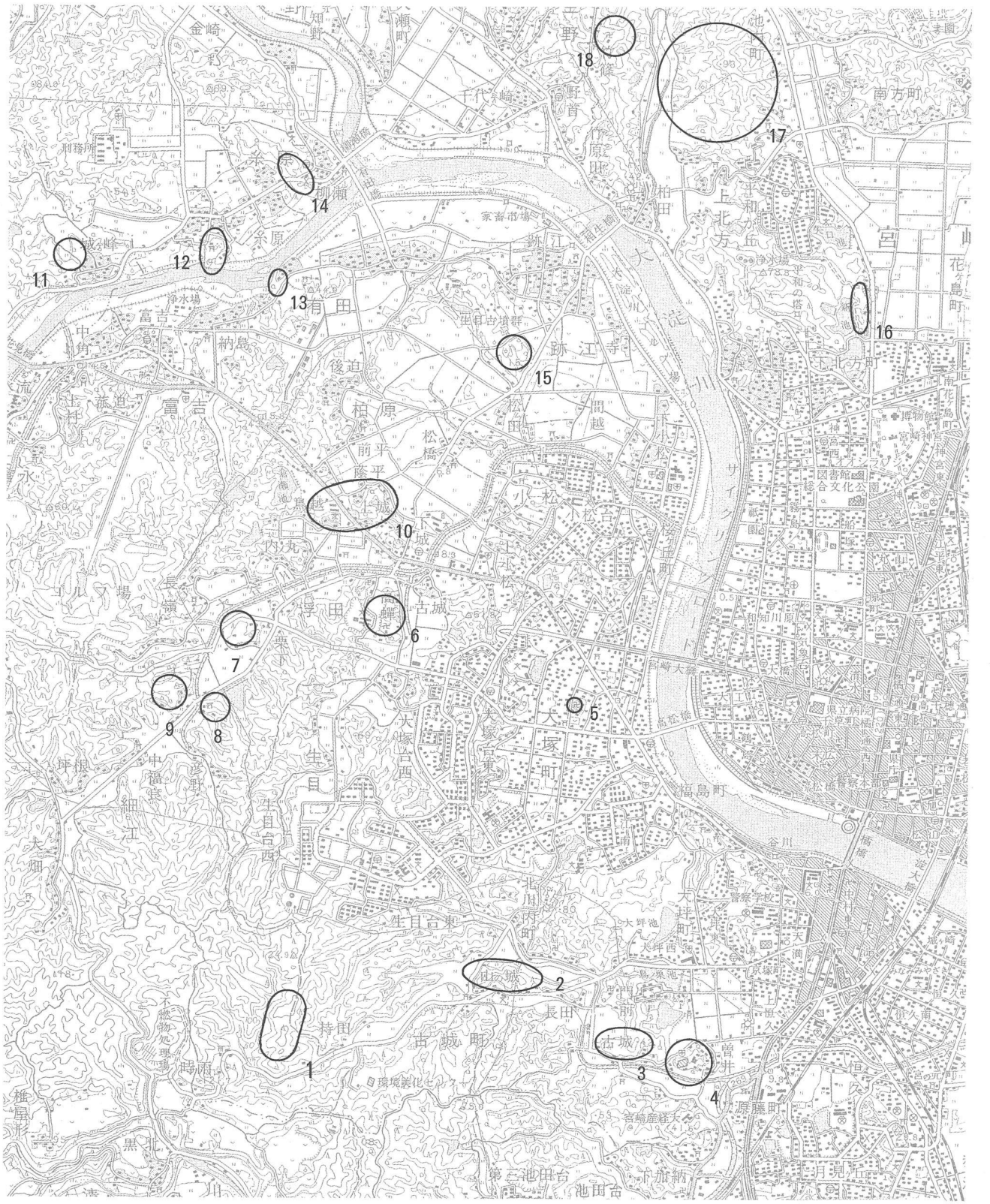
宮崎県史刊行会　『宮崎県史　叢書　日向記』 2000

宮崎県教育委員会　『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』 詳説編　1999

平部嶠南　『日向地誌』 1929

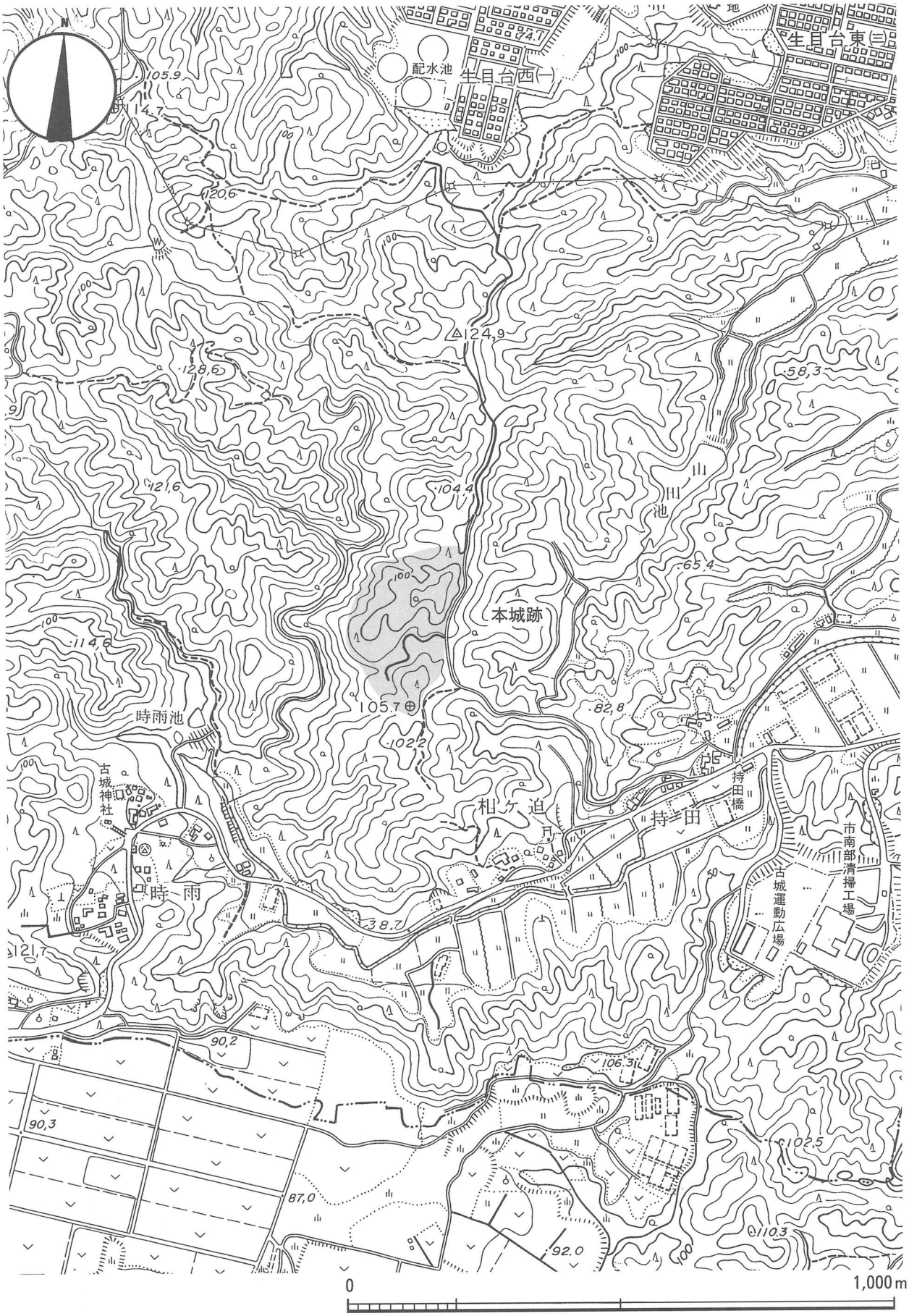
新人物往来社　『日本城郭体系』 ２　1981

平凡社　『郷土歴史大事典　宮崎県の地名』 1997



1 本城跡　2 山ノ城跡　3 古城跡　4 曽井城跡　5 蓬莱山城跡　6 高蝉城跡
7 寺ノ下遺跡　8 宮ノ城跡　9 圍城跡　10 石塚城跡　11 城ヶ峰遺跡　12 倉岡城跡
13 白糸城跡　14 柿迫遺跡　15 跡江城跡　16 陣ノ内　17 宮崎城跡「池内城・龍峯城」
18 竹篠城跡

第1図　位置と周辺の城跡（1/50,000）



第２図　遺跡の周辺地形（1/10,000）

第２章　調査の経過

第１節　調査区の設定

東九州自動車道は、宮崎市古城町時雨から字本城間の丘陵尾根と谷を北東方向に向かう。 古城川を望む左岸の丘陵の先端部、および基部が調査対象地区である。調査の初期段階で主郭を含め、縮尺を1,000分の１とする地形測量を行い、グリッドは１辺10ｍとした。（第３図）

調査は杉の立木等の除去後、調査対象とした尾根を横断するようにトレンチを設け、また傾斜面の形成や曲輪の普請が行われていたか否かの判断のため、曲輪と傾斜面を横断するトレンチも設定した。また城跡としての縄張りを想定するにあたって、周辺の地形を含めて踏査し、丘陵に設けた平坦な地形を「平場」と称した。便宜上アルファベットと番号を付けて区割りを行い発掘調査を行ったが、整理期間中に曲輪として新たに番号を付けた。

第２節　調査日誌

本遺跡の発掘調査は、平成８年４月17日から平成９年８月12日までの約１年４ヶ月の長期にわたった。期間中は長雨や立木の伐採や運び出し・工事用道路の建設などのため数回にわたり、のべ５ヶ月間程調査を断念する日々があった。調査日誌は準備期間を除き順を追って記述を行う。

平成８年４月17日～４月26日

対象となる丘陵南側の県道清武黒北線より踏査を開始する。

平成８年４月18日

中近世城館跡緊急分布調査の際、範囲に含まれていなかった南側の山に見張り台と推定される施設を確認する。東側に宮崎平野を一望できる場所であった。縄張り図の作成を行う。

平成８年５月７日～10日

調査面積が広く比較的平坦な部分の多い北側の城より、杉の廃材の処理とトレンチ掘りを行う。

平成８年５月13日

国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏とともに現地調査を行う。北側の城の構造はあまり人工的でなく、一方、南側の城は人工的な構造をしている。城の範囲の推定から縄張り図の修正を行う。

平成８年５月14日～５月23日

調査対象地内には杉が未伐採の部分と廃材が散乱している箇所が多く見られ、調査に着手できそうな箇所の廃材の運び出しと現況が畑地部分のトレンチ掘りを行う。遺構面が削平されている。部分的に重機による表土剥ぎを行う。

平成８年５月24日～８月５日

地権者による杉の伐採や運び出しのため調査は一時中断。

平成８年８月６日～30日

杉の伐採や運び出しに重機や大型の車両を使用したため、虎口と推定される部分や北側の城と南側の城の間にある曲輪の一部の破壊が進行する。斜面地や調査地内に残る廃材の撤去と搬出を行う。

平成８年10月２日～10月20日

工事車両用の道路拡幅工事のため調査一時中断。

平成８年10月21日～12月９日

重機を使用して排土の除去と搬出、北側の城の表土剥ぎを行う。調査区内にグリッド杭を設置。

平成８年12月11日～12月26日

北側の城をジョレンにより精査を開始する。南側の城の廃材処理と排土の処理。

平成９年１月７日～１月21日

北側の城から土坑やピットが検出されはじめ、ようやく調査らしくなってくる。

平成９年１月23日～１月28日

北側の城の虎口部分の調査に着手。

平成９年１月29日～２月３日

南側の城（曲輪Ⅶ～曲輪Ⅸ）の試掘を行う。 曲輪Ⅶに堀切が確認される。

平成９年２月４日～２月17日

北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴのコンタラインの作成を開始する。

平成９年２月24日～平成９年３月６日

曲輪Ⅵの掘り下げと曲輪Ⅶの調査を開始する。

平成９年３月10日～平成９年３月31日

曲輪Ⅵに柱穴や土坑が検出され、掘り下げを開始する。周辺工事のため曲輪Ⅶ～Ⅸの調査を中断。

平成９年４月２日～４月17日

北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴ・Ⅵのピット群や土坑の精査の後、記録作成を行う。

平成９年４月17日～４月30日

曲輪Ⅳ西側縁辺部の削平を受けている部分にトレンチを設定し、掘り下げを行う。集石遺構２基が検出される。南側の城（曲輪Ⅶ～Ⅸ）の掘り下げを再開する。

平成９年５月１日～５月16日

曲輪Ⅳの造成面の確認と曲輪Ⅵの虎口推定部分の掘削作業を行う。

平成９年５月19日～６月３日

曲輪Ⅳ・Ⅴのピット群の実測作業と、曲輪Ⅶの堀切の掘削作業を行う。

平成９年６月４日～６月12日

曲輪Ⅵの土塁の断ち割り作業を行う。曲輪Ⅷ・Ⅸよりピット・土坑が検出される。

平成９年６月13日～６月30日

北側の城の曲輪Ⅵの土坑・ピット群の記録作成および曲輪Ⅷ・Ⅸ間の堀切の掘削作業を行う。

平成９年７月11日～７月22日

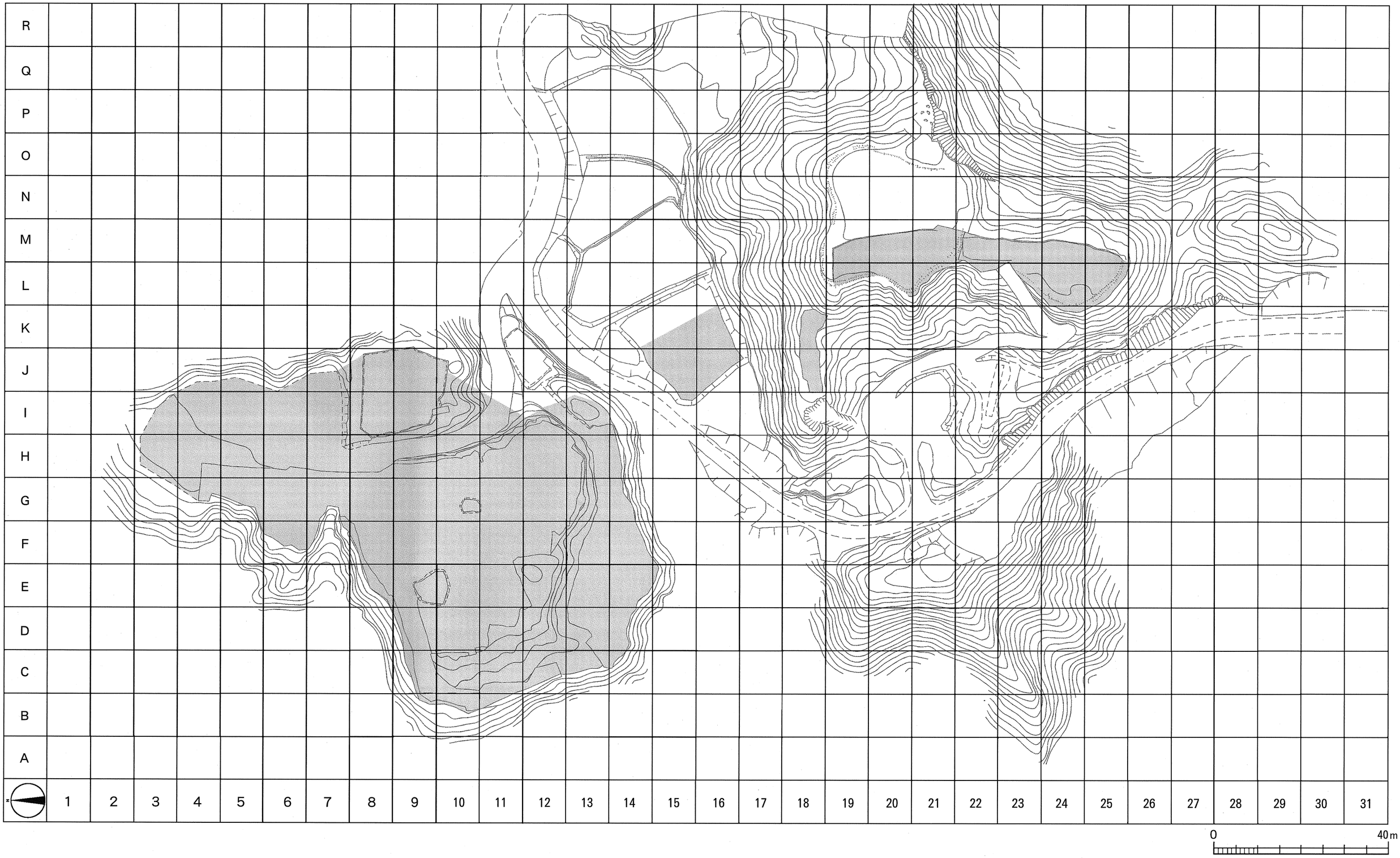
曲輪Ⅷ・Ⅸの土塁痕跡の断ち割りと分層、地山成形後土盛りを行っている状況を確認。

平成９年７月23日～８月９日

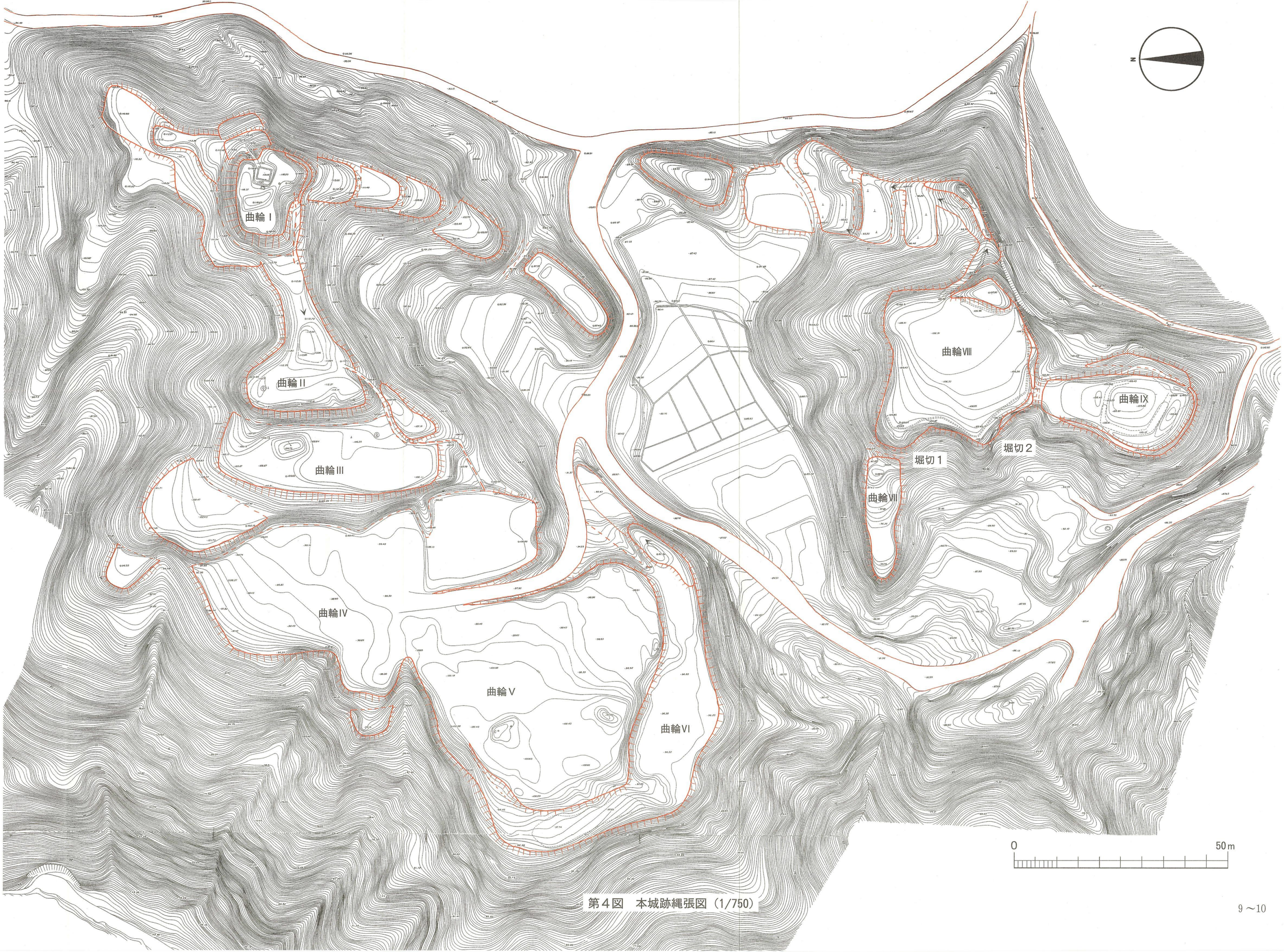
堀切２カ所の実測とコンタラインの作成を行う。

平成９年８月10日～８月12日

地形図と縄張り図の修正を行い調査を終了する。



第３図　調査区とグリッド配置図（1/800）



第４図　本城跡縄張図（1/750）

第３章　調査の記録

第１節　縄張図から見た本城跡

本城跡は、縄張り図から最高所の標高約110ｍを計る曲輪Ｉが主郭部分に当たると見られ、四方に放射状に小郭を配置する構造である。現況では主郭から南に延びる４段目の曲輪の先端に堀切が１本と、曲輪Ｉ南端と曲輪Ⅵ東端に土塁が確認できるのみであり、屋敷地的な様相を示している。

谷を挟んだ南側にも曲輪が広がっており、北側とは異なった様相である。曲輪Ⅷでは見張り台と考えられる周囲約30ｍ現況の高さ１ｍの高まりが認められ、東側からまわりこむように通路状の空間があり土塁状の施設が確認でき、北側に向かって５段の曲輪状の平坦面が延びている。さらに北側の先端に高さ５ｍ、周囲約40ｍの高まりが認められる。

本城跡では丘陵頂部の曲輪へ登るため、または曲輪間の移動のための道や虎口が設けられている。推定を含めて道が２カ所・虎口が２カ所である。また曲輪Ⅷと曲輪Ⅸとの間に虎口や土塁といった施設が現地形からも確認できる。構造上からはシラス台地の縁辺の適地を城取りし、堀や土塁によって区画する宮崎県南部地域に多く見られるタイプである。

第２節　中世から近世の遺構・遺物

１　曲輪Ⅳ（第４・５・６図）

調査区のもっとも北側に位置し曲輪Ｖの北側に隣接する。面積は、1,230㎡を計る。曲輪の西側は縄文時代早期の面まで大きく削平され、本来の曲輪の形状は明確ではない。調査の結果、Ｈ－５からＨ－７グリッド付近で掘立柱建物跡４棟を確認した。柱穴は曲輪の西側へも延びると推定されるが、削平のためさらに掘立柱建物として復元できるものはなかった。現況は平坦地であるが土層壁面の観察から地山成形による造成が３段みられ、複数の曲輪により構成されていた可能性がある。

（１）掘立柱建物（SB）（第６・15・16図）

曲輪Ⅳでは、掘立柱建物は総数６棟のうち４棟を確認した。計測値の詳細については、表１を参照されたい。SB１が、１間×４間、SB２が１間×３間、SB３が２間×４間、SB４が２間×３間の規模である。根固めの石などは検出されていない。SB１は１棟のみ東に触れるが、ＳＢ２からＳＢ４は主軸方位がほぼ同軸上にあり、規格に違いはあるものの同時期の作事の可能性が強いと考えられる。

２　曲輪Ｖ（第４・５・７図）

調査区のほぼ中央に位置し、城域の西端にあたる面積2,205㎡を計る城内最大の曲輪である。表土は、５㎝～10㎝と非常に薄い。基盤層直上のシラス層まで造成を行い平坦地を作り出している。曲輪内から土坑21基、井戸跡１基、柱穴群が検出された。南端部では板状の石を敷設した遺構の一部が確認され、曲輪内通路とも想定されるが曲輪とのつながりについては不明瞭である。また、第７図Ⓐ地点に現存周囲10ｍを計る壇上の高まりがあり、ヘラ切り底・糸切り底が混在する土師皿が20数枚重なって出土した。この近辺には神社の伝承も存在することから祭祀関連の遺構の可能性もある。曲輪の西側から南側にかけての縁辺部に若干の高まりが見られることや、曲輪Ⅵおよび虎口

の位置関係等から考えると周囲に土塁が巡っていた可能性が考えられる。

（１）土坑（SC）（第７・18～23図）

土坑はシラス層を掘り込み作られている。その規模および平面規模や形態は大小様々である。曲輪Ｖでは、21基が確認されている。遺物を伴う土坑はSC１・２・４・11の４基のみと少なく、一部を除いて土坑の性格は不明である。ここでは、遺物が出土しているものや特徴的なものについて記述する。規模や形態など詳細については表２を参照されたい。

SC１

曲輪Ｖの西端、やや北西よりの縁辺に位置する。平面形は不整な円形で、長軸1.01ｍ、短軸0.94ｍを計る。検出面からの深さは12㎝と浅く断面形は皿状を呈する。覆土は黒色土単一である。遺物は人型（第50図399・400）と動物型（第50図401）の土製品が出土している。

SC２

曲輪Ｖの南西、SC１の南東約15ｍに位置する。ほぼ北－南方向に長軸を1.9ｍ、東－西方向に短軸を1.4ｍ、深さ1.11ｍの不整な楕円形状に掘り込んでいる。北壁には緩やかなテラス状の平坦面をもち、床面はほぼ平坦である。遺物は南側に人頭大の砂岩が上にのり、つぶれたような形で、頸部がほぼまっすぐ立ち上がり、口縁は端部を外に折り曲げた玉縁状を呈する15～16世紀代の備前の甕（第34図219）が１個体分が出土し、別個体ではあるが同時期の備前の甕（第34図216～218）が出土している。

SC４

曲輪Ｖの北縁、SC１の北東約8.8ｍに位置する。平面形は北－南方向に長軸1.49ｍを計る不整な楕円形状を呈する。検出面からの深さは1.82ｍを計る。遺物は最深部の床面から14世紀代の備前擂鉢（第35図220）が出土している。

井戸跡（第７図）

曲輪Ｖほぼ中央部分で、細長いパイプが地中に差し込まれ埋められた状態で確認された。周囲には扁平な板石状の砂岩が散らばっており、取り囲んでいたと推定される。重機による掘削を行ったが、深さ５ｍ程掘り下げた時点でシラスの壁面が崩落したため調査を断念した。形状は円柱状である。掘削範囲での遺物等の出土はなく、使用された時期については不明である。

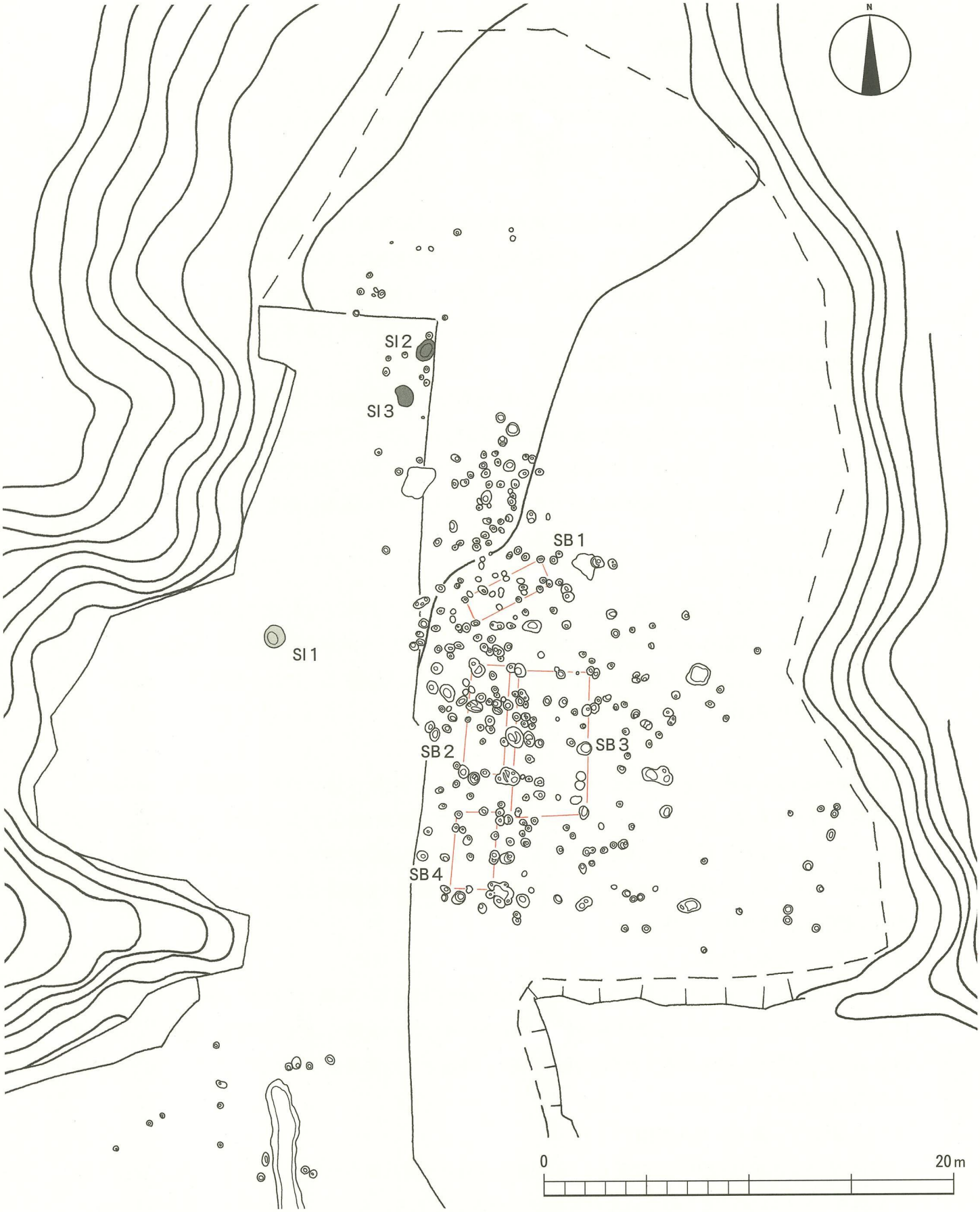
３　曲輪Ⅵ（第４・５・７図）

曲輪Ｖとの比高差は、曲輪Ｖ南端部で約3.5ｍを有する。（第８図）曲輪Ｖの西側から徐々に標高を減じていく。腰曲輪的な役割を持ち、面積は1,180㎡を計る。土坑３基と東西方向に主軸を持つ掘立柱建物が２棟確認された。曲輪東端部で南西から北東にかけて傾斜し、現況で周囲約30ｍを計る土塁の一部と見られる高まりがあり、第７図の調査範囲外Ⓑ地点の壁面に断面逆台形状を呈する掘り込みが見られ、虎口の造り替えの可能性も考えられる。

（１）土塁（第４・７・９図）

土塁は、曲輪Ⅵの東側に位置する。現況で基底部幅７ｍ、高さ2.5ｍを計る。東に向かって幅が狭くなり起伏も緩やかになる。本来は曲輪の東端部（調査区外）へも続いていた可能性も考えられるが削平が著しく現況では判然としない。土塁は、曲輪基底部の宮崎層群と直上のシラス地山層ま

第５図　曲輪Ⅳ～Ⅵ 遺構分布図（1/400）



第６図　曲輪Ⅳ 遺構分布図（1/250）

で造成を行い、築造したものと思われる。

（2）道1（第4・7・10図）

道1は東に向かって標高を減じていく曲輪Ⅵの東側に位置し、比高差3.5mを計る曲輪Ⅴへ入って行くと想定される。本来は土塁を回り込んで曲輪内Ⅳへ入って行くと考えられるが、現況は一部拡張されており虎口の形状は確定できない。

（3）道2（第4・7図）

道2は主郭から南に延びる曲輪の南端と曲輪Ⅷの北側下に挟まれ、一端曲輪Ⅵの方向へ登り、途中で北へ方向をかえ道1と直交する。木材搬出道として開削されたため、現況はL字状を呈し曲輪Ⅴへ直接入り込んでいる。そのため曲輪へのルートとしては想定されるが、曲輪Ⅵとの関係については疑問が残る。本来の道の規模や虎口などの形状については不明である。

（4）掘立柱建物（SB）（第7・17図）

曲輪Ⅵでは、掘立柱建物総数6棟のうち2棟（SB5・6）を確認した。計測値の詳細については、表1を参照されたい。掘立柱建物跡は東側から西側に向かって湾曲する曲輪の形状に沿って確認されている。SB5・SB6ともに2間×3間の規模をもち、SB5は身舎の西側に庇をもつ。ともに柱穴は円形で深さも約30㎝程度を基本としている。柱穴からの遺物の出土はみられず、根固めの石なども検出されていない。

（5）土坑（第7・21図）

曲輪Ⅵでは、3基（SC23～25）の土坑が確認された。全て曲輪Ⅴの南側で、掘立柱建物の北側に位置している。床面はシラス基盤層に達しており、覆土もシラスが主体である。主軸は、南北方向であり、遺物の出土はみられない。形態の特徴的なものを記述する。規模や形態などの詳細については表2を参照されたい。

SC25

曲輪Ⅴの南西から南に延びる高まりを断ち割っている作業中に検出された。検出面からの深さは、最深部で3.8mを計る。南北方向に長軸があり、断面形は階段状を呈する。階段は南側から北側に向かって降りており、現状で5段確認される。平面形態は入り口と考えられる南側がすぼまり北側に向かってふくらむ不整な楕円形である。検出面で土師器小片が確認されたものの、覆土中や床面からの遺物の出土はみられない。

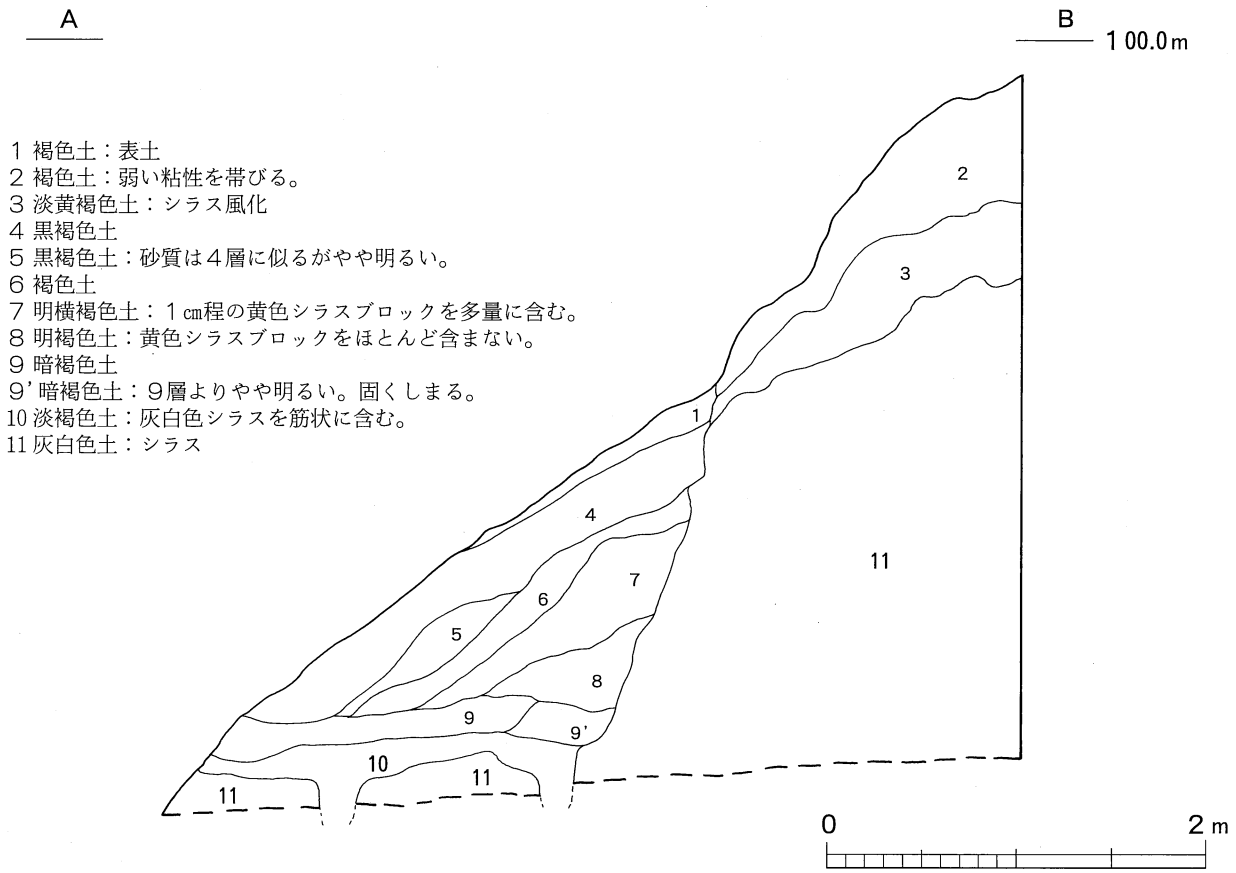
4　曲輪Ⅶ（第4・11図）

曲輪Ⅷと比高差7mを計り西に向かって細い尾根状に延びる。面積は182㎡。曲輪Ⅷとの間に幅約2m、深さ1.5～2mを計る薬研堀の堀切が検出された。中央部分に地山が掘り残されている痕跡があり、土橋状の施設があった可能性がある。 検出された遺構は堀切1本のみで、他の遺構および遺物は確認されていない。

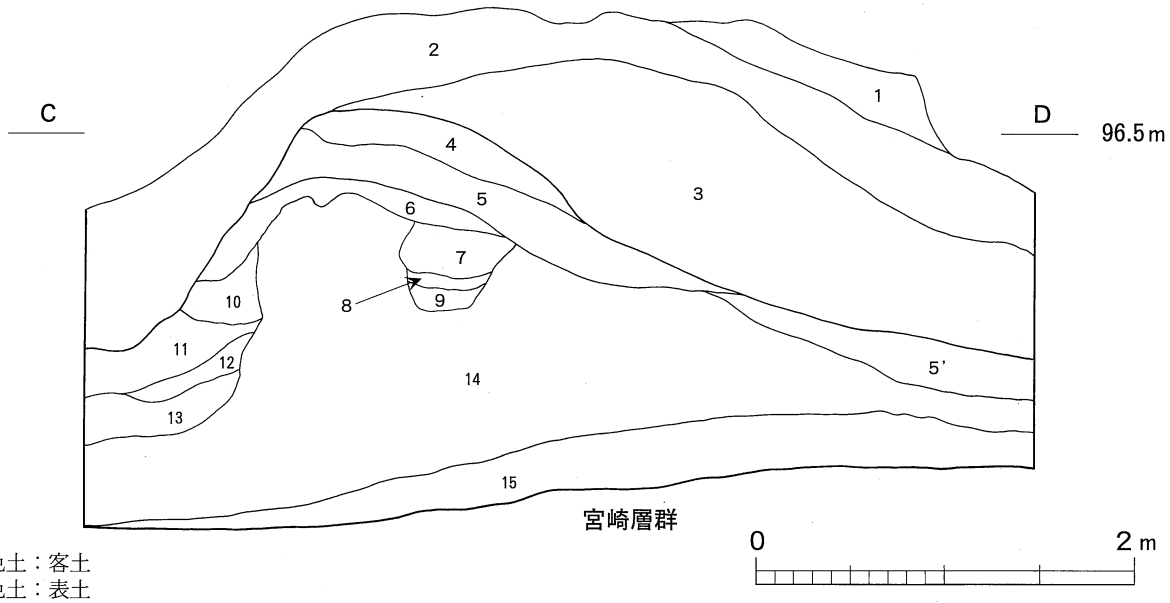
（1）堀切1（第4・11・12図）

北西へ延びる曲輪Ⅶの東端に位置し、曲輪Ⅷとの間の丘陵基部を南北に分断している。シラス層の尾根を「V」字状に深く掘り込んだ片薬研状の堀切である。長さ（底面の長さ）約6.5m、最大幅2.6m、底面幅約1.4m、中央部の深さは3.6mを計る。床面は、中央部から北西に向かって緩やか

第７図　曲輪Ⅴ・Ⅵ 遺構分布図（1/250）

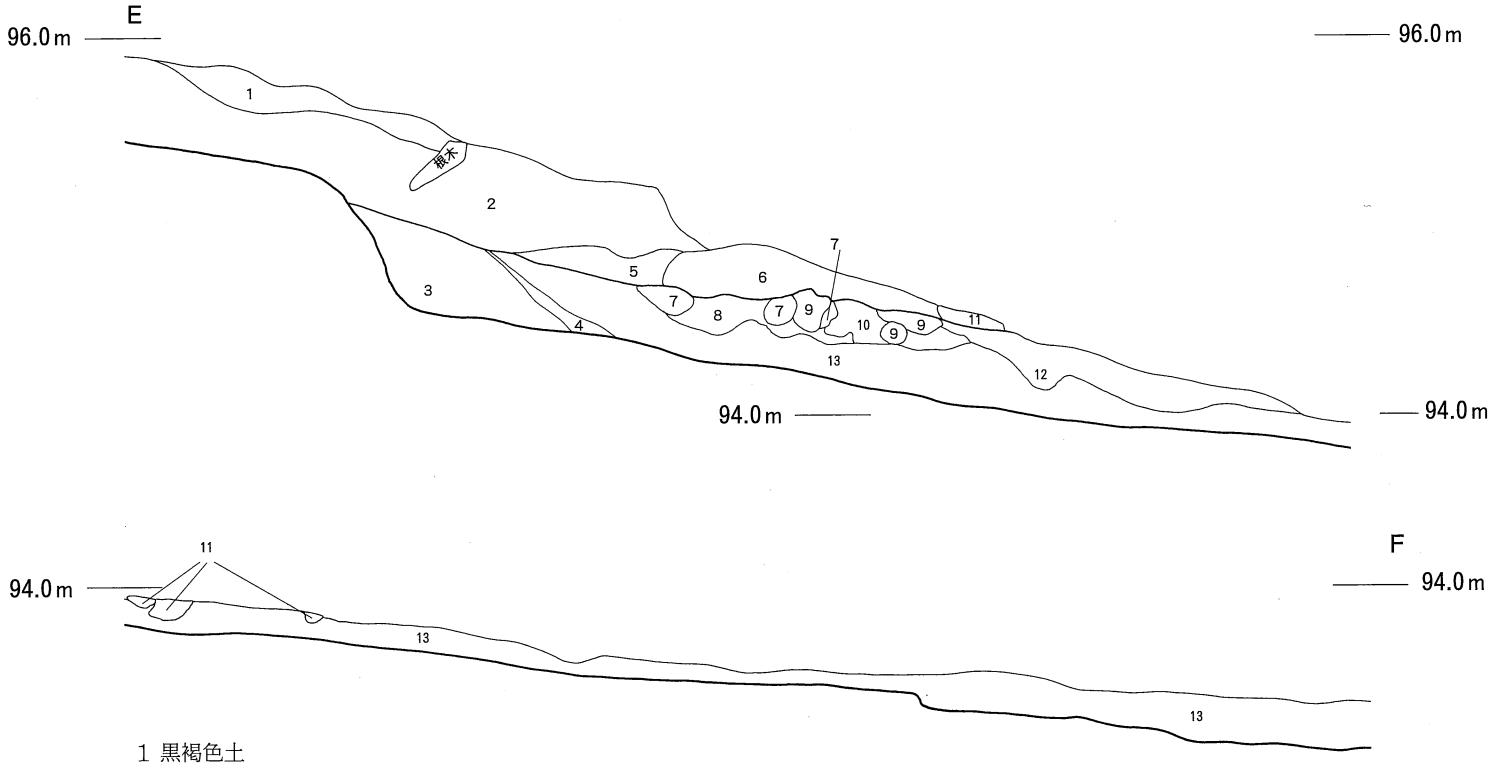


第８図　曲輪Ⅴ－Ⅵ 断面図（1/40）



1 黒褐色土：客土
2 暗褐色土：表土
3 褐色土：土師器片を混入する。
4 褐色土：シラス細粒をわずかに含む。
5 淡褐色土：１㎝程の淡黄色シラスブロックをまばらに含む。
5' 淡褐色土：２㎝程の灰白色シラスブロックをまんべんなく含む。
6 淡黄褐色土：２㎝程の淡黄色シラスブロックを多量に含む。
7 淡黄褐色土：砂質は５層に似る。
8 淡褐色土：１㎝程の灰白色シラスブロックを少量含む。
9 淡黄褐色土：１㎝程の灰白色シラスブロックをまばらに含む。
10 褐色土：淡黄色・灰白色シラスを多量に含む。
11 暗褐色土：砂質は６層に似る。やや濁り弱い粘性を帯びる。
12 褐色土：淡黄色シラスを多量に含む。
13 灰白色土：14層に似るがやや濁る。成形後に埋まったものか？
14 灰白色土：シラス
15 淡黄色土：シラス

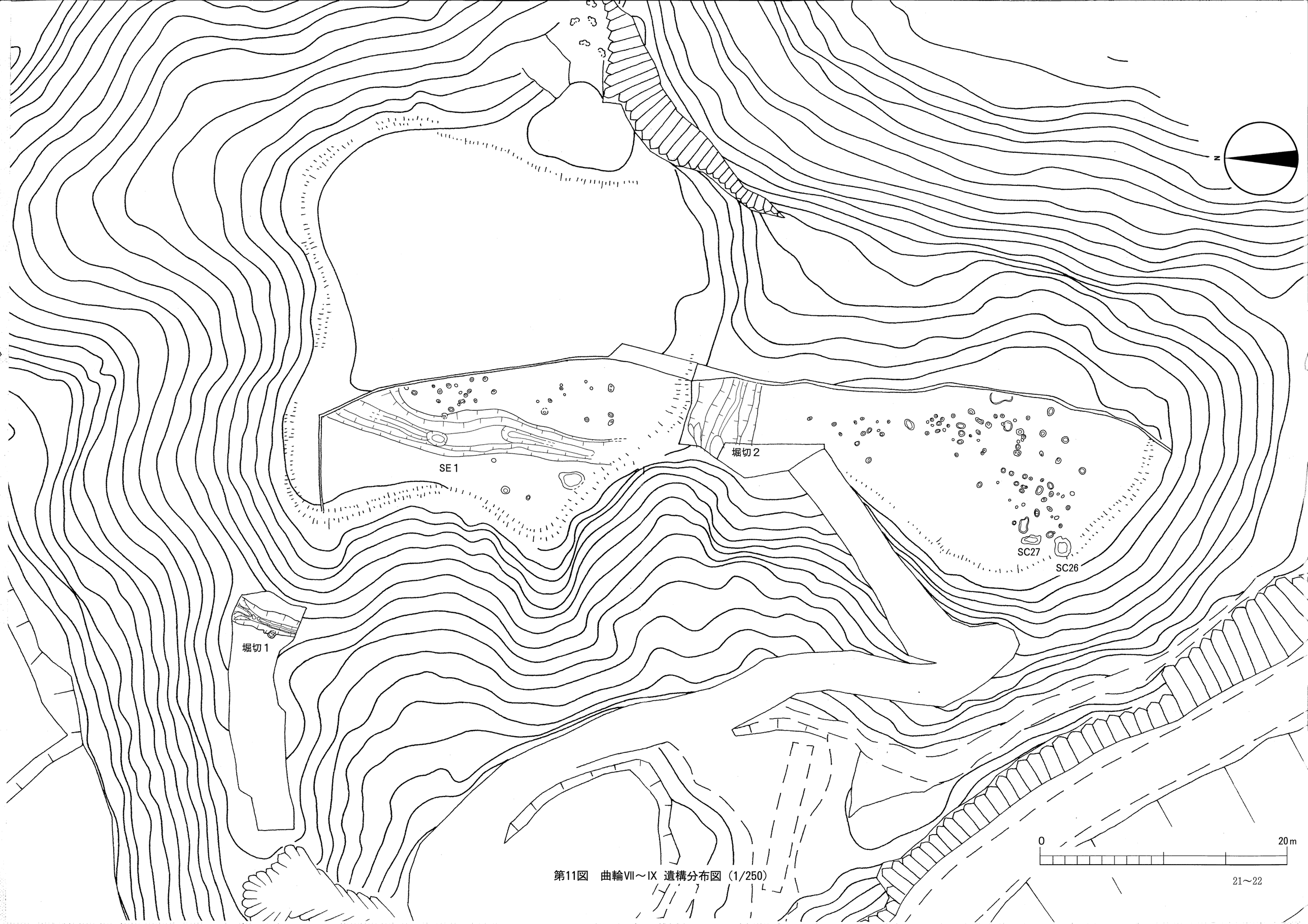
第９図　曲輪Ⅵ 土塁断面図（1/40）



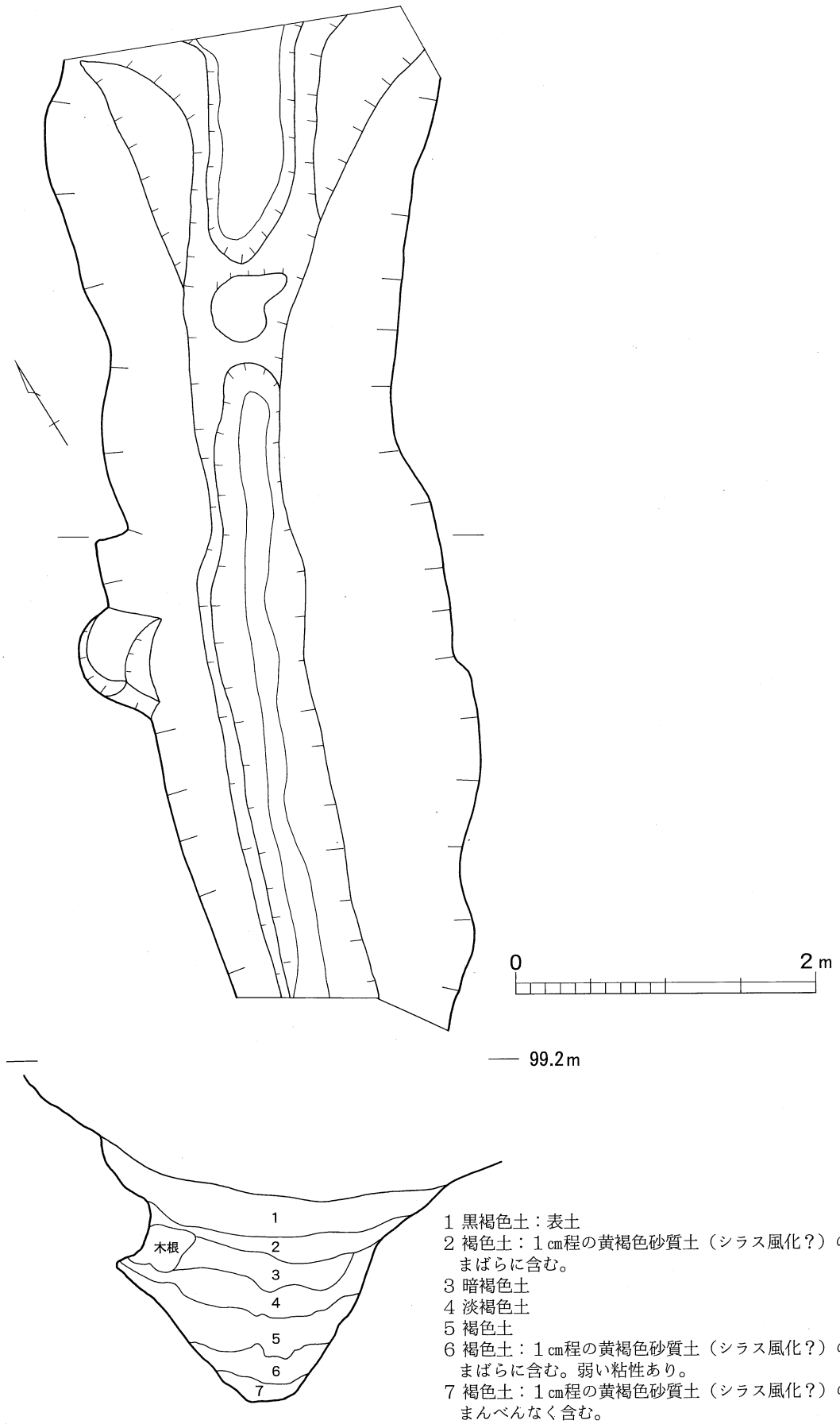
1 黒褐色土
2 淡黄褐色土：シラスの風化？
3 灰白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）をまんべんなく含む。
4 灰白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）をまばらに含む。
5 乳白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）を多量に含む。
6 明褐色土：２～５㎝程の淡橙色ブロックをまばらに含む。
7 灰白色土ブロック
8 乳白色土：砂質は７層に似る。橙色ブロックを含む。
9 灰白色土：橙色ブロックを多量に含む。
10 橙色ブロック
11 淡黄褐色土ブロック
12 灰白色土：橙色・乳白色ブロックを少量含む。
13 灰白色土：シラス（地山）

0　2m

第10図　曲輪VI 道１土層断面図（1/40）

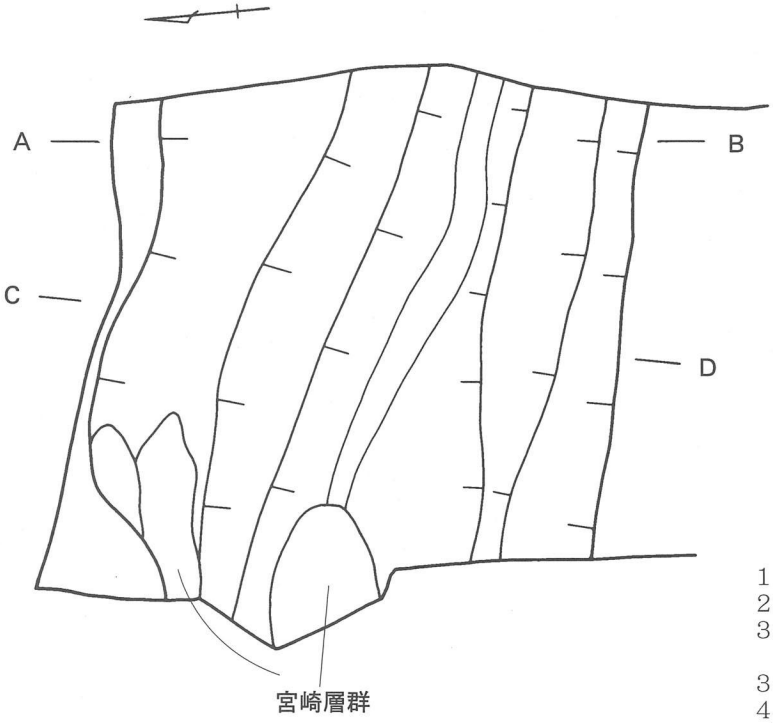


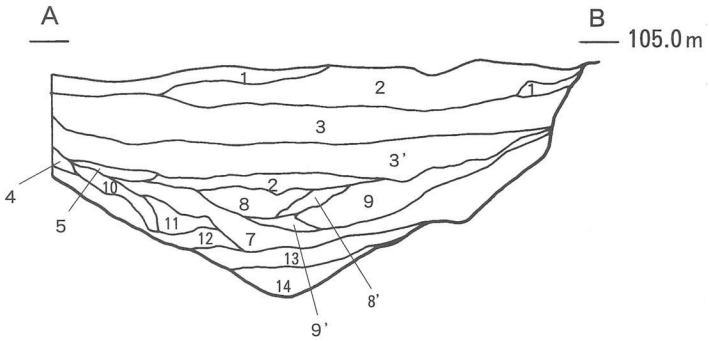
第11図　曲輪Ⅶ～Ⅸ 遺構分布図（1/250）



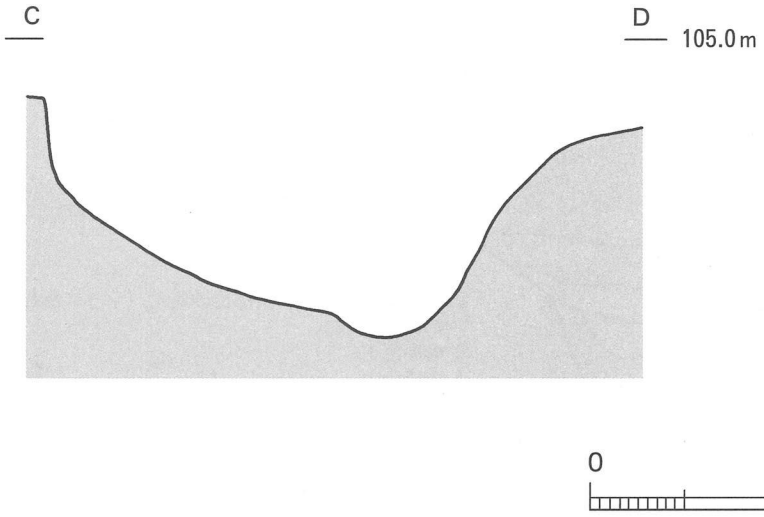
1 黒褐色土：表土
2 褐色土：1㎝程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまばらに含む。
3 暗褐色土
4 淡褐色土
5 褐色土
6 褐色土：1㎝程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまばらに含む。弱い粘性あり。
7 褐色土：1㎝程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまんべんなく含む。

第12図　曲輪Ⅶ 堀切1平面・土層断面図（1/40）





1 黒色土：表土
2 黒褐色土：表土
3 暗褐色土：黄色シラス粒をまばらに含む。
3' 暗褐色土：黄色シラス粒を少量含む。
4 淡黄色土：シラス・硬質
5 暗褐色土
6 褐色土：砂質は５層に似る。灰白色シラスブロックを混入する。
7 暗褐色土：砂質は５層に似るがやや濁る。
8 褐色土：炭化物を少量混入する。
8' 褐色土：炭化物を多量に混入する。
9 灰褐色土：炭化物をまばらに含む。
9' 灰褐色土：９層よりやや暗く粘性をもつ。
10 明褐色土：2cm～5cmの黄色シラスブロックを少量混入する。
11 明褐色土：2cm～5cmの黄色シラスブロックを多量混入する。
12 明褐色土：黄色・灰白色シラスブロックを混入する。（硬質）
13 明褐色土：黄色・濁った灰白色シラスブロックを混入し、粘性を帯びる。
14 橙色シラス



第13図　曲輪Ⅷ 堀切２平面・断面・土層断面図（1/80）

な傾斜をもつ。曲輪Ⅷ側から堀底床面の標高差は5.8ｍを計る。堀切１の床面からヘラ切り底の土師器坏（第24図１）が出土している。

５　曲輪Ⅷ（第４・11図）

谷を挟んで曲輪Ｖの南に位置し、面積1,145㎡を計る。東側の調査区外に周囲約30ｍ、現況の高さ１ｍの見張り台と考えられる壇上の高まりがあり、里道を見下ろせる位置関係にある。

南側では地山成形後、造成されたと考えられる土塁の痕跡が認められた。西側縁辺にはわずかながら周囲より高い部分があり土塁の痕跡と考えられたが、土層の断面では確認することはできなかった。曲輪内からは、ほぼ南北方向に延びる溝状遺構１条（SE１）が糸切り底の土師皿を伴って検出された。柱穴は検出されるものの調査区が曲輪の一部であるため掘立柱建物として復元できるものはなかった。柱穴は主として調査区の東側に検出されることから、建物本体の存在はさらに曲輪の東に広がるものと推定される。

（１）堀切２（第４・11・13図）

堀切２は曲輪Ⅷと曲輪Ⅸを分断している。堀切２の東側は調査対象区域外のため不明であるが、曲輪Ｘにとりつくと考えられる道への延長が想定される。調査区内における堀切２の長さは６ｍ、最大幅は5.6ｍを計る。床面幅は底面から立ち上がる角部は既に崩れていると思われ、形状は箱薬研状で1.2ｍ幅に掘っている。深さは曲輪Ⅷ側で5.2ｍ、曲輪Ⅸ側で２ｍを計る。床面は検出面から３ｍを計り基盤層の宮崎層群に達している。丘陵基部や尾根側から曲輪Ⅷへの進入は非常に困難を伴うと推定される。堀底付近の埋土から15世紀代の龍泉窯系の盤（第33図205）が出土している。

（２）１号溝状遺構（SE１）（第11・14図）

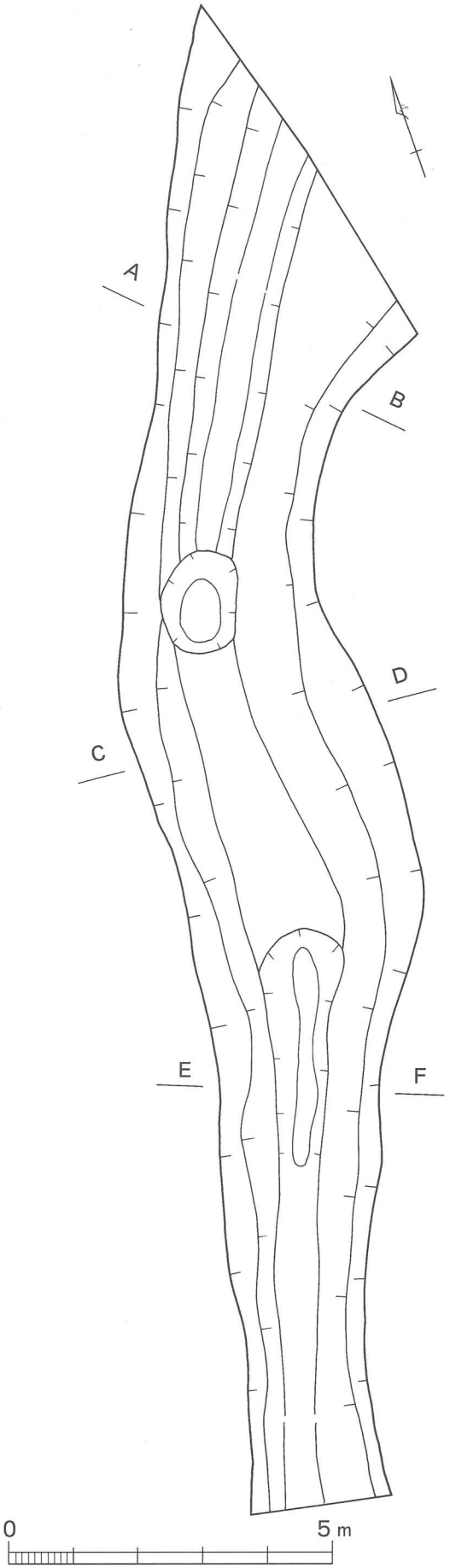
SE１は曲輪Ⅷの西縁、調査区の中央を曲輪Ⅸに向かってＮ32°Ｅの方向に延びる。床面は北側から南側にかけて深くなり、断面形は「Ｕ」字状を呈する。覆土は褐色土・黄色土・シラスのブロックを多量に含んだ層が主体となり、比較的短時間に埋没したような状況である。覆土中から土師器皿（第24図24）が１点出土している。計測値は、長さ約21.5ｍ、最大幅約４ｍ、深さは最深部で1.8ｍを計る。溝状遺構より西側は曲輪縁辺にかけて遺構密度は低く、遺物の出土もほとんど見られない。

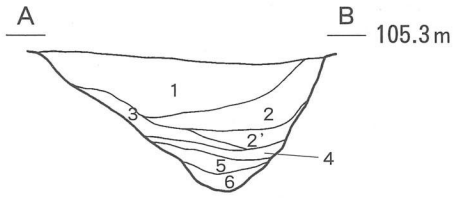
６　曲輪Ⅸ（第４・11図）

曲輪Ⅷの南側に位置し標高にして約２ｍ程低く、東側に腰曲輪を有する。面積は500㎡。遺構はピットが数個と土坑が２基確認された。西側の斜面部分については、工事に伴う土取りによって下段の曲輪の形状および範囲は確定できなかった。曲輪の南縁には土塁の痕跡が一部現存しており、他方の縁辺部にも若干の高まりも見られることから曲輪の四周に土塁が巡っていた可能性が高いと考えられる。

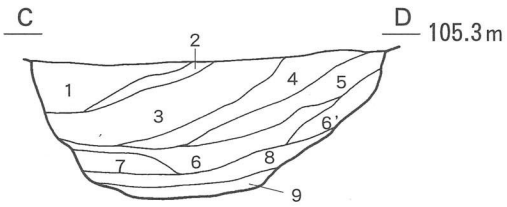
（１）土坑（SC）（第11・23図）

曲輪Ⅸの西縁辺で２基の土坑（SC26・27）を確認した。ともに土塁状の痕跡の残る高まりの内側に南北に並ぶように位置している。遺物を伴っているものはなく、土坑の性格については不明である。遺構の計測値や詳細については表２を参照されたい。

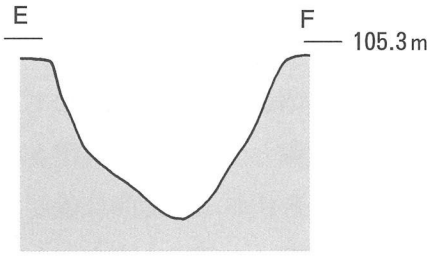




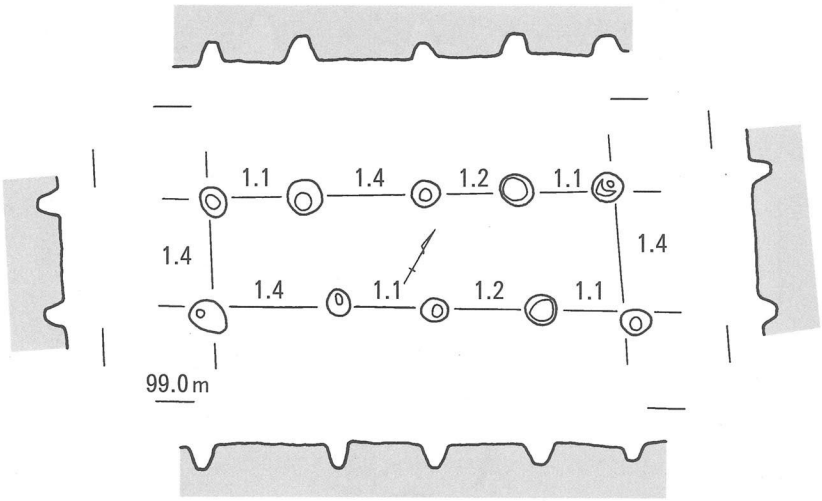
1 褐色土：やや橙色味を帯びて濁る。
2 明褐色土：1㎝程の黄色シラスブロックをわずかに含む。
2' 明褐色土：1㎝程の黄色シラスブロックを多量に含む。
3 暗褐色土：土師器片混入。1㎝程の黄色シラスブロックを含む。
4 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックをまんべんなく含む。
5 褐色土：2㎝程の黄色シラスブロックを含む。
6 明褐色土：5層よりやや明るく粘性を帯びる。



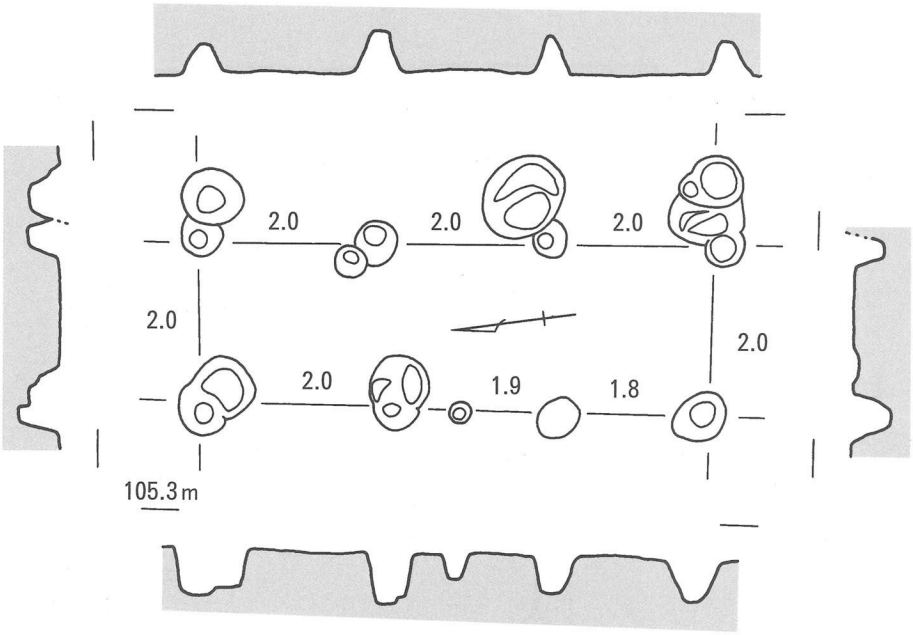
1 褐色土：やや橙色味を帯びて濁る。
2 黒褐色土
3 暗褐色土：土師器片混入。1㎝程の黄色シラスブロックを含む。
4 明褐色土：1㎝程の黄色シラスブロックをわずかに含む。
5 明褐色土：1㎝程の黄色シラスブロックを多量に含む。
6 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックをまんべんなく含む。
6' 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックを少量含む。
7 淡褐色土
8 褐色土：2㎝程の黄色シラスブロックを含む。
9 明褐色土：8層よりやや明るく粘性を帯びる。



第14図　曲輪Ⅷ SE１平面(1/100)、断面・土層断面図(1/80)

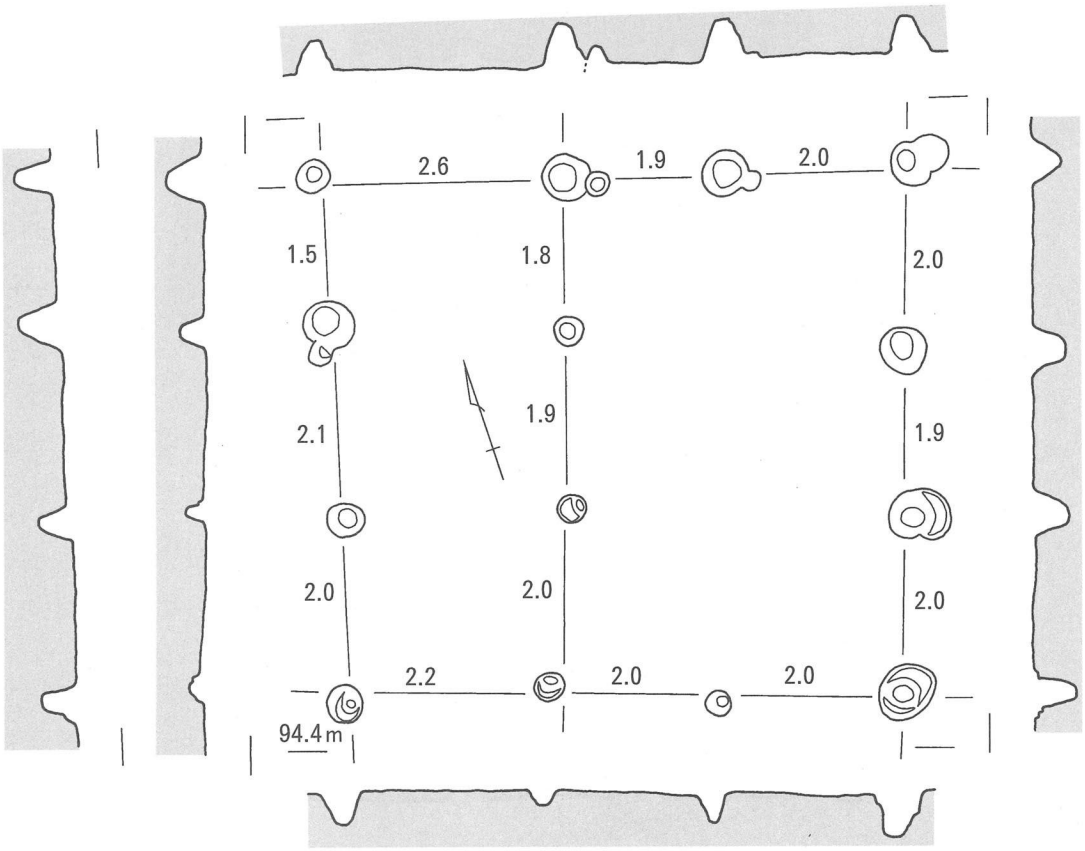


SB 1

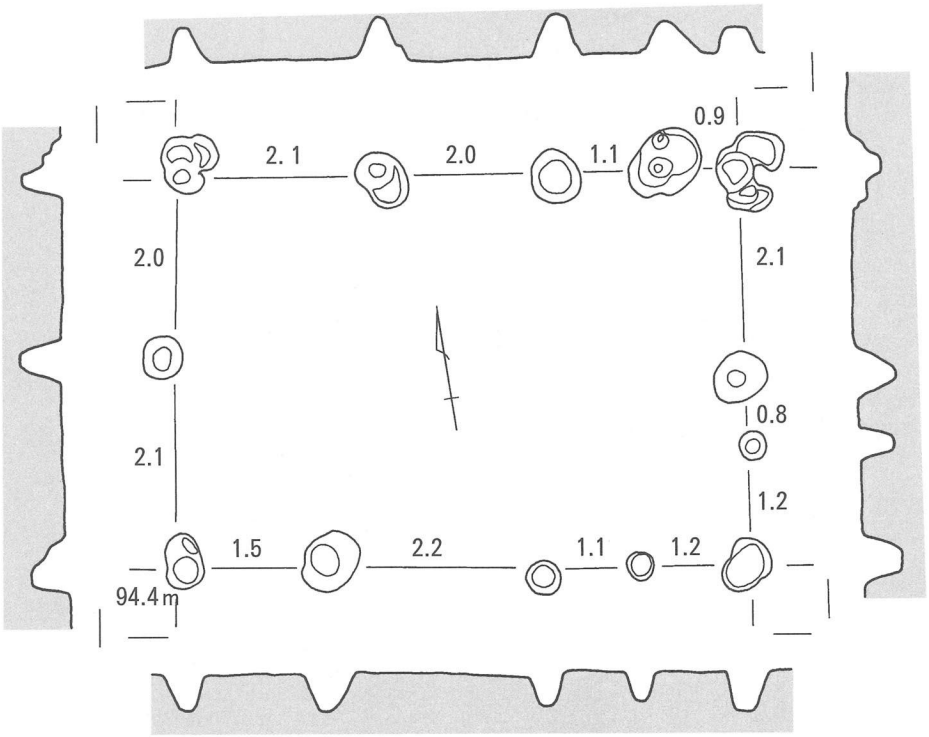


SB 2

第15図　SB１・SB２（1/80）

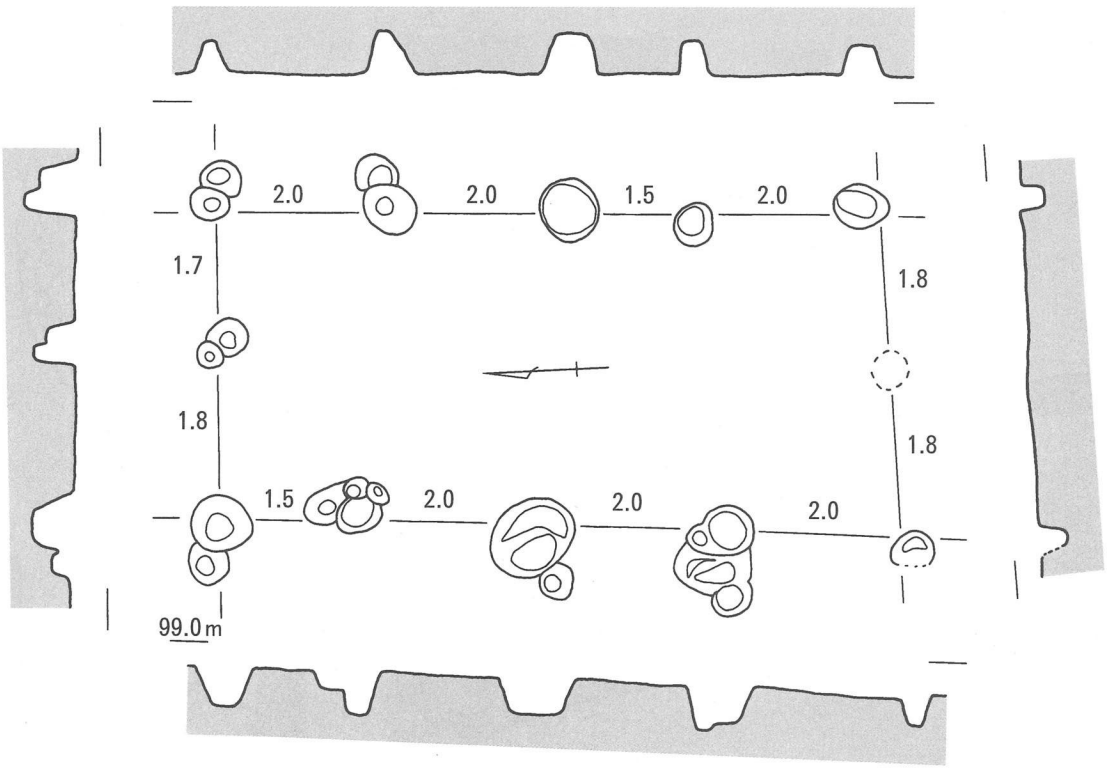


SB 3

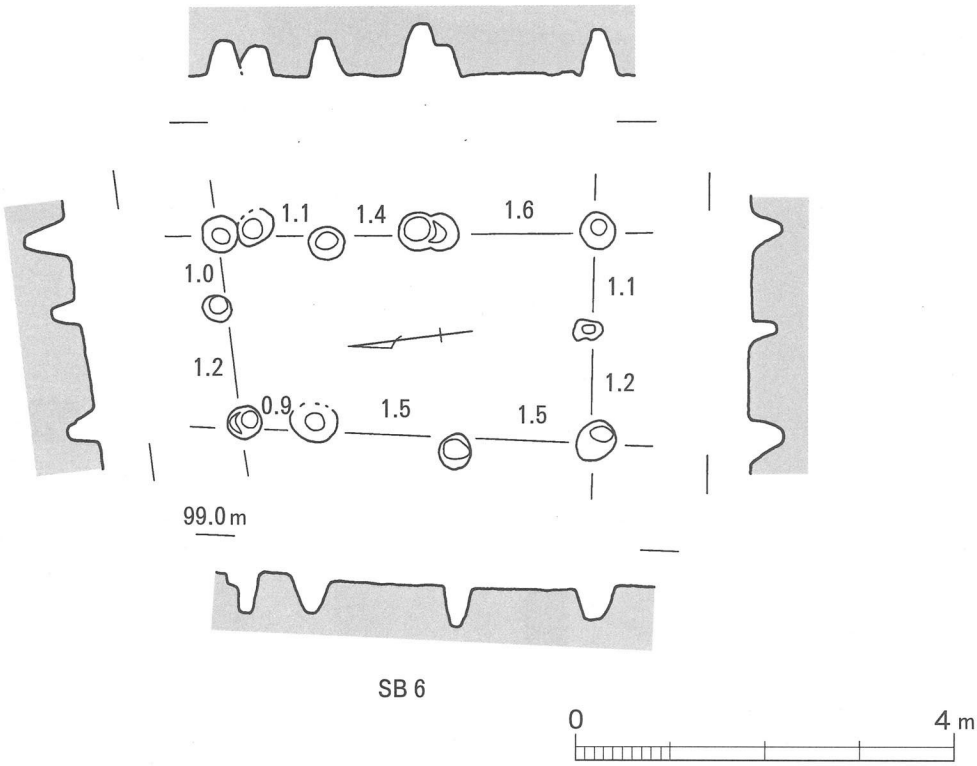


SB 4

第16図　SB３・SB４（1/80）

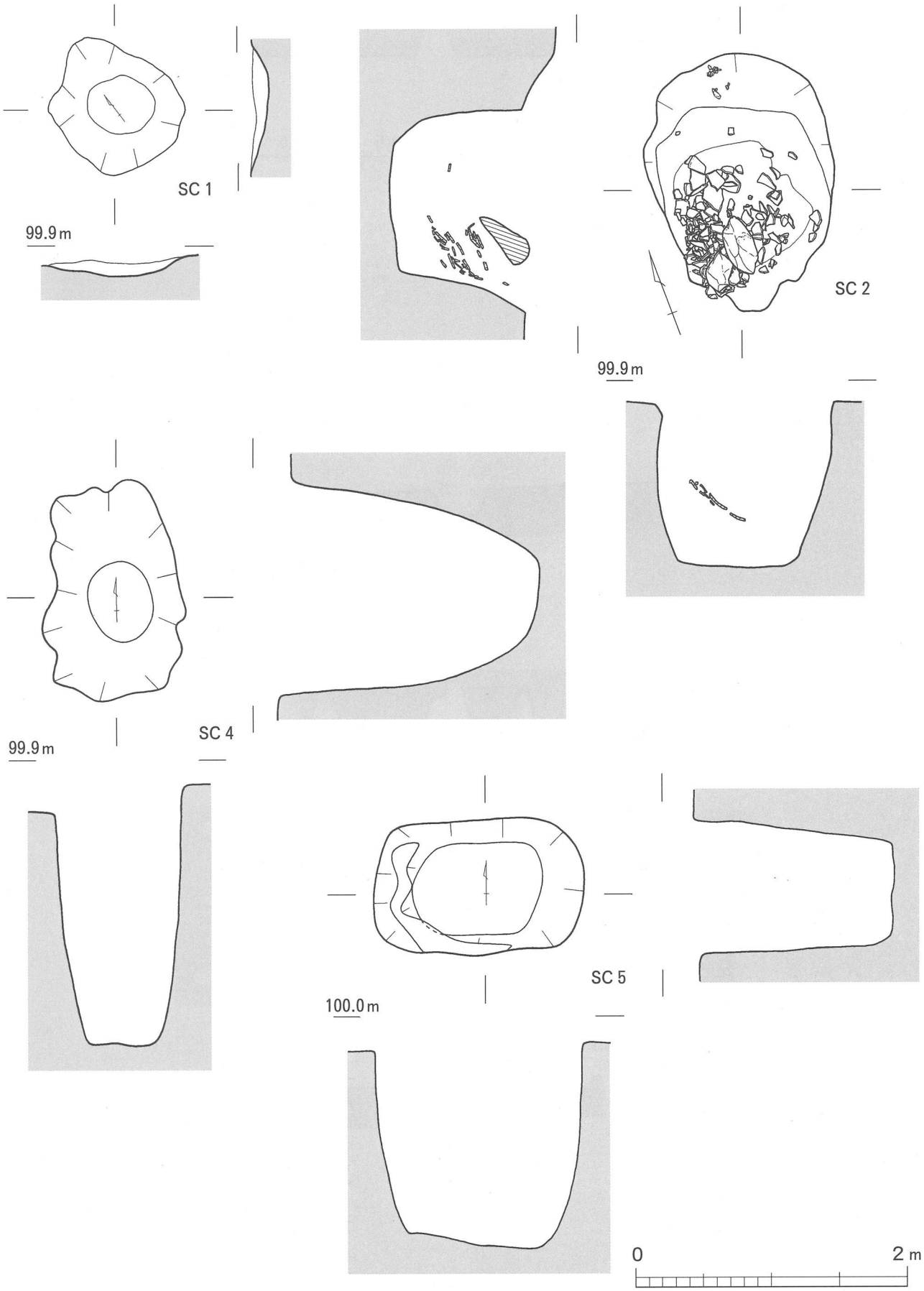


SB 5

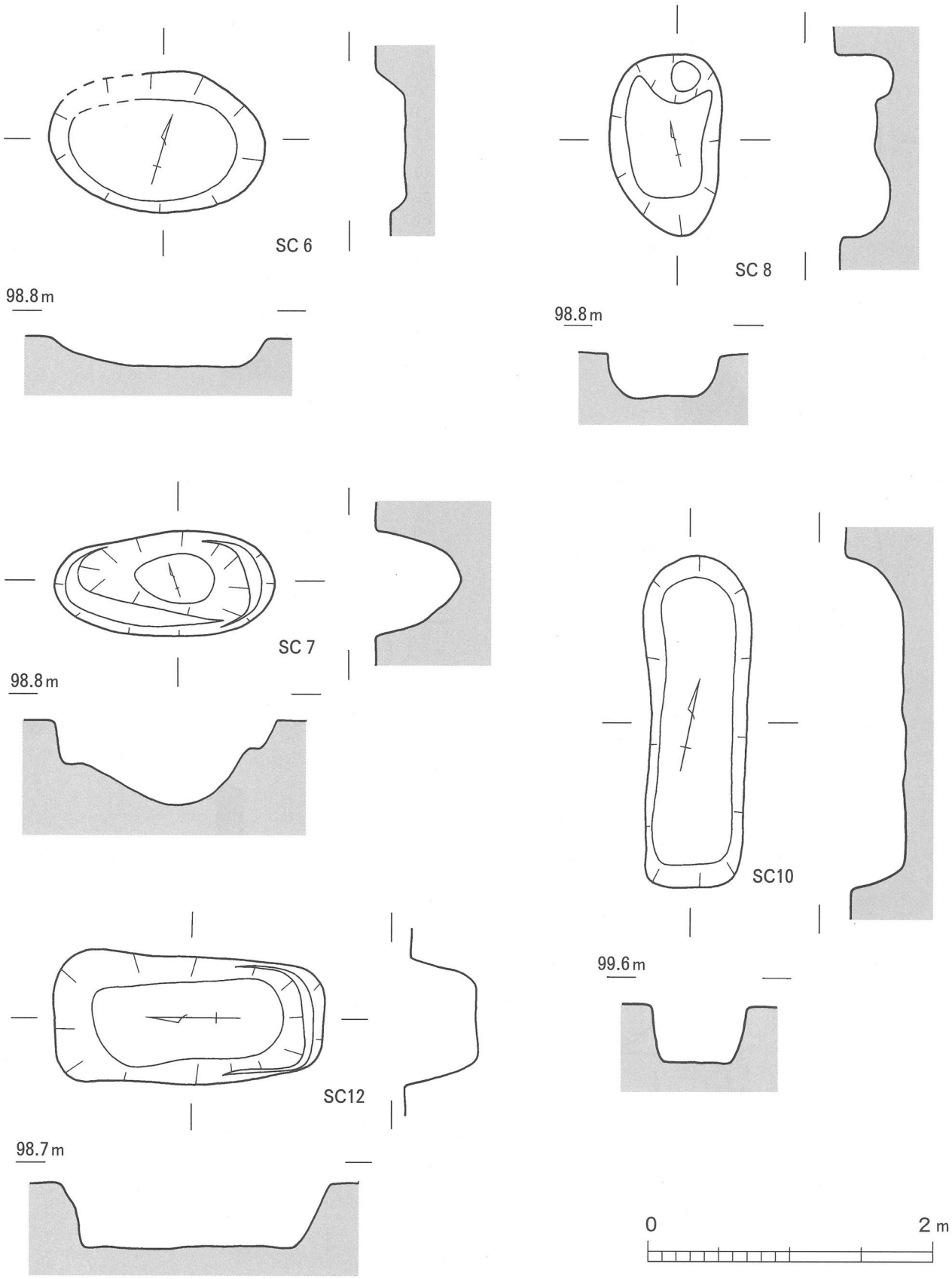


SB 6

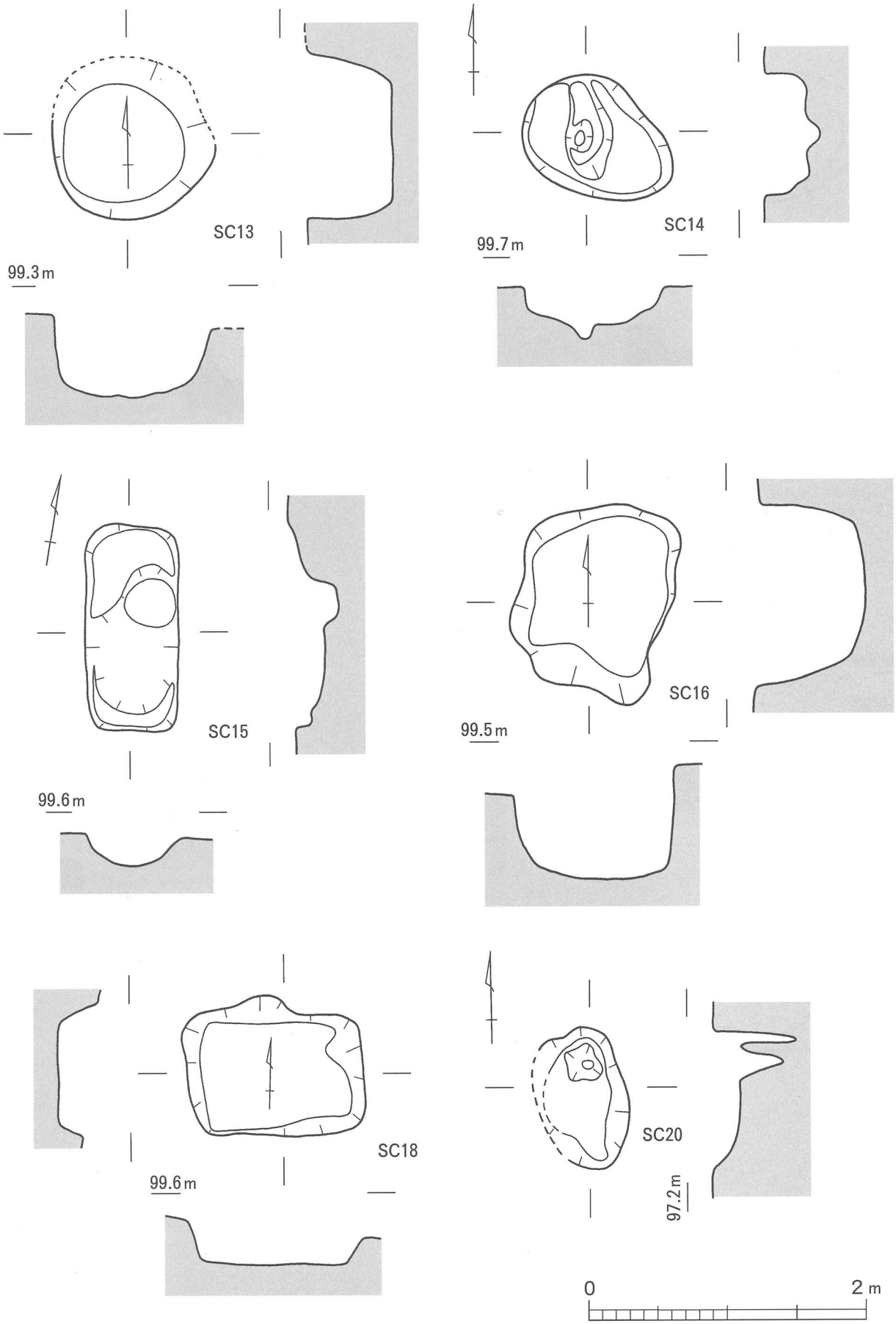
第17図　SB５・SB６（1/80）



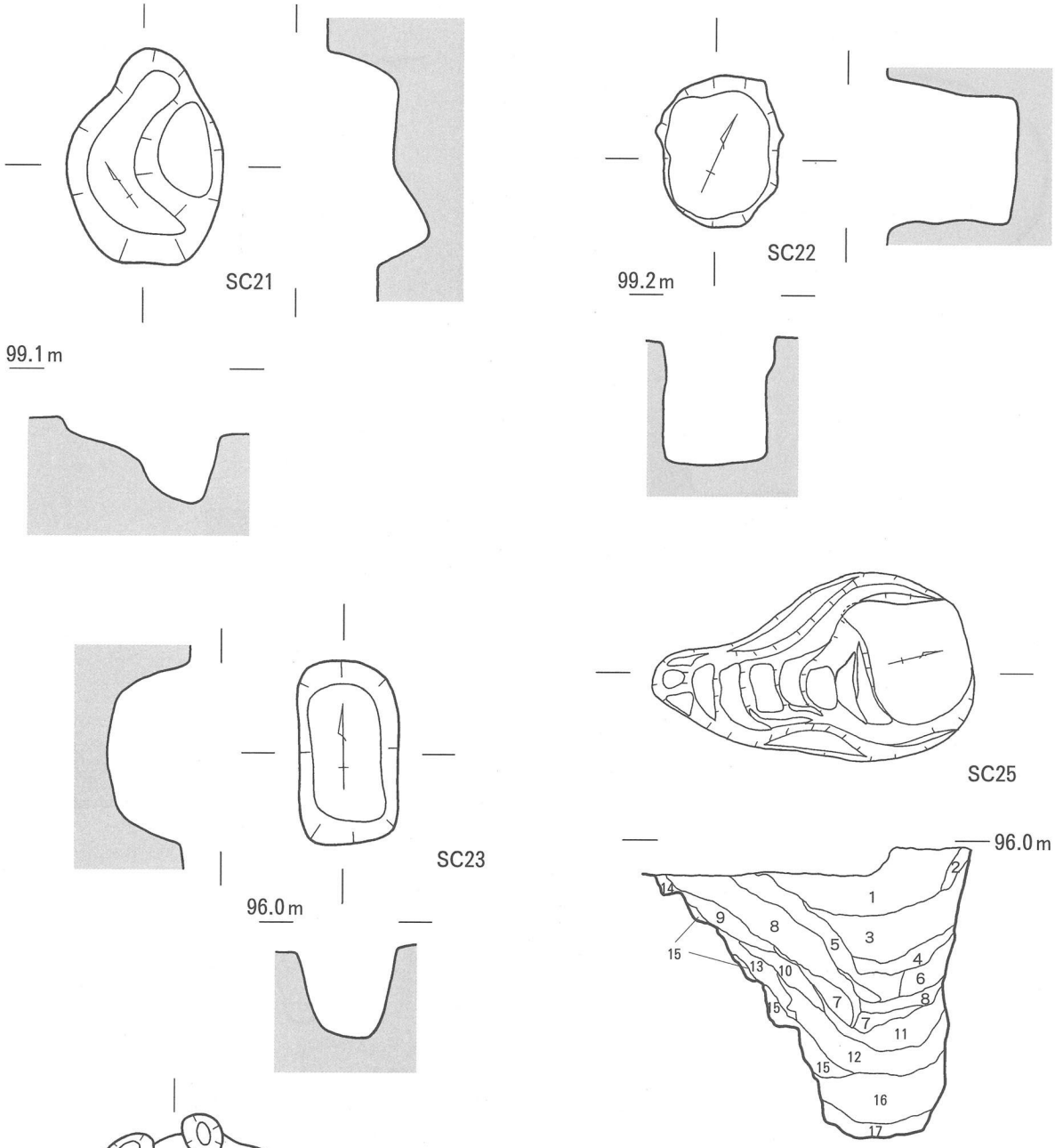
第18図　SC１・SC２・SC４・SC５（1/40）



第19図　SC６～SC８・SC10・SC12（1/40）

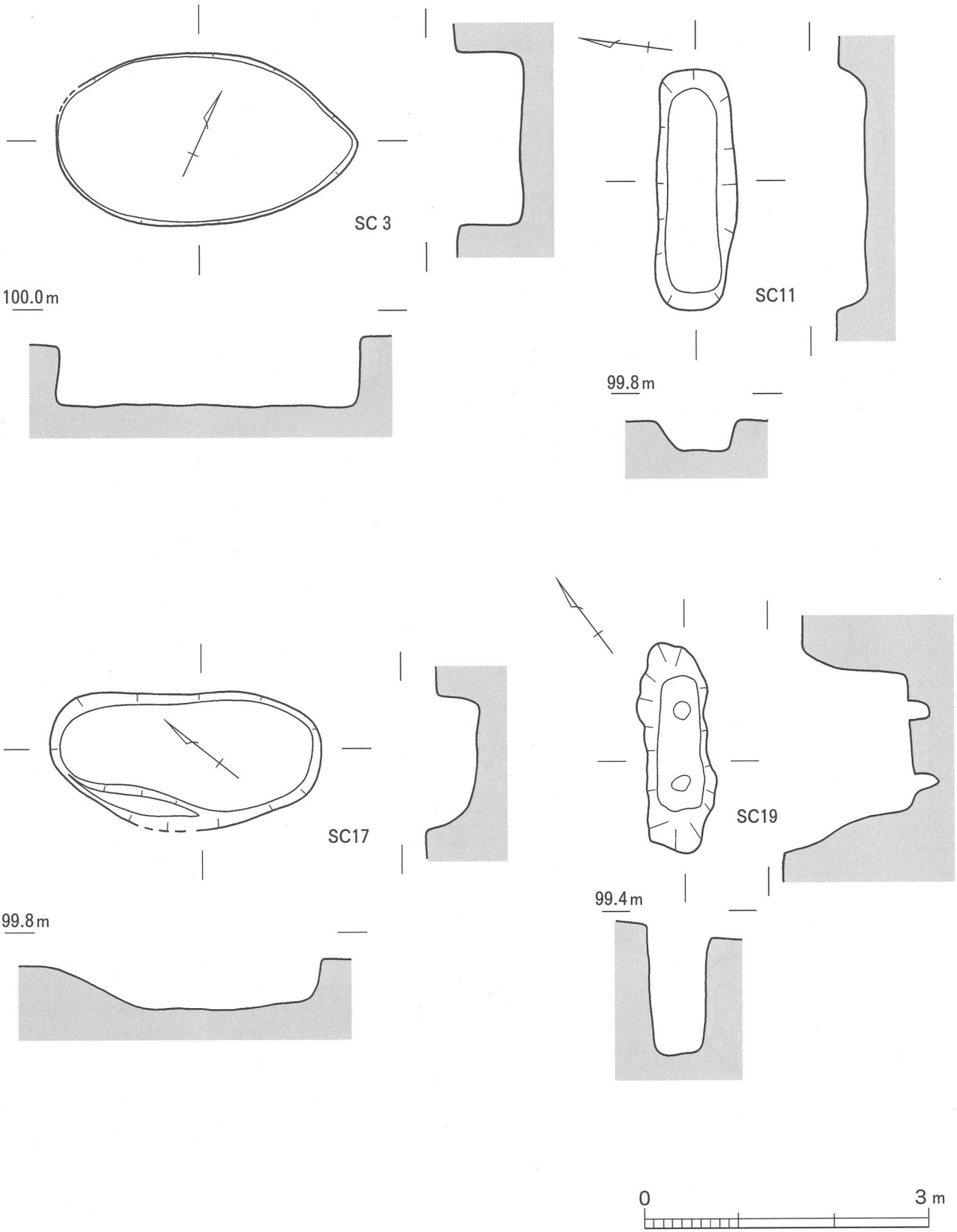


第20図　SC13～SC16・SC18・SC20（1/40）

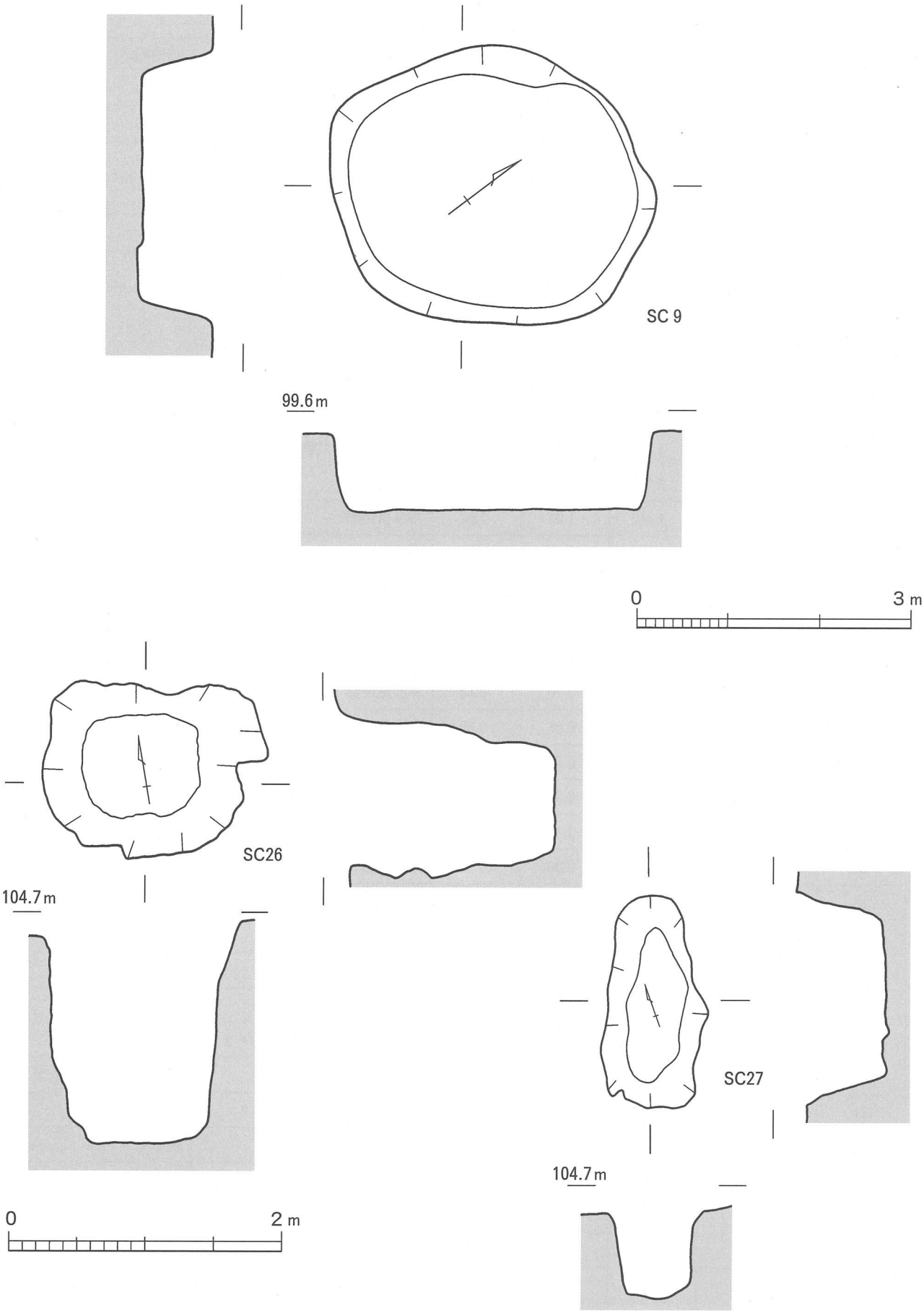


1 灰褐色土（検出面）
2 灰褐色土：淡横橙色ブロックを混入。
3 褐色土：２㎝から５㎝の濁橙色と淡黄色ブロックを多量に混入。
4 褐色土：３に似るがブロックを含まない。
5 淡褐色土：１㎝程度の橙色ブロック・白色ブロックを少量含む。
6 褐色土
7 灰褐色土：１に似るが橙色ブロック・白色ブロックをまんべんなく含む。
8 灰褐色土：７に似るがブロックを多量に含む。
9 褐色土：６に似る。
10 濁褐色土
11 暗褐色土
12 淡褐色土：橙色ブロック・白色ブロックを少量含む。
13 淡褐色土：橙色ブロック・白色ブロックを多量に含む。
14 灰褐色土
15 灰色土：シラスの風化？
16 淡黄褐色土：15をブロック状に含む。
17 シラス：地山

第21図　SC21～SC25（SC21～SC24は1/40、SC25は1/80）



第22図　SC３・SC11・SC17・SC19（1/60）



第23図　SC９・SC26・SC27（SC９は1/60、SC26・27は1/40）

第１表　掘立柱建物（SC）計測表

遺構番号	検出位置	主 軸 方 位	規　模	桁行き(m)	梁行き(m)	面積(㎡)	重複関係	備　考
SB１	曲輪Ⅳ	N－65°－E	１間×４間	1.4	4.8	6.7		
SB２	曲輪Ⅳ	N－　7°－E	１間×３間	2.0	6.0	12.0	SB３	
SB３	曲輪Ⅳ	N－　6°－E	２間×４間	3.6	7.5	27.0	SB２	
SB４	曲輪Ⅳ	N－　9°－E	２間×３間	2.3	4.0	9.2		
SB５	曲輪Ⅵ	N－20°－E	２間×３間	4.0	4.9	19.6		西庇
SB６	曲輪Ⅵ	N－５°30’－E	２間×３間	4.1	6.0	24.6		

第２表　土坑（SC）計測表

遺構番号	検出位置	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平　面　プ　ラ　ン	断面形態	備　考
1	曲輪Ⅴ北西	1.01	0.94	0.12	不整円形	皿形	土製人形
2	曲輪Ⅴ南西	1.90	1.40	1.11	不整楕円形、北側にテラス	箱形	備前甕
3	曲輪Ⅴ南西	3.28	1.78	0.76	不整楕円形	箱形	
4	曲輪Ⅴ北縁	1.49	1.02	1.82	不整楕円形	柱状	
5	曲輪Ⅴ北西	1.52	1.08	1.49	隅丸長方形	柱状	
6	曲輪Ⅴ南東	1.46	0.87	0.15	楕円形	皿形	
7	曲輪Ⅴ南東	1.52	0.78	0.43	楕円形、東西に弧状のテラス	舟底形	
8	曲輪Ⅴ南東縁	1.06	0.64	0.33	隅丸方形	不定凹形	
9	曲輪Ⅴ北東	3.54	3.10	0.84	不整楕円形	箱形	
10	曲輪Ⅴ東	2.24	0.66	0.35	隅丸長方形	箱形	
11	曲輪Ⅴ中央	2.46	0.83	0.33	隅丸長方形	舟底形	土製人形
12	曲輪Ⅴ南東	1.87	0.89	0.50	隅丸長方形、東側にテラス	舟底形	
13	曲輪Ⅴ東	1.18	1.10	0.55	円形	箱形	
14	曲輪Ⅴ北東	1.14	0.90	0.25	不整円形、弧状のテラス２	不定凹形	
15	曲輪Ⅴ東	1.49	0.70	0.32	隅丸長方形、南北にテラス	不定凹形	
16	曲輪Ⅴ北西縁	1.38	1.14	0.70	不整形	箱形	
17	曲輪Ⅴ北	2.82	1.64	0.50	楕円形、西側にテラス	箱形	
18	曲輪Ⅴ南	1.30	1.01	0.27	不整方形	舟底形	
19	曲輪Ⅴ南縁	2.22	0.84	1.56	不整長方形、床面にピット２	箱形	
20	曲輪Ⅴ西側	0.97	0.57	0.42	不整楕円形	不定凹形	土製人形
21	曲輪Ⅴ西縁	1.34	0.86	0.48	不整楕円形、西側にテラス	不定凹形	
22	曲輪Ⅴ北東	0.90	0.75	0.76	円形	箱形	
23	曲輪Ⅵ北	1.23	0.70	0.54	隅丸長方形	舟底形	
24	曲輪Ⅵ北	1.26	1.17	0.27	不整楕円形、ピットとの切合	不定凹形	
25	曲輪Ⅵ北	3.80	2.20	2.04	不整楕円形	階段状	
26	曲輪Ⅸ西縁	1.45	1.26	1.65	不整方形	柱状	
27	曲輪Ⅸ西縁	1.58	0.74	0.67	不整楕円形	箱形	

7　出土遺物

（1）土師器

本遺跡で出土した土師器は、そのほとんどが坏・皿類である。底部の切り離しがヘラ切りであるものは坏・皿ともに出土は少量で、多くが糸切り底である。分布は北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴ、および南側の城の曲輪Ⅷに集中している。ヘラ切り底を（Ⅰ類）、糸切り底を（Ⅱ類）とし、底部からの立ち上がりを３種類（１：直線的なもの、２：やや内湾気味のもの、３：やや外反するもの）、口縁部の形態を２種類（ａ：口縁端部がシャープなもの、ｂ：口縁端部が丸いもの）に分けて分類を行った。

坏Ⅰ類（第24図）

Ⅰ類の坏は出土個体数が少ない。その中で分布は南側の城である曲輪Ⅷからの出土が８割を占める。法量により大きく２つに分かれる。

Ⅰ－Ａ－１　（口径9.7～10.8㎝　器高2.9～3.2㎝　底径5.7～6.8㎝）

底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に立ち上がりそのまま口縁に至る。

ａ　口縁端部がシャープなもの　１

ｂ　口縁端部が丸みをもつ　２

１・２ともに底部の切り離し痕跡が薄い円盤状を呈する

Ⅰ－Ｂ－１　（口径12.1～13.8㎝　器高3.3～4.6㎝　底径7.6～9.0㎝）

底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に外側へ開く。

ａ　口縁端部がシャープなもの　３～７

ｂ　口縁端部が丸みをもつ　８～10

３・４・６・８は底部が円盤状の高台を有する。

６・８は灯明皿として使用されていたと思われ、６は内面８は内外面ともにススの付着が認められる。

皿Ⅰ類（第24図）

ヘラ切り底の皿は、比較的法量がそろう小皿とそれ以外のやや大きめの皿に分けられる。

Ⅰ－Ａ－１　（口径6.2～7.1cm　器高1.3～1.7cm　底径4.7cm～5.7cm ）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

ｂ　口縁端部が丸みをもつ　11・12

Ⅰ－Ｂ－２　（口径7.2～7.8cm　器高1.4～1.9cm　底径5.4cm～6.3cm ）

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。

ａ　口縁端部がシャープなもの　16

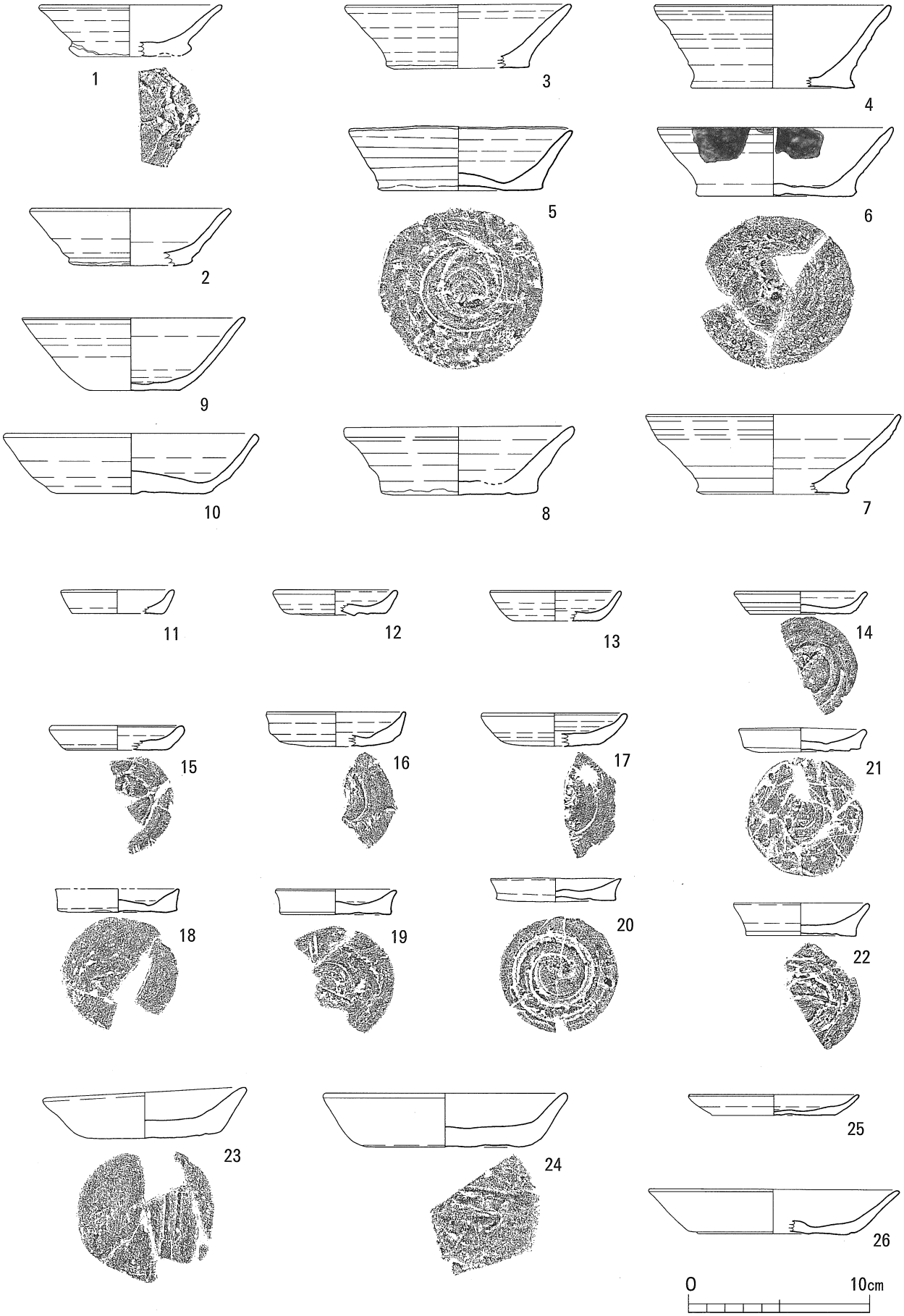
ｂ　口縁端部が丸みをもつ　13～15・17

Ⅰ－Ｃ－３　（口径6.7～7.2cm　器高1.3～1.8cm　底径6.0cm～6.6cm）

底部と体部の境は明瞭で、体部はやや外反気味に立ち上がる。

ａ　口縁端部がシャープなもの　18～20

ｂ　口縁端部が丸みをもつ　21・22



第24図　土師器実測図（１）(1/3)

23～26は、法量にまとまりがみられないやや大きめの皿である。23・24はやや厚手で、体部が外反気味に立ち上がる。25・26は薄手で体部が直線的に立ち上がる。

坏Ⅱ類（第25図～第27図）

Ⅱ類は法量により大きくA～Cの3つのまとまりに分けられる。それを底部付近の調整や立ち上がり、口縁部の形態により細分を行う。

法量	A（口径10.8～11.8cm　器高2.8～3.5cm　底径5.6～8.0cm）	
	B（口径11.8～12.5cm　器高3.2～3.8cm　底径5.0～6.5cm）	
	C（口径12.5～13.5cm　器高4.0～5.0cm　底径6.5～7.0cm）	
底部からの立ち上がり	1	直線的なもの
	2	内湾ぎみなもの
	3	やや外反するもの
口縁部の形態	a	端部がシャープなもの
	b	やや丸みを帯びるもの

Ⅱ－A－1（口径10.8～11.8cm　器高2.8～3.5cm　底径5.6～8.0cm）

底部と体部の境は丸みをもち、直線的に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　27～33

b　口縁端部が丸みをもつもの　34～38

Ⅱ－A－2（口径10.8～11.8cm　器高2.8～3.5cm　底径5.6～8.0cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。底部が薄い円盤状となる。

a　口縁端部がシャープなもの　39

Ⅱ－A－3（口径10.8～11.8cm　器高2.8～3.5cm　底径5.6～8.0cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　40～45

b　口縁端部が丸みをもつもの　46～48

aの 40・41・43～45の底部に板目状の痕跡が認められる。

bの器壁は，厚手である。

Ⅱ－B－2（口径11.8～12.5cm　器高3.2～3.8cm　底径5.0～6.5cm）

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。

a　口縁端部がシャープなもの　49～59

b　口縁端部が丸みをもつもの　60～66

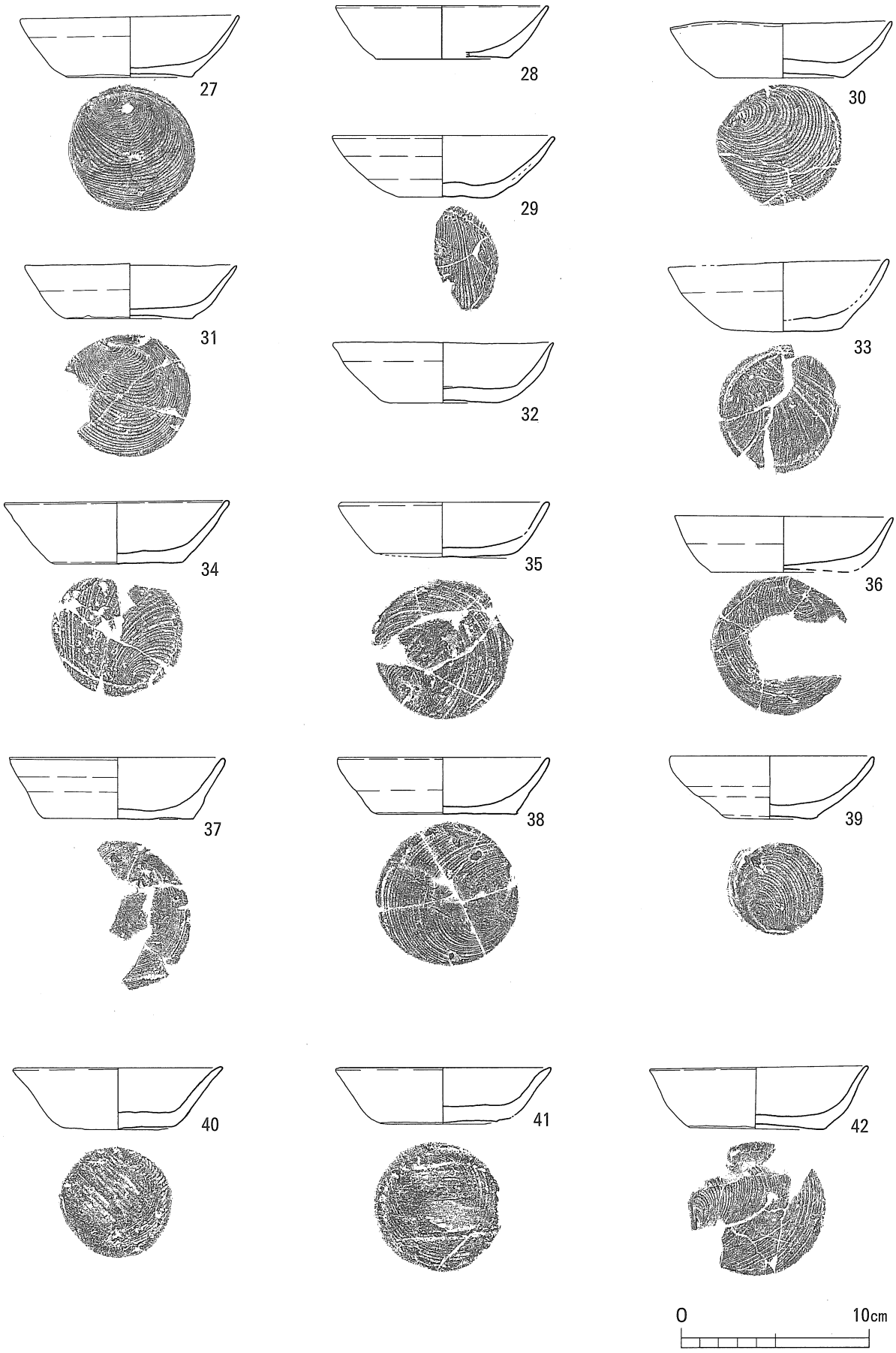
61は、Ⅱ－A－2類に類似している。

Ⅱ－B－3（口径11.8～12.5cm　器高3.2～3.8cm　底径5.0～6.5cm）

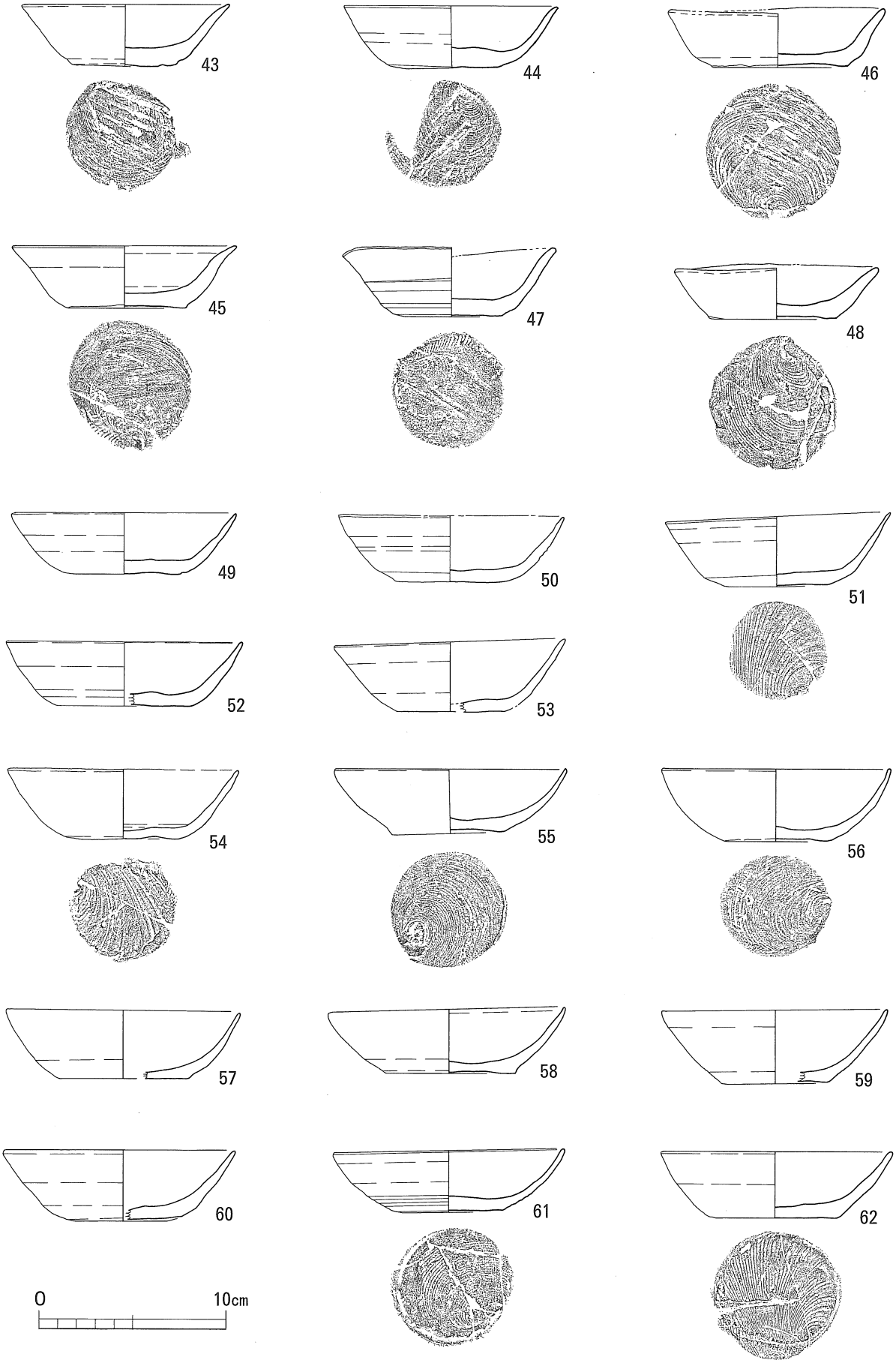
底部と体部の境は丸みをもって立ち上がり，胴部中半より外反する。

a　口縁端部がシャープなもの　67・68

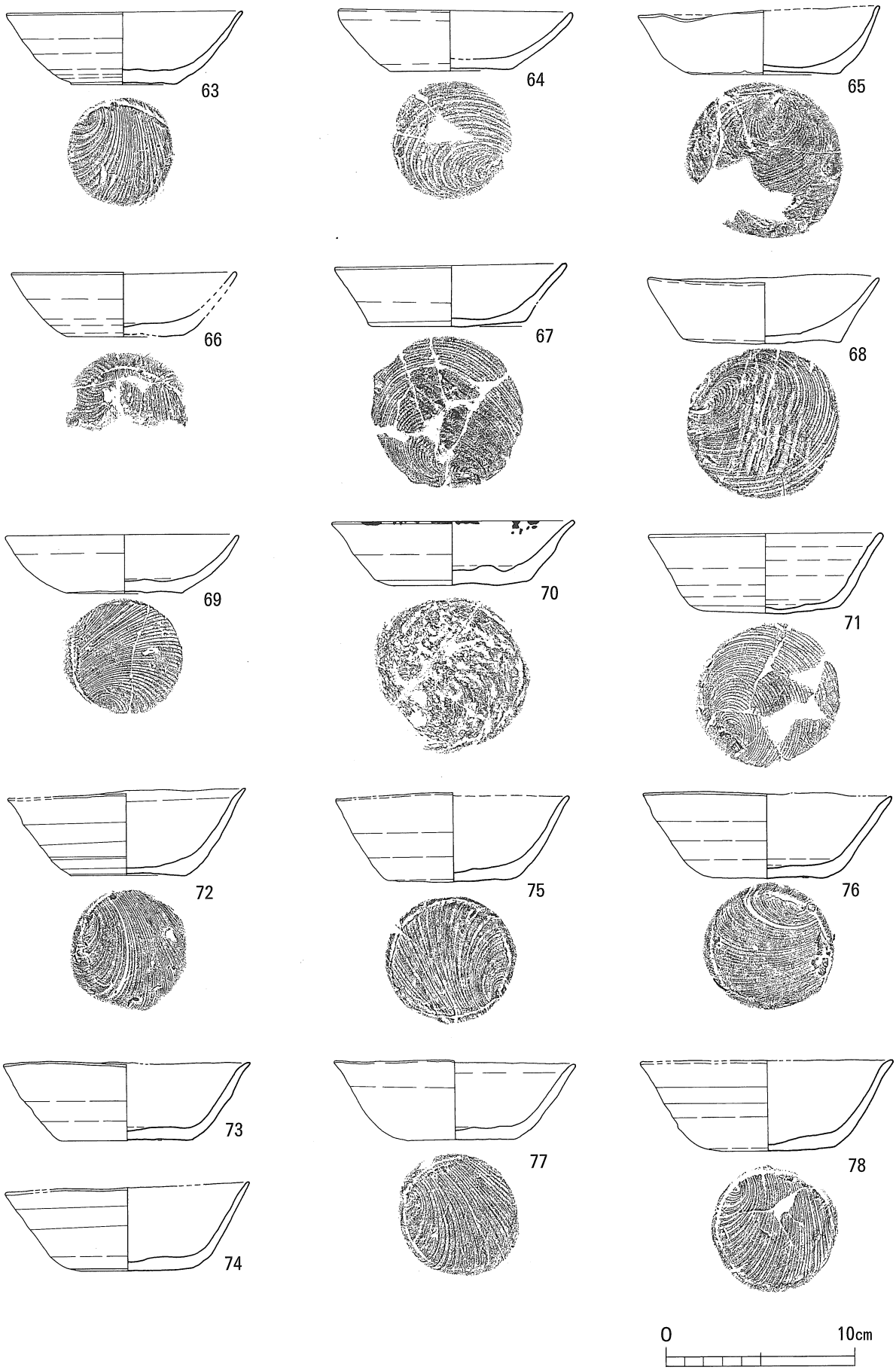
b　口縁端部が丸みをもつもの　69～71



第25図　土師器実測図（２）(1/3)



第26図　土師器実測図（３）(1/3)



第27図　土師器実測図（4）(1/3)

Ⅱ－C－2（口径12.5～13.5cm　器高4.0～5.0cm　底径6.5～7.0cm）

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がり口縁部付近で短く外反する。

a　口縁端部がシャープなもの　72～74

b　口縁端部が丸みをもつもの　75～78

皿Ⅱ類（第28図～第31図）

糸切り底の皿は、本遺跡の土師器ではもっとも出土点数が多く、中でも分布の９割以上が曲輪Ⅴに集中している。法量は、大きくA～Dの４つのまとまりに分けられる。坏同様に底部付近の調整や立ち上がり，口縁部の形態により細分を行う。

法量	A（口径6.8～ 7.4cm	器高1.6～2.0cm　底径3.8～4.3cm）
	B（口径7.4～ 7.9cm	器高1.4～1.8cm　底径4.0～5.5cm）
	C（口径7.4～ 8.2cm	器高1.8～2.4cm　底径3.8～5.4cm）
	D（口径10.9～13.4cm	器高2.1～3.4cm　底径5.8～8.0cm）
底部からの立ち上がり	1　直線的なもの	
	2　内湾ぎみなもの	
	3　やや外反するもの	
口縁部の形態	a　端部がシャープなもの	
	b　やや丸みを帯びるもの	

Ⅱ－A－1（口径6.8～7.4cm　器高1.6～2.0cm　底径3.8～4.3cm）

底部と体部の境は丸みをもち、直線的に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　79～83

b　口縁端部が丸みをもつもの　84～87

Ⅱ－A－2（口径6.8～7.4cm　器高1.6～2.0cm　底径3.8～4.3cm）

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。

b　口縁端部が丸みをもつもの　88～94

Ⅱ－A－3（口径6.8～7.4cm　器高1.6～2.0cm　底径3.8～4.3cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

b　口縁端部が丸みをもつもの　95

Ⅱ－B－1（口径7.4～7.9cm　器高1.4～1.8cm　底径4.0～5.5cm）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　96～99

b　口縁端部が丸みをもつもの　100

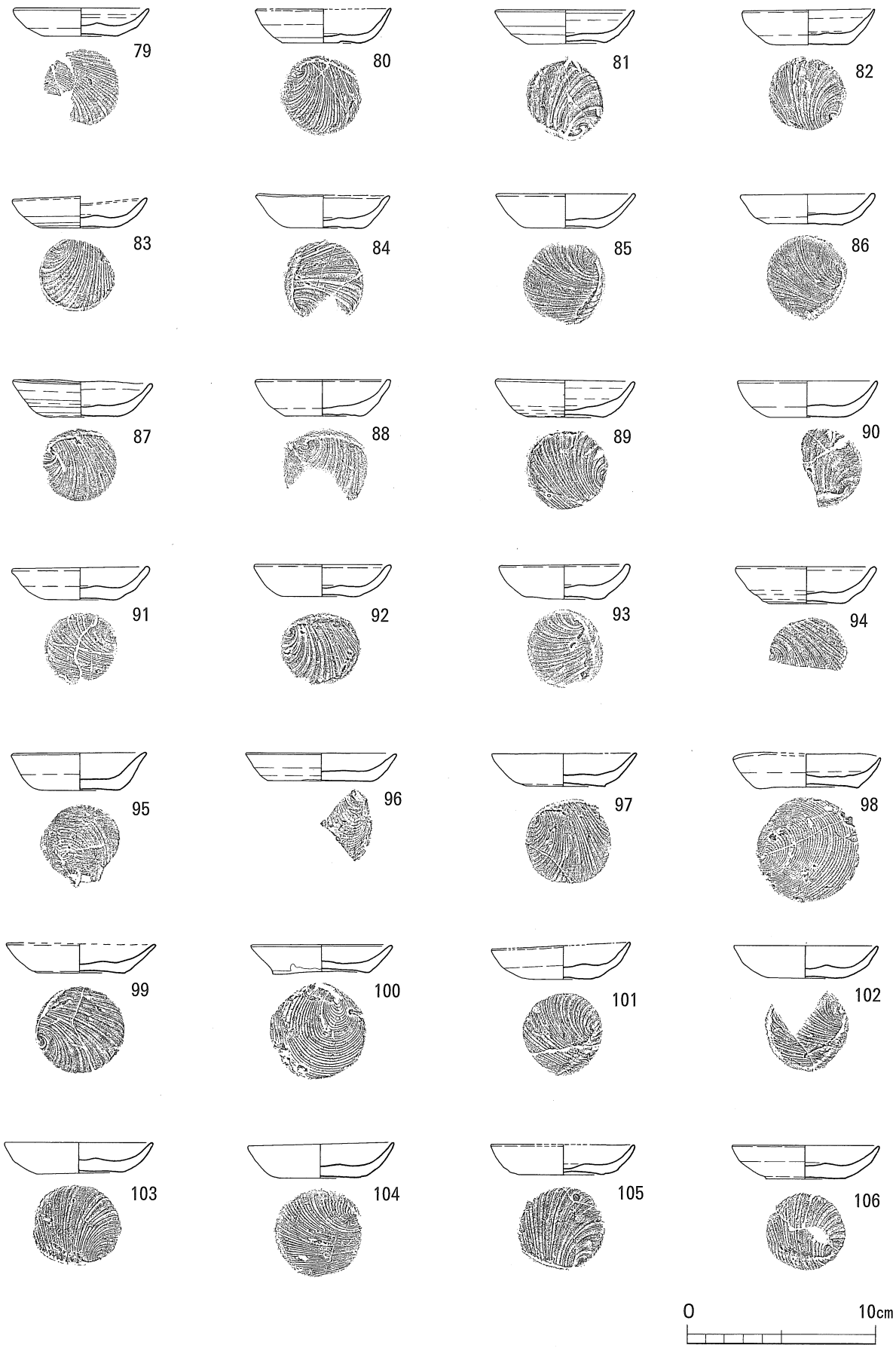
Ⅱ－B－2（口径7.4～7.9cm　器高1.4～1.8cm　底径4.0～5.5cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。

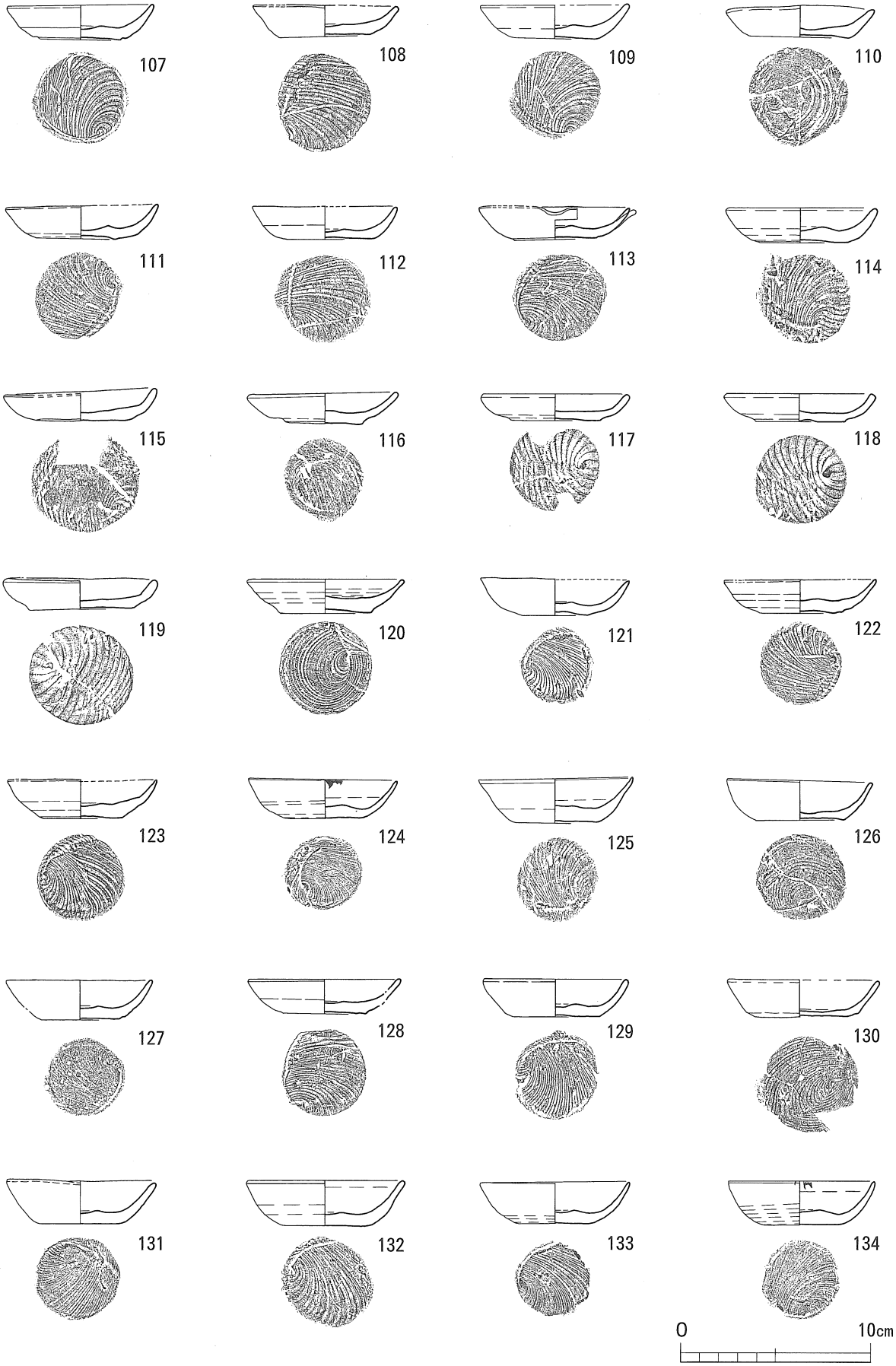
a　口縁端部がシャープなもの　101～106

b　口縁端部が丸みをもつもの　107～119

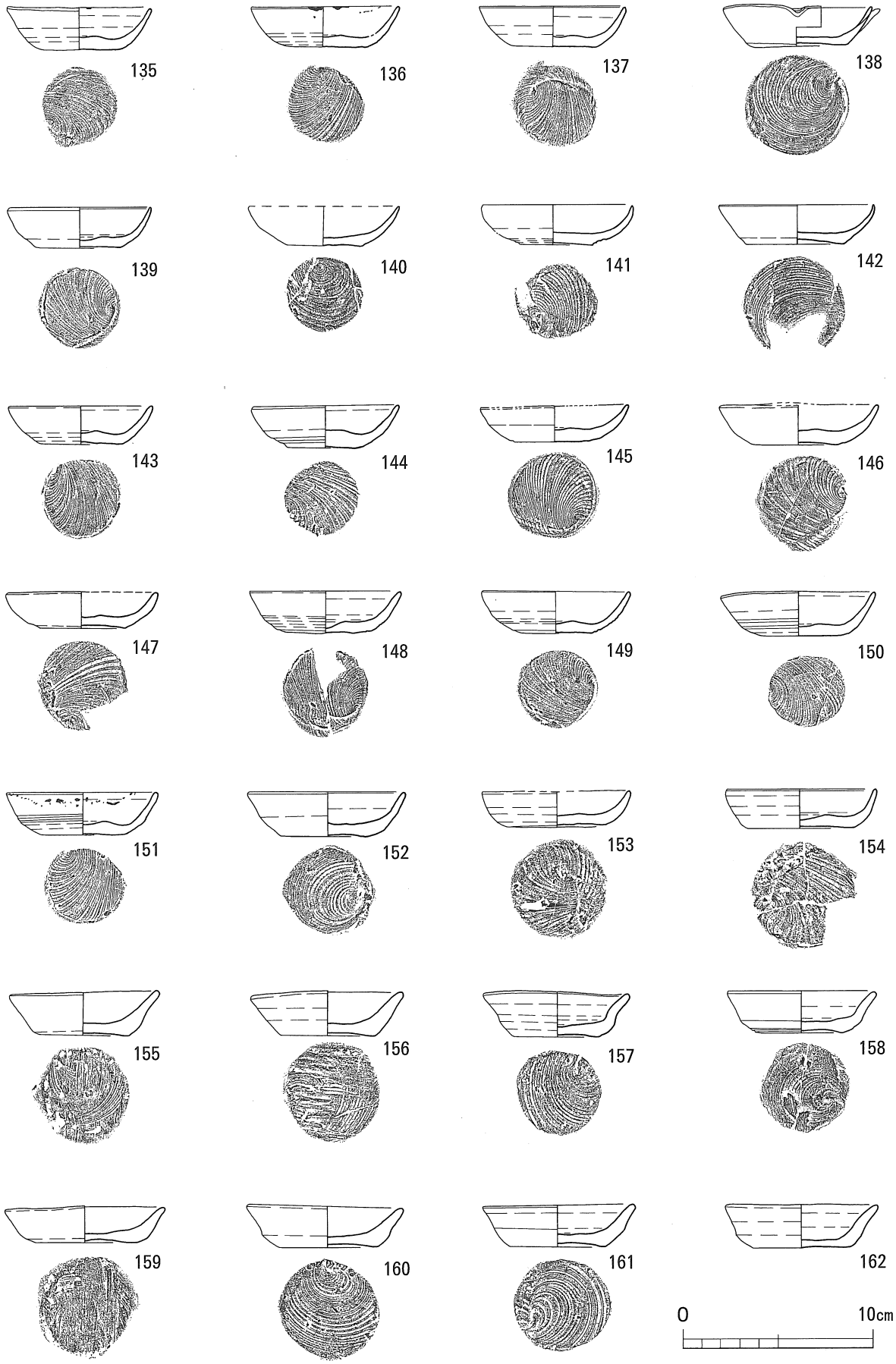
Ⅱ－C－1（口径7.4～8.2cm　器高1.8～2.4cm　底径3.8～5.4cm）



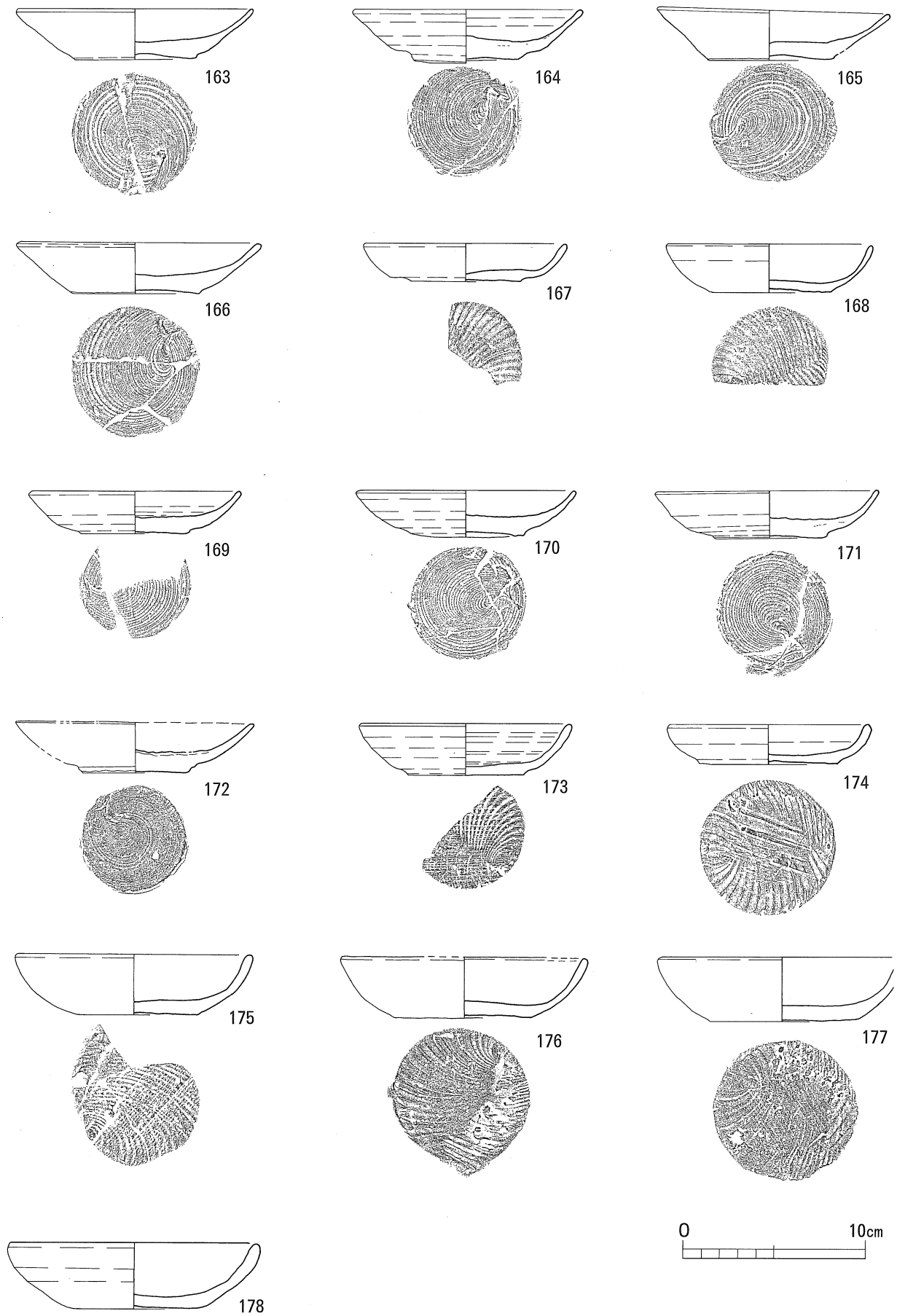
第28図　土師器実測図(5)(1/3)



第29図　土師器実測図（6）（1/3）



第30図　土師器実測図(7)(1/3)



第31図　土師器実測図（8）（1/3）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　120～125

b　口縁端部が丸みをもつもの　126～132

Ⅱ－C－2（口径7.4～ 8.2cm　器高1.8～2.4cm 底径3.8～5.4cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　133～142

b　口縁端部が丸みをもつもの　143～154

138は、片口をもち、141・142は強く内湾する。

Ⅱ－C－3（口径7.4～ 8.2cm　器高1.8～2.4cm 底径3.8～5.4cm）

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

b　口縁端部が丸みをもつもの　155～162

Ⅱ－D－1（口径10.9～13.4cm　器高2.1～3.4cm 底径5.8～8.0cm）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　163

b　口縁端部が丸みをもつもの　164～166

Ⅱ－D－2（口径10.9～13.4cm　器高2.1～3.4cm 底径5.8～8.0cm）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は内湾気味に立ち上がる。

a　口縁端部がシャープなもの　169～172

b　口縁端部が丸みをもつもの　167・168・173～178

173～178は、口縁部付近がやや厚手である。

（2）陶磁器

本遺跡出土の陶磁器は、近世から近代の陶磁器の出土数が圧倒的に多く、中世に属する陶磁器は比較的数が少ない。本城跡の存続期間を検証するために有効と思われる資料を選択して掲載した。

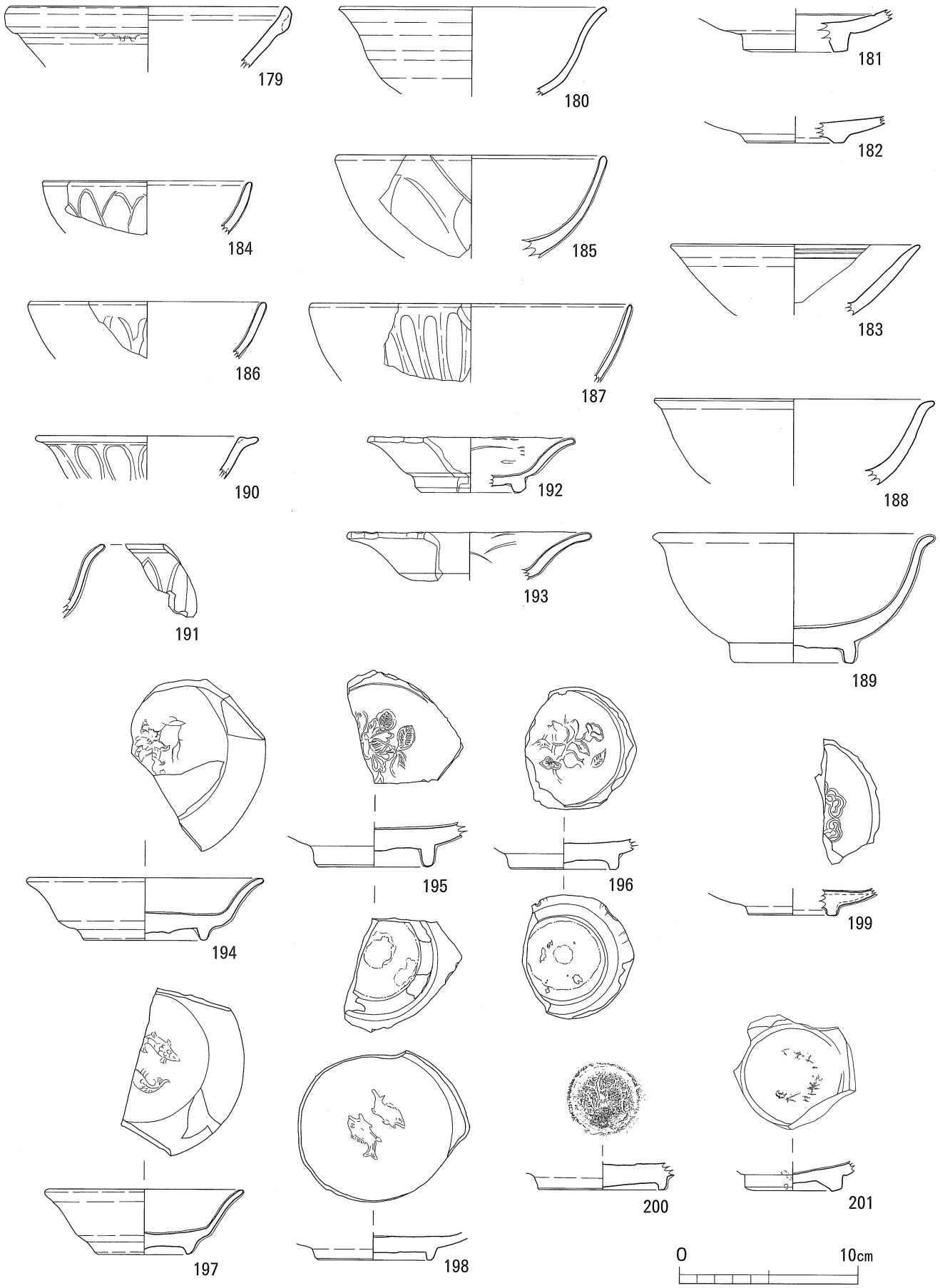
磁器（中国産）（第32・33図）

白磁　（179～182・201）

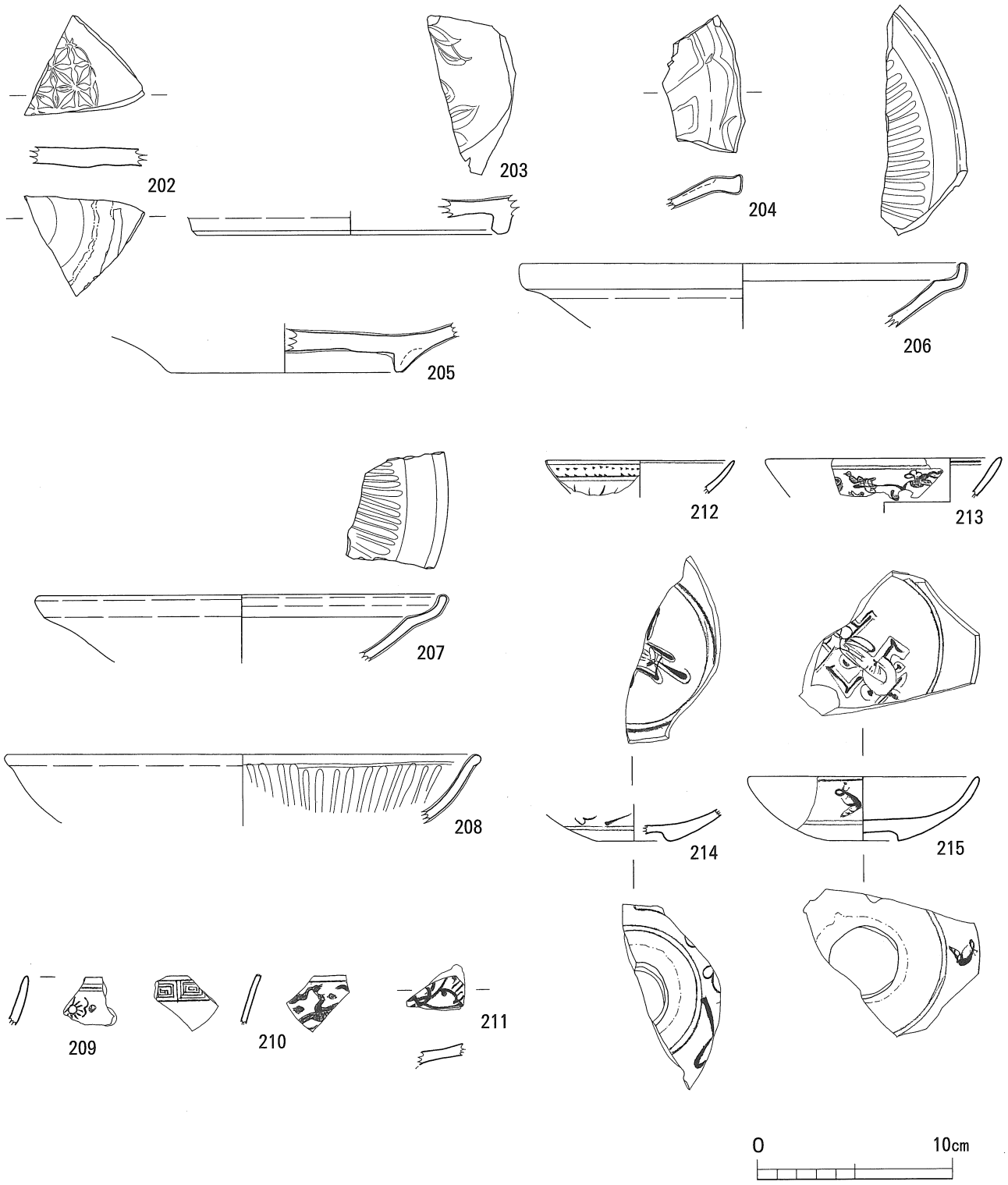
179は皿で口縁端部が玉縁状を呈する。180は口径14.8cmを計る端反碗、181は底部が露胎で見込み外周に線刻が見られる。201は見込みに陰刻で「福○○泰」の文字が認められる。

青磁（184～200・202～209）

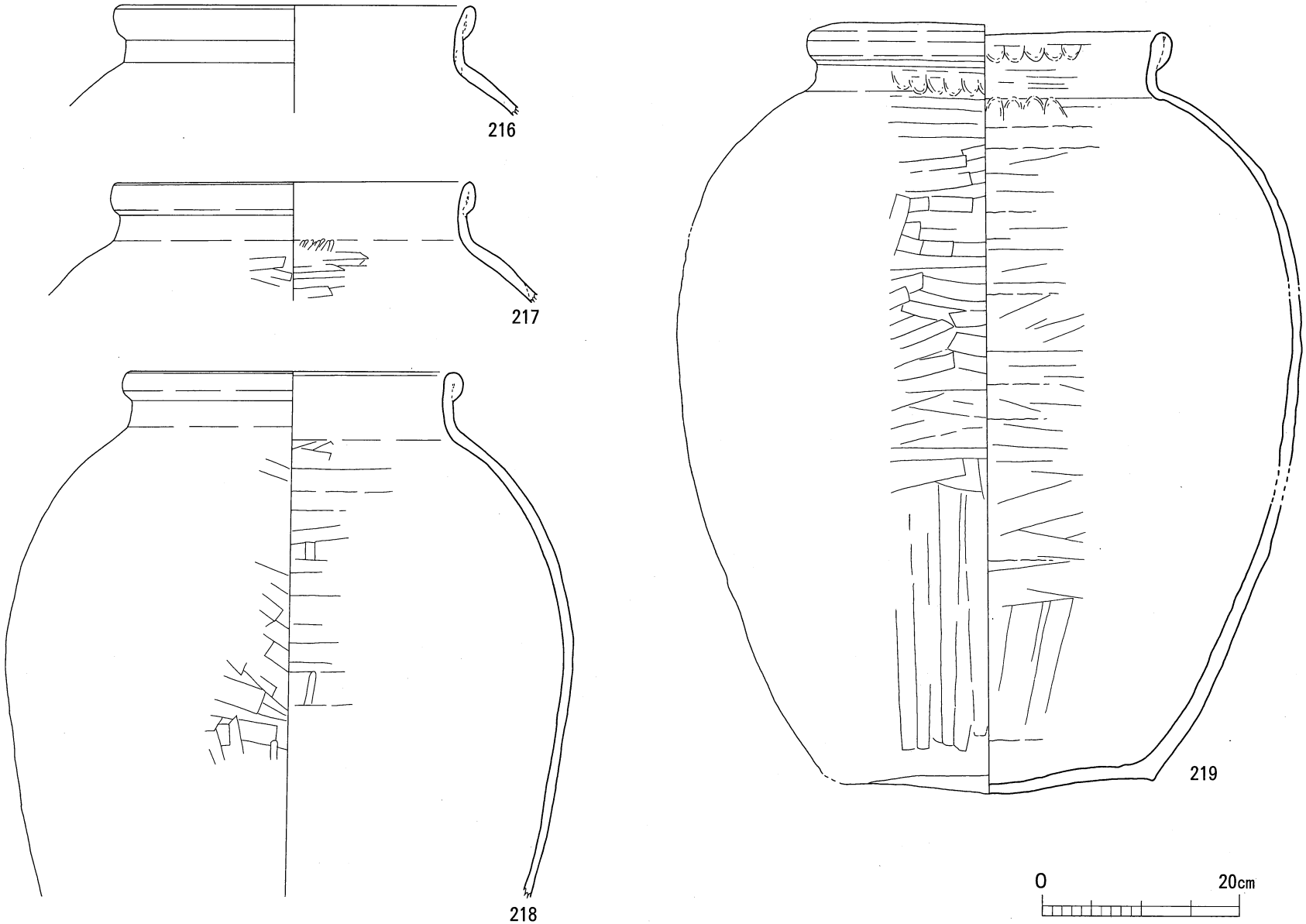
184～187は、龍泉窯の連弁をもつB類の碗である。184は簡略化された連弁が表現され185・186は片切彫である。183は高麗青磁の碗であり、口縁部内面に3条の回線が巡っている。209は外面に3条の回線と菊花文が見られる。188・189は龍泉窯系の端反碗である。190・191は折り縁口縁をもつ坏で、190には上面に重ね焼きの痕跡が認められる。192・193は花文稜花皿で内面にヘラ描き文が認められる。194～200は高台付皿である。194～196は見込みに印花文が施されている。199は雲かと思われる象嵌が見られる。197・198は見込みに双魚文、200は羯麻文が見られる。202～208は盤である。202・203は見込みに印花文が施される。204は、口縁が輪花状で内面にヘラ描き文が見られる。205～208は内面に見込みに向かって蓮花文が施される。206・207は口縁内面に段を有する。



第32図　陶磁器実測図（１）(1/3)



第33図　陶磁器実測図（２）(1/3)



第34図　陶磁器実測図（３）(1/6)

青花（210～215）

210は外面に１条の回線と鶴文、内面に素描の雷文が表現される。211は小破片のため文様は判然としないが、唐草文かと思われる。212は口縁部外面に簡略化された青海波状文、胴部に芭蕉文が表現されている。213は外面に２条の回線と草花文が見られる。214・215は景徳鎮の青花皿であり、碁笥底を呈する小野正敏氏の編年のＣ類にあたる。214・215ともに２状の圏線の中に唐人文が表現され、214は底部に砂目をはいだような跡が残る。215は外面に梵字文が見られる。15世紀末～16世紀前半。

備前甕（第34図）

216～219は備前焼の大甕である。216・217・219は曲輪ＶのSC２より出土している。頸部はほぼまっすぐ立ち上がり、口縁は端部を外に折り曲げた玉縁状を呈する。間壁忠彦氏のⅣ期の範囲に含まれると考えられる。15世紀～16世紀。219はほぼ完形に復元され口径36㎝、器高79.1㎝、底径34.1㎝を計る。器胴外内面には叩きの後、刷毛目やヘラ削りが認められる。底部はややいびつであるが平底で丁寧なナデ調整が見られる。器胴上部がら下部にかけて丸く、やや古手の様相を示す。14世紀～15世紀。

擂鉢　（第35・36図）

220～222は備前の擂鉢である。220・221は口径がともに30㎝程であり、口縁上面は少し外下がりの斜めに切ったような作りである。内面には下から上に向けて７本～12本１単位の櫛目が見られる。間壁忠彦氏のⅢ期の14世紀代。222は曲輪Ⅷ・曲輪Ⅸ間の堀切２より出土し、口縁の平坦面がやや広く作られている。14世紀後半～15世紀。

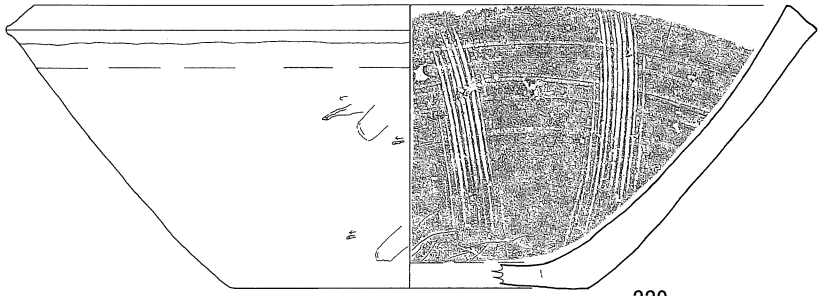
223～225は肥前系の擂鉢である。口縁内面の肥厚が形骸化している。口縁部周辺のみに鉄釉を施している。223の櫛目は下から上に向けて施され、先端は引きっぱなしである。224の底部は平底で糸切りのままである。17世紀中頃～後半。225は櫛目１単位ごとの間隔が狭まり、上端は口縁下でナデそろえられる。227は堺・明石系の擂鉢であり、口縁外帯の最下段が大きい。

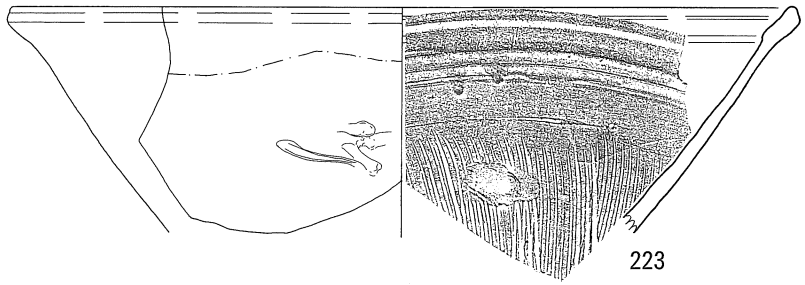
229は薩摩系の擂鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、浅い片口が見られる。内外面とも施釉される。底部はしっかりとした貼付高台である。

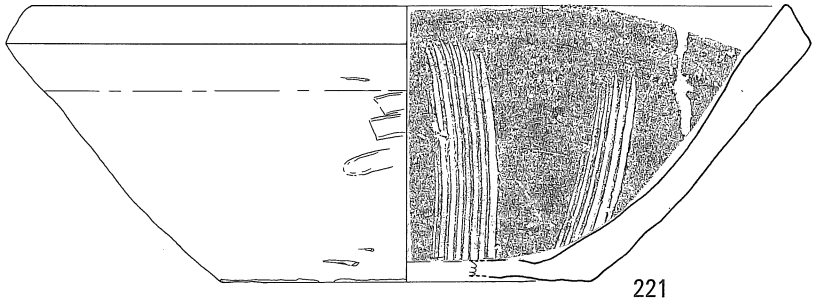
226・228・230・231は、時期および産地不明である。226は14本を１単位とする櫛目が見られる。228には片口が見られる。口縁外帯は３段に成形され口縁内凸帯が大きい。見込みに櫛目は見られない。230は口縁外帯は３段に成形される。口縁上面は斜め上方に平らに仕上げられる。櫛目は上端でナデそろえられる。231は口縁外帯は３段で成形され、最下部が最も大きく断面が三角形状になる。口縁上面は丸い。内面に７本を１単位とする櫛目が見られる。

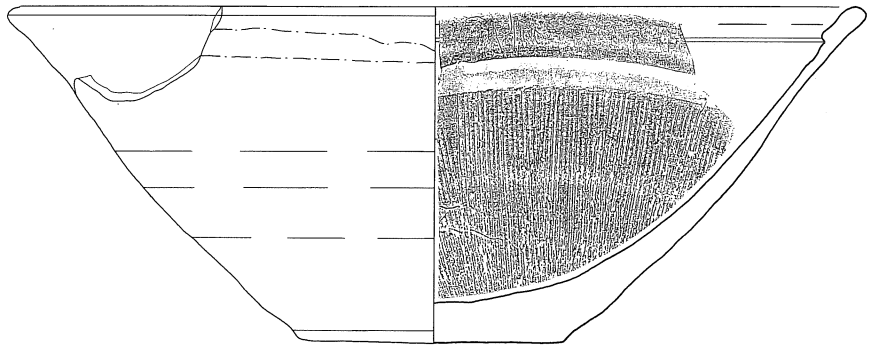
近世陶磁（第37図）

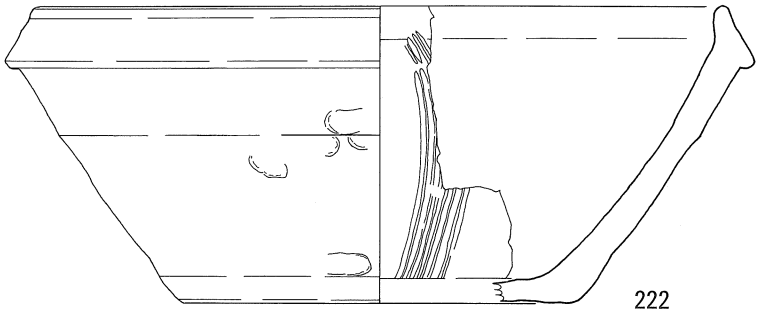
232は肥前の皿である。外面は胴部に唐草文が描かれ、高台脇に２条、高台に２条の回線が巡る。高台内にハリ目が見られる。内面は側面に墨弾きにより菊花文が表現される。見込みには草虫花文が表現される。17世紀後半～18世紀前半。233は陶胎染付の皿である。胴部に１条、高台に２条、高台内に１条の回線を巡らせている。裏銘に「渦福」字がある。234・235は肥前系のそば猪口である。234は、外面に菖蒲文、235は竹文が描かれている。18世紀代。237は瓶であり、外面に竹文が

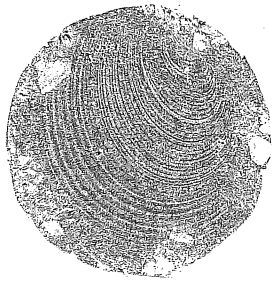


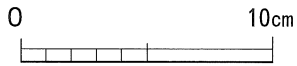




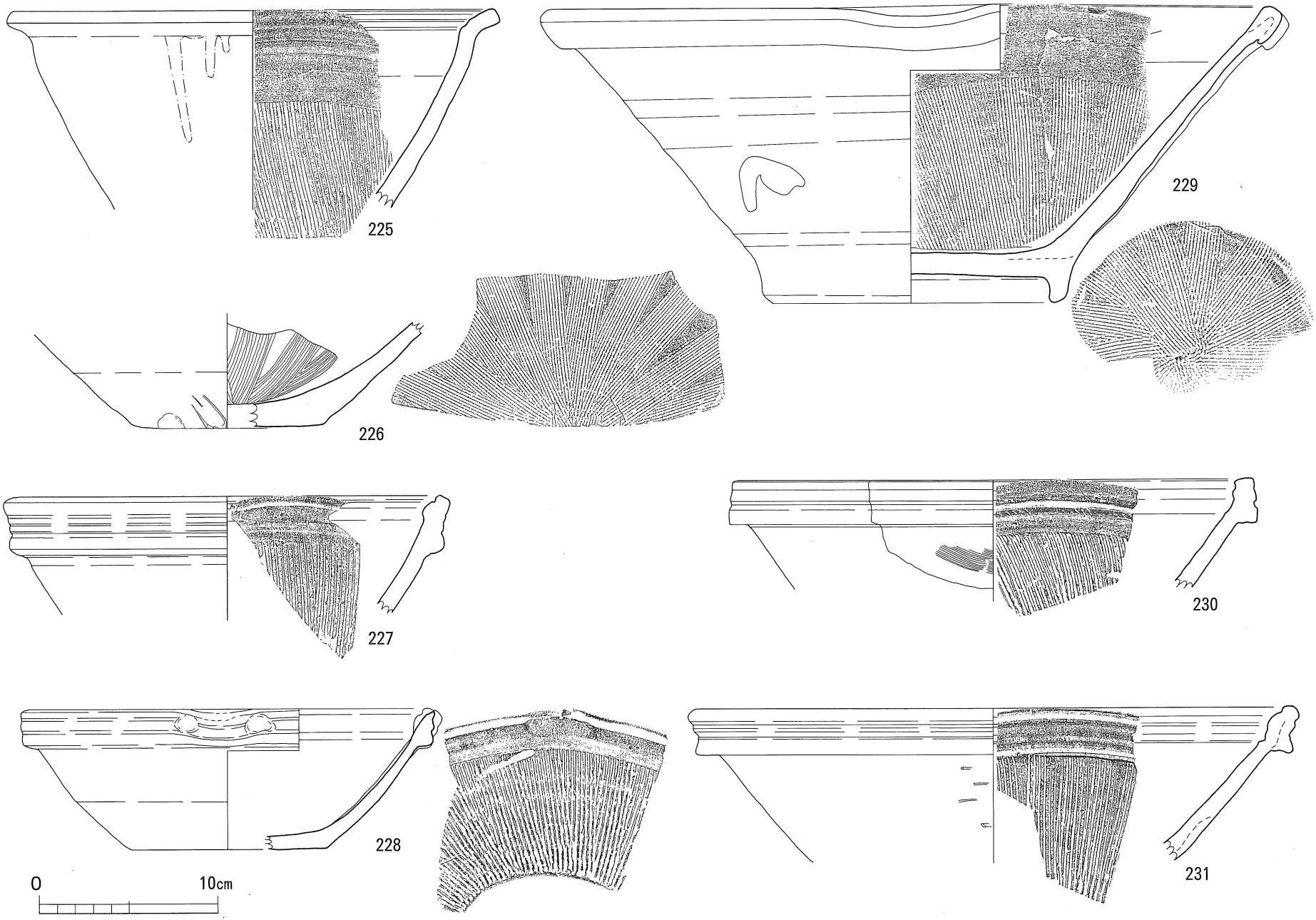




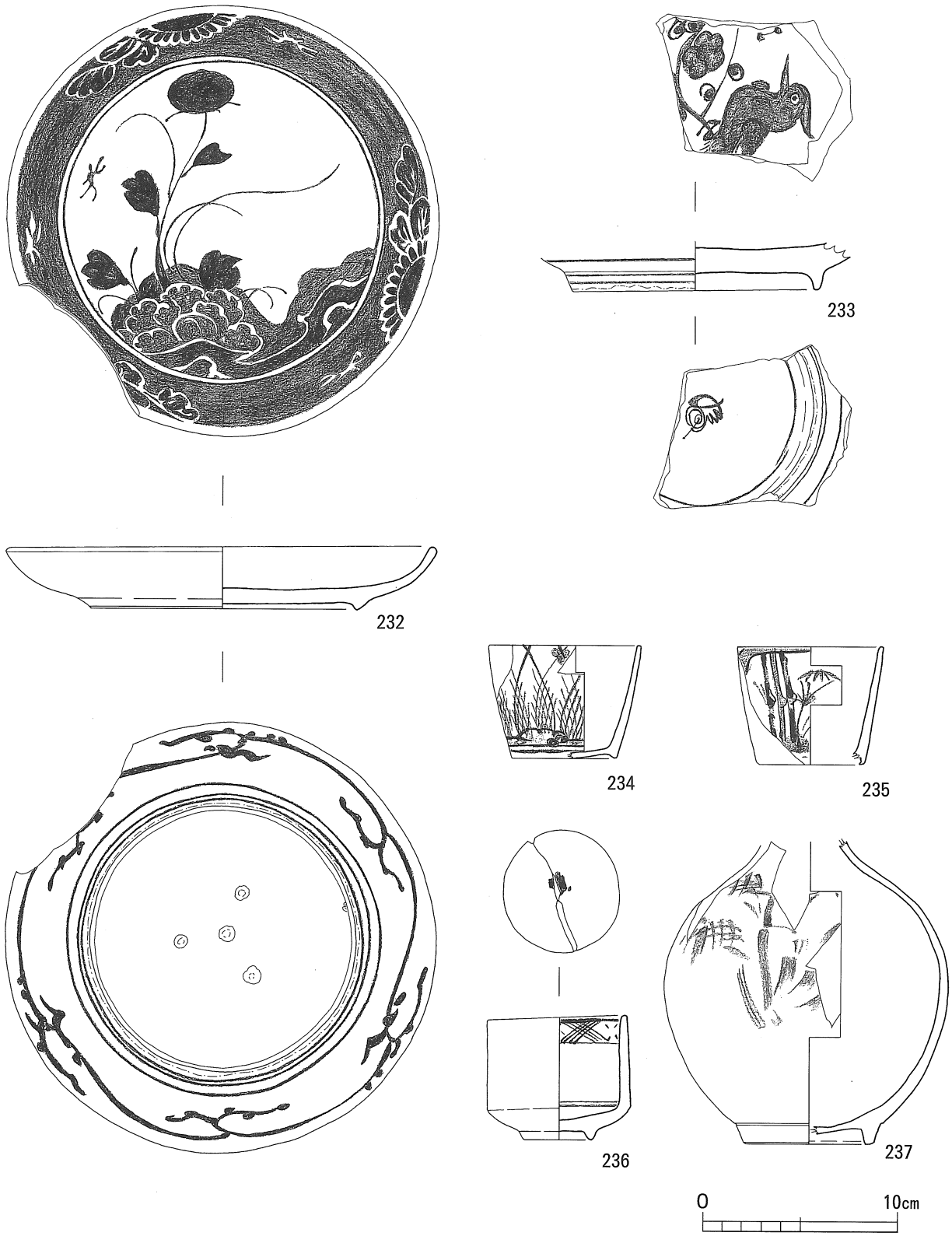




第35図　陶磁器実測図（4）(1/3)



第36図　陶磁器実測図(5)(1/3)

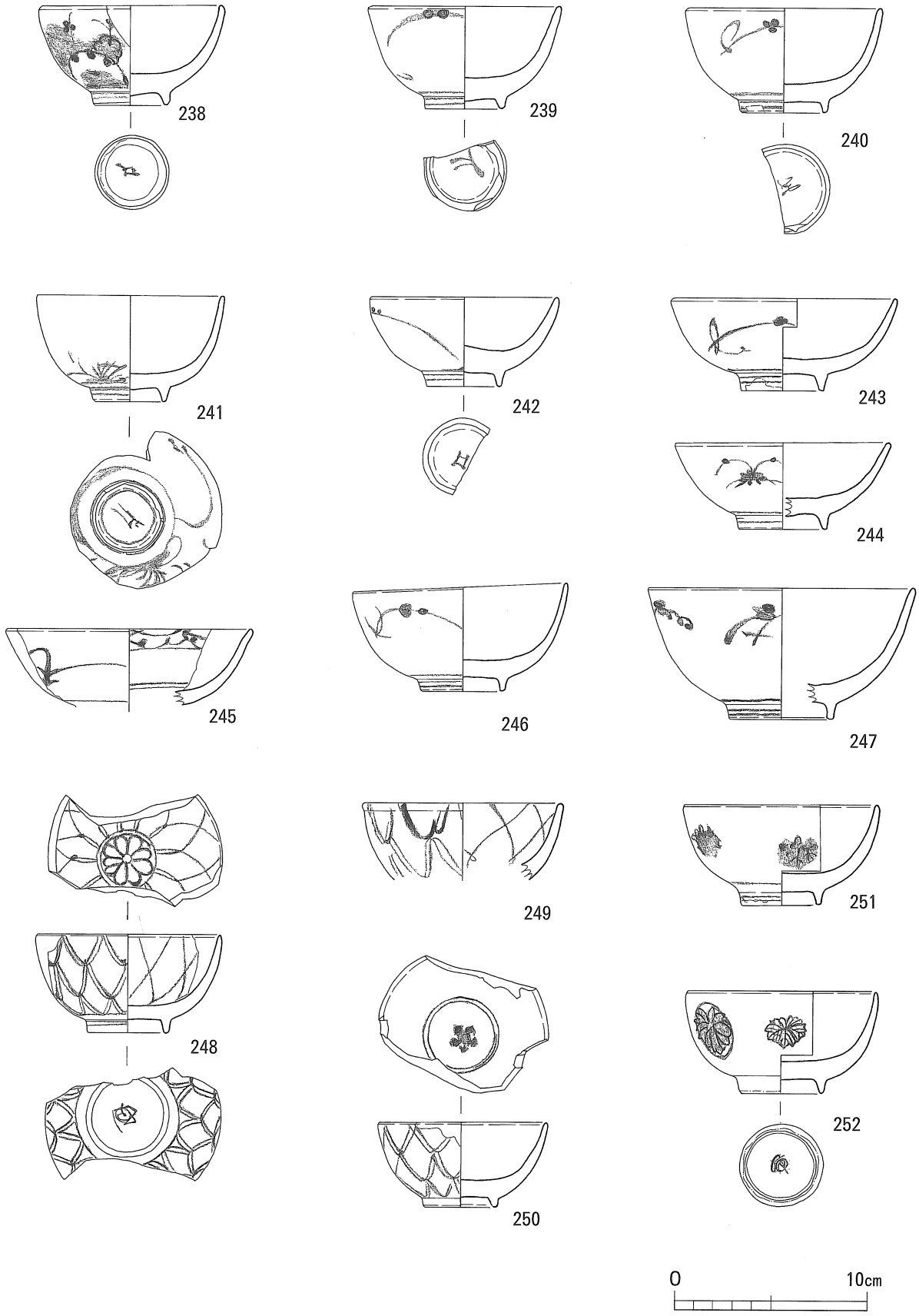


第37図　陶磁器実測図（6）(1/3)

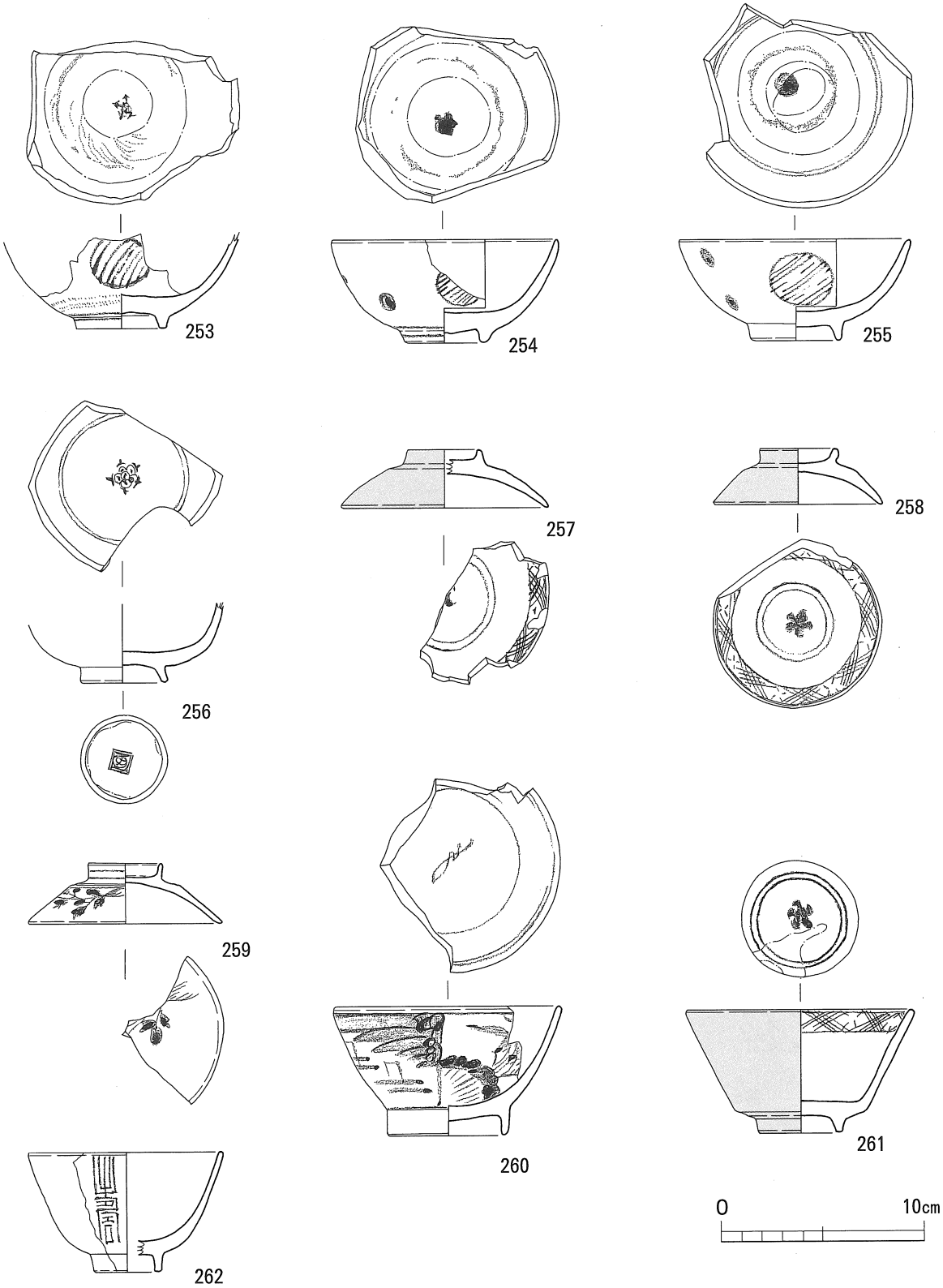
描かれている。

碗（第38～40図）

238～255は肥前及び肥前系の染付碗である。238は外面に雪梅花文が表現され、高台内に崩れた「大明年製」の銘款が入る。胎土に微細な灰色粒を含む。18世紀中頃。239・240は、外面に草花文、高台脇に１条、高台に１条の圏線が巡る。裏銘に「崩し大明年製」。18世紀後半。241は、外面に雪梅花文が描かれ、裏銘に「崩し大明年製」が見られる。高台畳付きは無釉である。17世紀末～19世紀後半。242は、外面に雪梅花文、高台脇に１条高台に２条の圏線が巡る。高台内に「崩し大明年製」。18世紀後半。 243は、外面に草花文、高台脇に１条高台に２条の圏線が巡る。内面は、見込みを蛇の目釉剥ぎの後施釉している。18世紀後半。244は外面に折梅花文が描かれ、内面は見込みを蛇の目釉剥ぎの後施釉（泥奬）している。245は外面に草文、口縁部内面に文様帯が見られる。内面胴部に２重圏線、見込みは蛇の目釉剥ぎである。17世紀後半～19世紀。246は、外面に折梅花文、247は草花文。ともに高台脇に１条の圏線や高台に２条の圏線が見られ、見込みには蛇の目釉剥ぎの後、施釉される。248～250は、外面に二重網目文が描かれる。248は高台内に「渦福」銘の落款が入る。内面は一重網目文で見込み２条の圏線の中に菊花文が表現される。1700～1750年代。249は、内面に一重網文。18世紀前半。250は、見込みの２重圏線内にコンニャク印判で五弁花文が施されている。18世紀前半～18世紀中頃。251の外面にはコンニャク印判で、松文が施される。18世紀後半。252は、外面胴部にコンニャク印判で蔦文と内に蔦文を表現した丸文を交互に配置している。裏銘に崩れた「渦福」が見られる。253は外面に丸文・蛍文が描かれ、胴部に飛びガンナ２条を巡らせている。見込みはコンニャク印判で五弁花文が施され、蛇の目釉剥ぎの後鉄奬。18世紀後半。254・255は、ともに外面には丸文・蛍文が描かれ、内面には見込みに254は１条、255は２条の圏線の中にコンニャク印判による崩れた五弁花文が施されている。18世紀後半～19世紀。256は青磁染付碗である。高台内部のみ染付釉が施され、「二重方形枠内渦福」銘が見られる。見込みには手描五弁花文が描かれる。1760～1780年代。257は朝顔形碗の蓋と思われる。外面の高台畳付は、露胎で砂が付着している。内面は口縁部に四方襷文が巡り、見込みには２条の圏線内にコンニャク印判による五弁花文が施される。18世紀後半。258・259は広東碗の蓋である。258は内面に四方襷文が描かれ、見込みには２条の圏線が巡りその中にコンニャク印判で五弁花文が施される。1760～1780年代。259は外面は高台に２条、天井部に１条の圏線が巡り、肩部と内面に草花文が描かれている。260は広東碗である。外面は区画割りを行い、その中に山水文が描かれている。見込みに崩れた鷺文が見られる。261は青磁染付碗である。高台内のみ染付釉が施される。236は青磁染付の筒形碗である。内面の口縁部に四方襷文が巡り、見込みの２重圏線内にコンニャク印判による崩れた五弁花が表現される。18世紀半ば～18世紀後半。262は、外面に寿字文が見られる。19世紀前半。263・264は嬉野内野山窯産である。263は端反碗で、内外両面に銅緑釉が施される。17世紀後半。264は外面は銅緑釉、内面は透明釉である。17世紀末～18世紀。265・266は、京焼ないしは京焼風の碗である。内外面に貫入が入り、高台畳付きは露胎である。17世紀末。267は白磁釉がかかり、外面には釉ちぢれが見られる。内面には蛇の目釉剥ぎを施している。肥前系ないし在地産か。18世紀代。268・270は内外面とも透明釉で、貫入が入る。268の見込みは蛇の目釉剥ぎである。269は朝



第38図　陶磁器実測図(7)(1/3)



第39図　陶磁器実測図(8)(1/3)

顔形碗で、高台畳付には釉剥ぎが見られる。在地産か。271は肥前系の碗で、やや小型である。内外面とも透明釉であり、貫入が見られる。見込みは蛇の目釉剥ぎである。18世紀前半。

皿（第40・41図）

272～274は溝縁皿である。272・274は内外面ともに灰釉で、貫入が見られる。1610～1630年代。273は、透明釉が施される。

275～280は肥前陶器の三島手の皿で、外面は鉄釉と灰緑色釉、内面は象嵌で白化粧を塗った後透明釉が施されている。275・276は内面胴部に化粧土による刷毛目が見られ、見込みに砂目痕が４カ所確認できる。17世紀前半。277～280は内面にスタンプ印花文による象嵌が見られる。17世紀後半。281・282は唐津刷毛目皿で、内面に化粧土を施した後刷毛目を行っている。281は、口縁が輪花となる。外面は化粧土を施した後、刷毛目を行っている。17世紀後半～18世紀前半。282の高台は露胎となる。内面は見込みに蛇の目釉剥ぎを行った後、銹塗りを施している。18世紀前半。

火入れ（第41図）

283は火入れである。化粧土刷毛目を行った後、飴釉を施している。口唇部に釉剥ぎが見られる。

甕（第42図）

284～287は肥前系の甕である。底部まで復元できる個体はない。備前焼の大甕をまねた時期のものである。285は口縁外端部におさえによる凹みが見られる。内面にはあて具の痕跡が確認できる。17世紀前半。286・287には内面に格子目叩きが見られ、面に２条の縄状突帯が見られる。286は外器面にも格子目叩きが見られる。口縁部上面は釉剥ぎされ、重ね焼きのための貝目が見られる。17世紀後半に位置づけられる。

壺（第42図）

288は薩摩系の壺である。頸部がすぼまって段をもち、緩やかに内湾しながら外方へ延びる。18世紀後半。289～291は沖縄の壷屋焼の荒焼である。口縁は玉縁状を呈し、肩部に「耳」がつく。内外面とも赤褐色を呈し胎土中に石灰質（珊瑚）を含んでいる。18世紀中頃～19世紀。

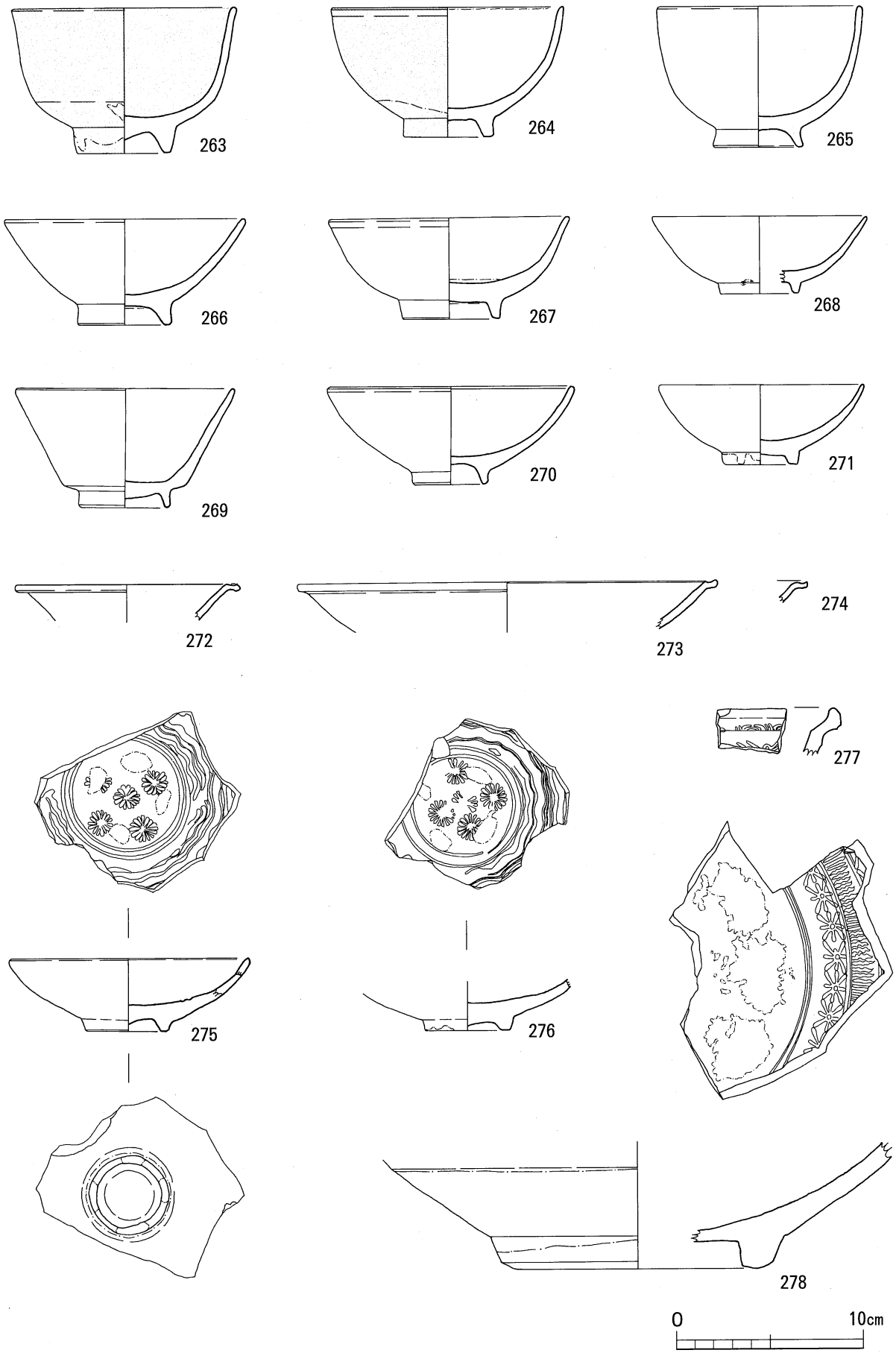
鉢（第42図）

293は、肥前系の片口鉢である。16世紀末～17世紀。

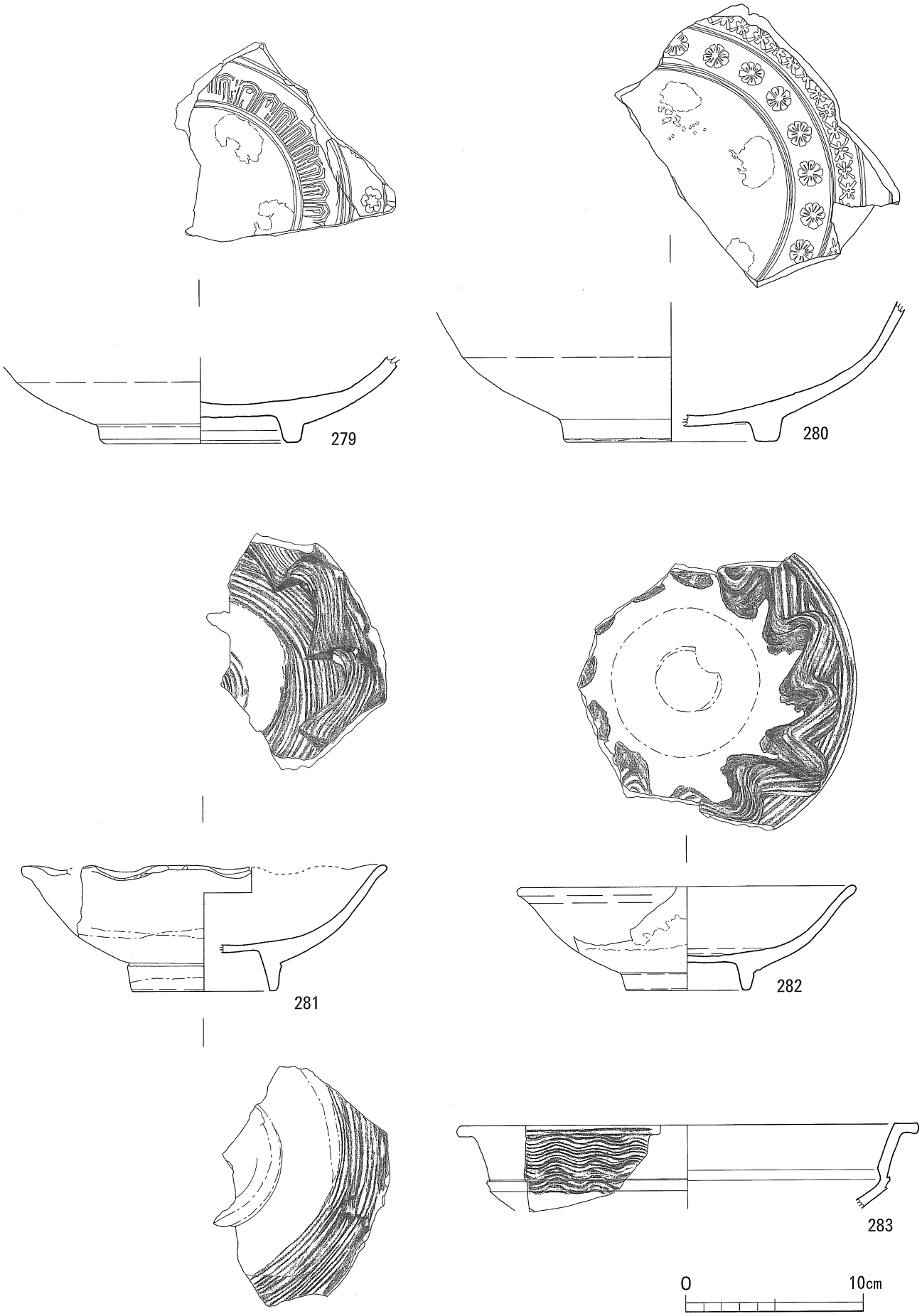
土瓶（第43図）

本遺跡の土瓶は蓋の数量から20個体以上の出土がある。完形となるものはなく全体の形状や蓋と身のセット関係については不明である。時期および産地については不明である。弦用の耳や若干くぼんだ底部の破片なども出土しているが、ここでは蓋・注口・体部についての大まかな分類を行う。

蓋１類	つまみがボタン状になるもの	294
蓋２類	つまみが丸いもの	295～298
注口１類	上方に立ち上がり先端部の屈曲が緩やかなもの	299～302
柱口２類	短く外上方に立ち上がり先端部の屈曲がきついもの	303・304
体部１類	体部が球形をなすもの	300・305・306
体部２類	体部がそろばん玉状になるもの	307～309



第40図　陶磁器実測図(9)(1/3)



第41図　陶磁器実測図(10)(1/3)

焙烙（第43図）

310～313は、土師質の焙烙である。体部との境に緩い稜を持ち、外内面ともナデ仕上げである。器壁に穿孔が施されている。

高台付皿（第44図）

314は、肥前系志田窯の高台付皿である。高台内を削り込んで薄くしている。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。17世紀末～18世紀前半。

灯明皿（第44図）

315・316は、陶器製の灯明皿で内面に泥釉が施されている。口縁部付近に煤が付着している。底部は糸切りで在地産か。18世紀～19世紀。317は瀬戸の灯明皿である。外面は口縁部以外は露胎である。

天目（第44図）

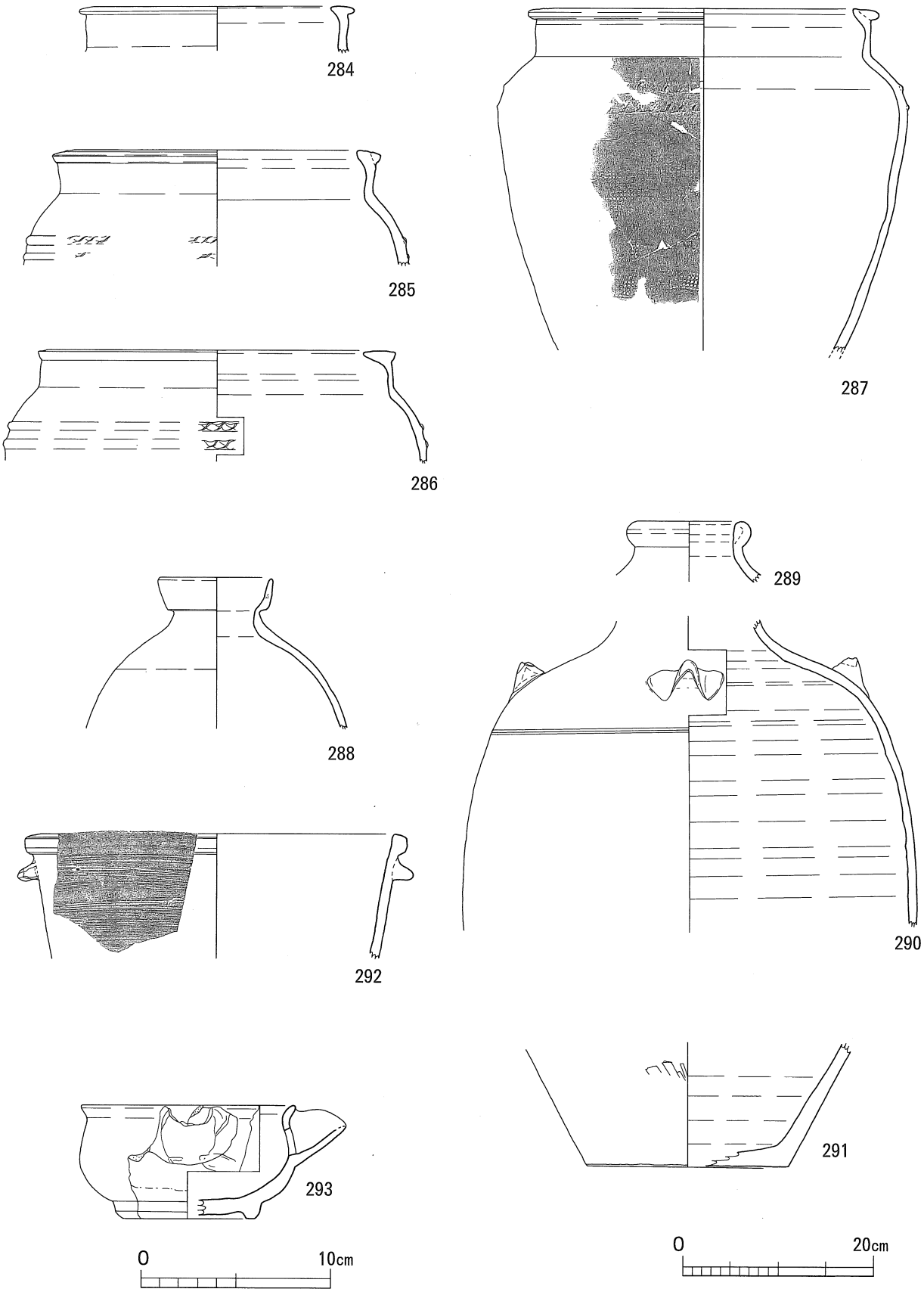
319～321は、瀬戸美濃の天目である。319は内外面とも鉄釉の上から別の釉（天目釉か）を掛け流ししている。

瓶（第44図）

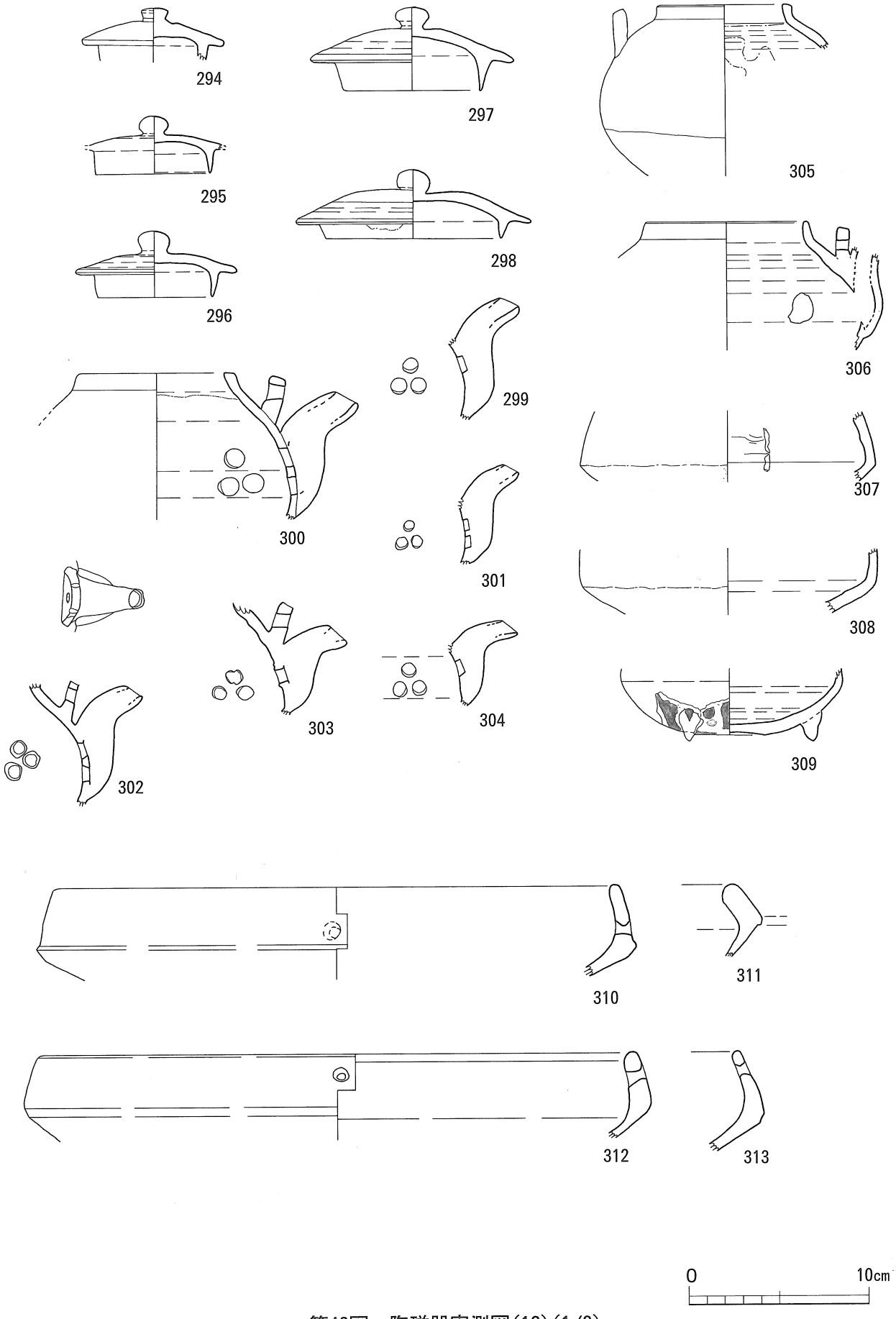
322～324は、18世紀代の肥前系の仏花瓶である。322・323は同一個体と思われる。322は広口形である。口縁部上部に白化粧土、その上から飴釉をかける。頸部に耳の痕跡が見られる。323は、外面に透明釉を畳付以外に施釉し、その上から飴釉を胴部上位に施している。内面は底部中央に自然釉が認められる。324は頸部に把手（鳥か？）を横位に貼り付ける。内面は頸部まで薄く施釉されている。325・326は武雄系の瓶である。外面頸部付近は黒釉で胴部は、白化粧土刷毛目である。口縁部はラッパ状に開き、底部は碁筍底を呈するものと思われる。17世紀末～18世紀前半。327は脚が三足で半筒形輪高台を有する。17世紀中頃。

火鉢（第44図）

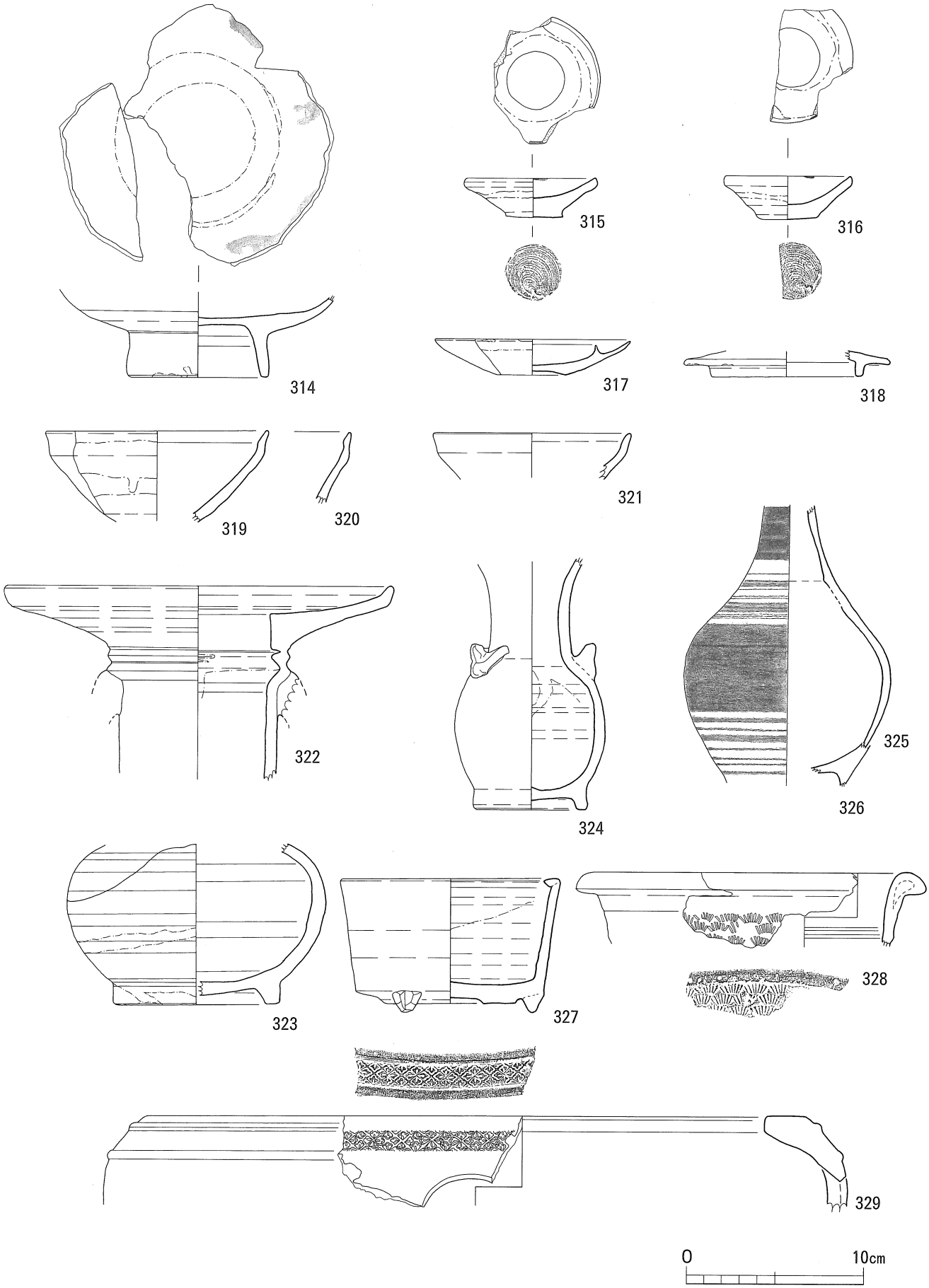
328は瓦質の火鉢で口縁端部は丸くおさめられる。外面にスタンプによる印花が施されている。329は奈良火鉢である。口縁部の外面に２条の凸帯が巡り、その中にスタンプで印花が押捺される。



第42図　陶磁器実測図(11)(293は1/3、他は1/6)



第43図　陶磁器実測図(12)(1/3)



第44図　陶磁器実測図(13)(1/3)

（3） 金属製品

銭貨（第45図～第47図 第14表）

銭貨29点を採拓した。このほか18点出土しているが銭文不明のものがある。曲輪から出土したものが大半を占めている。銭貨29点の銭文と鋳造年号を見ると中国銭は20点、本邦銭は９点出土している。中国銭は330の開元通宝のみが唐銭でそれ以外は、北宋銭と明銭に分かれるが、圧倒的に北宋銭の出土が多い。330は背上に「月」が見られる。年代順に北宋銭は、天聖元宝（331)、皇宋通宝（332)、至和元宝（333)、嘉祐通宝（334)・熙寧元宝（335～337)、元豊通宝（338)、元祐通宝（339・340)、元符通宝（341）・政和通宝（342）である。明銭７点は全て洪武通宝（343～349）である。346・348の洪武通宝は，背文に「治」の字が認められる。中国銭20点がそれぞれ中国銭なのか模倣銭なのか判断しがたい。また鋳造年代と城の活動期が重ならないこともあり、年代（鋳造年代）より下がり貨幣として本邦銭と同時に流通していたのか、出土状況からは推測できない。

本邦銭は寛永通宝（350～356）と半銭貨（357)、一銭貨（358）である。350には背文に「文」の字が見える。寛永通宝の鋳造は寛永三年（1626）年にはじまり、約240年間鋳造していた。本城跡の曲輪や堀切および斜面から出土している状況から、貨幣以外の使用目的は推測できない。

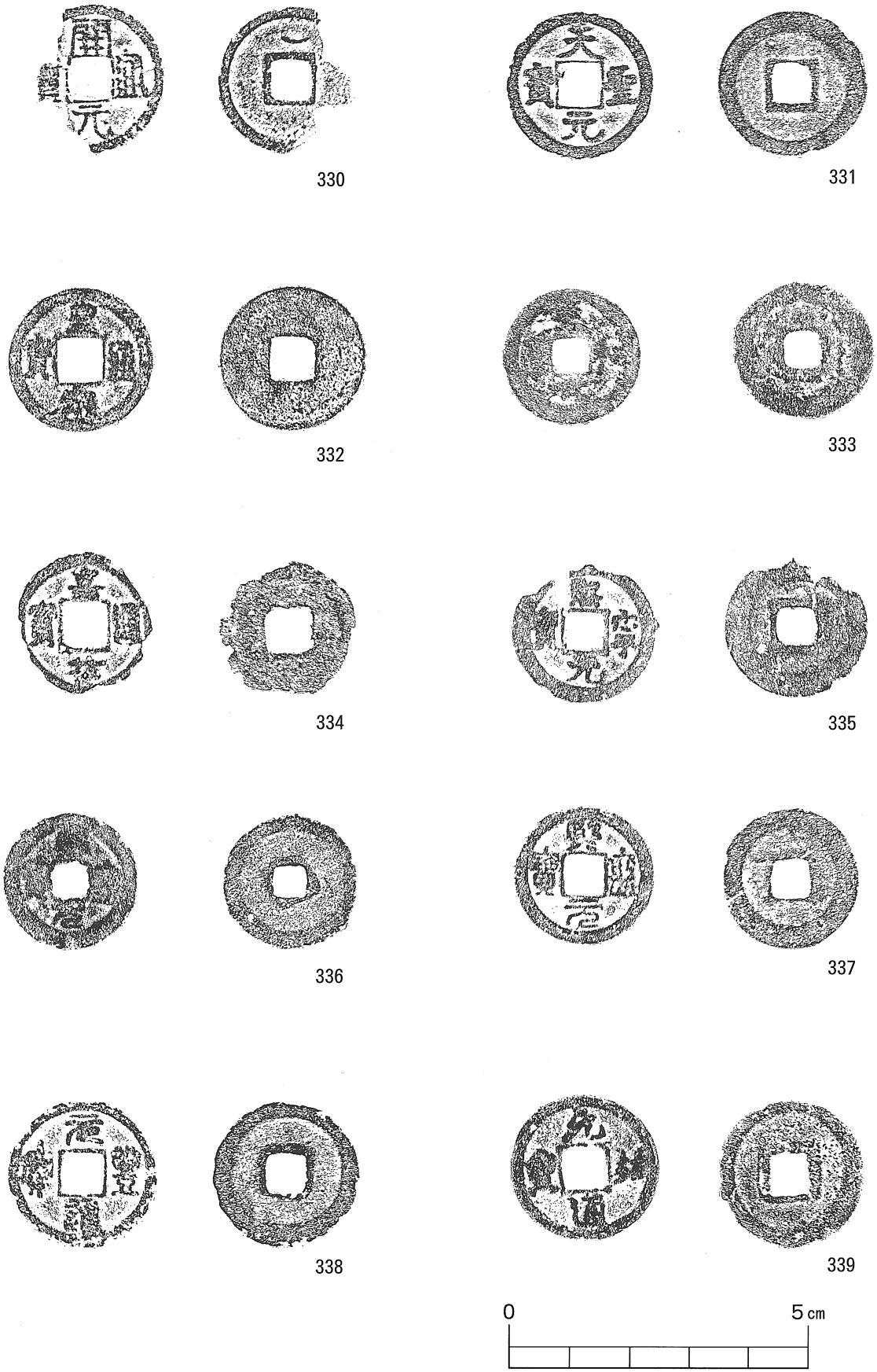
出土した曲輪を概観すると、曲輪Ⅴが最も多く12点を数え，北宋銭５点（331・335・338・341・342）と明銭の洪武通宝７点（343～349）全てが確認されている。曲輪Ⅷからは北宋銭のみ７点（332～334・336・337・339・340）出土している。その他にもかろうじて紹聖元宝と判読できる銭貨も曲輪Ⅷより表採されている。

煙管（第48図 第15表）

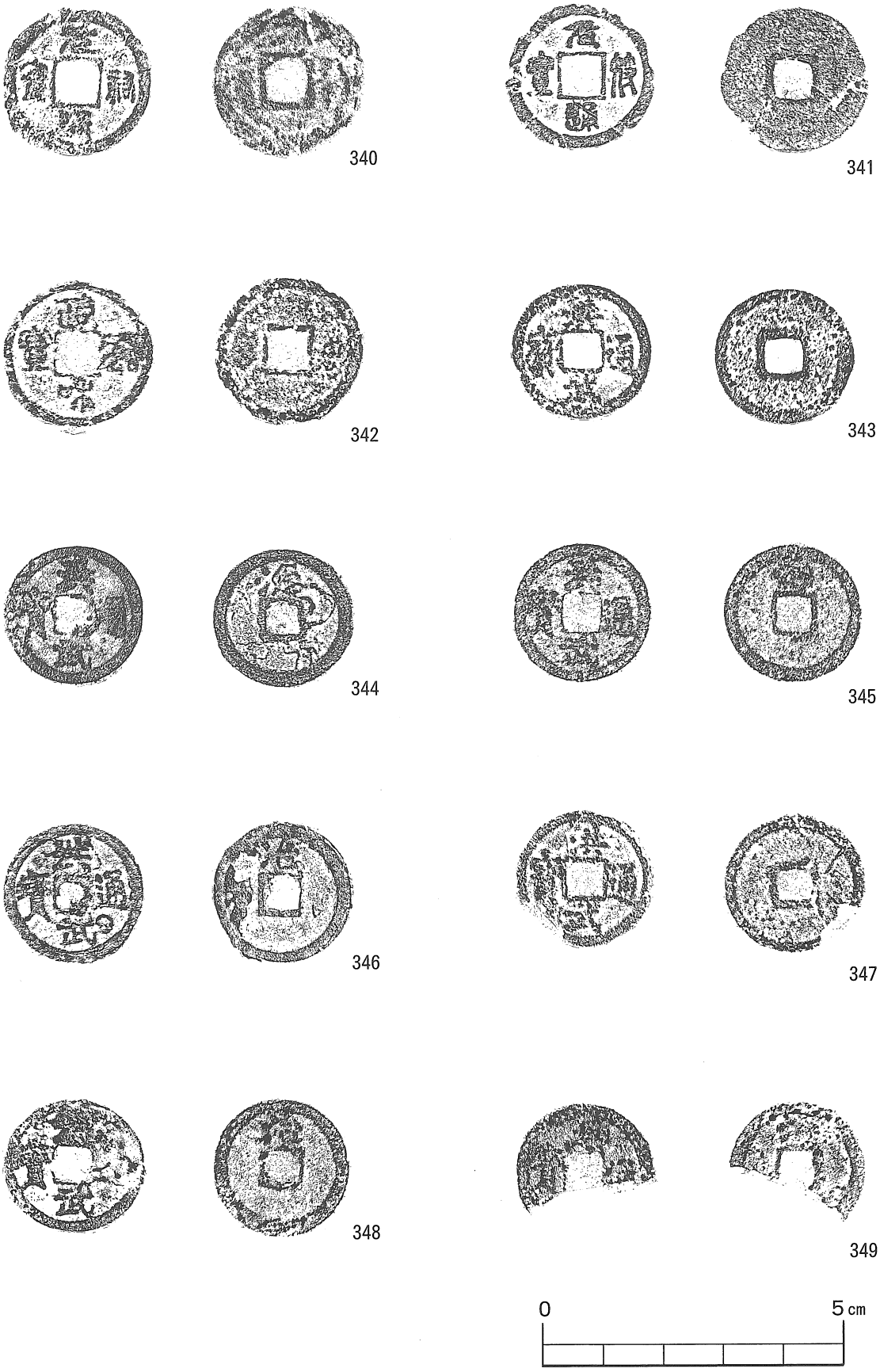
359・360は銅製の煙管である。359は曲輪Ⅴ、360は曲輪Ⅷから出土している。ともに雁首から胴部小口の部位である。359の遺存部の長さは4.8㎝、火皿径、火皿の深さ、小口径の３部位ともに１㎝を計る。360は遺存部の長さは５㎝、火皿径1.5㎝、火皿の深さ１㎝、小口径0.8㎝を計る。ともに雁首への立ち上がりは低い。江戸時代中期頃と推定される。

その他の金属製品（第48・49図 第15表）

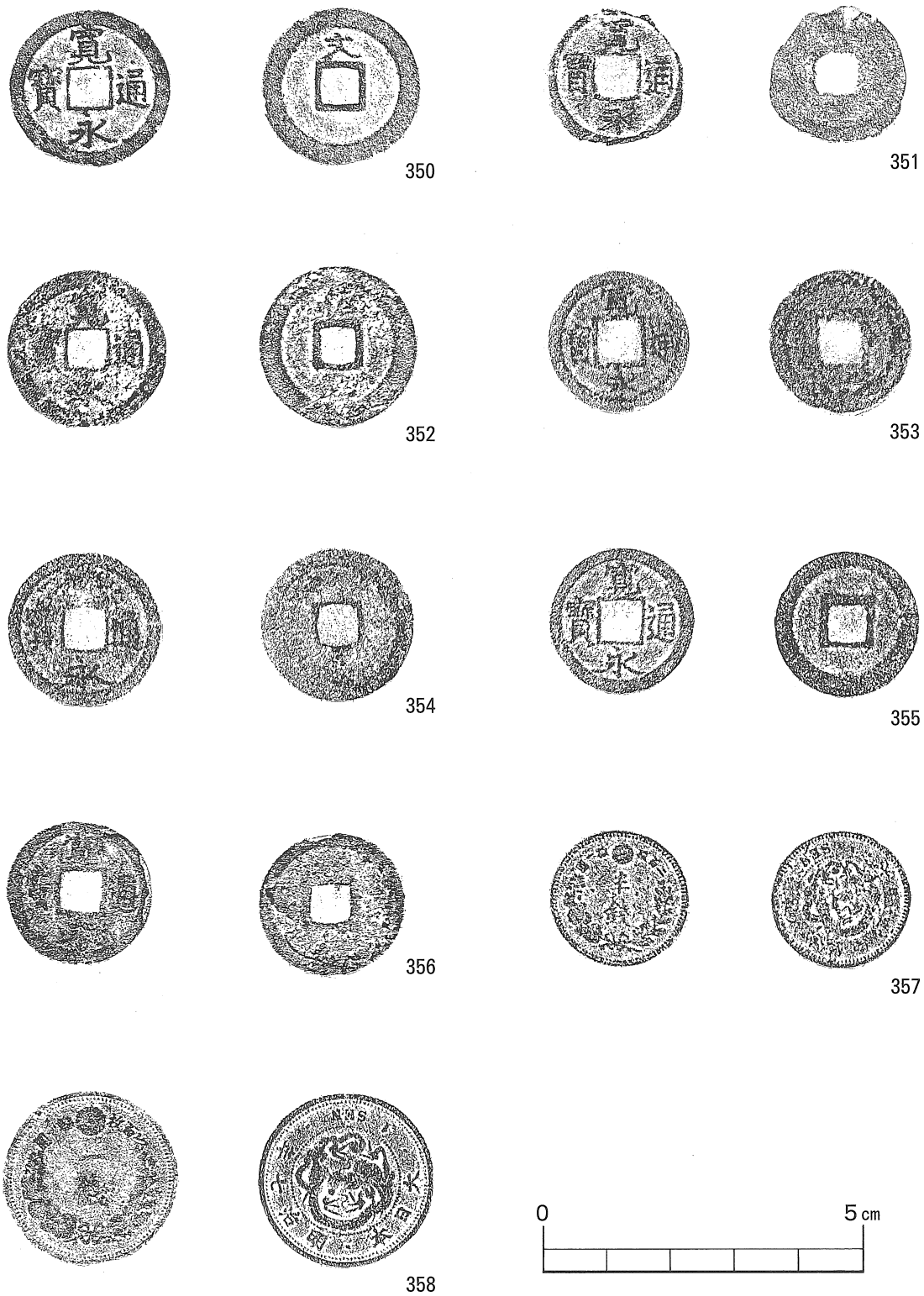
361～363は銅製品であり、仏具かと推定される。361は飾り金具と思われる。２個一対で何かを挟むような形状をしている。最大長2.5㎝、最大幅3.1㎝を計る。363は六器かと思われる。推定最大幅7.3㎝を計る。362は最大長・最大幅ともに2.3㎝を計る。364は簪で最大長18.3㎝、最大幅1.2㎝、厚さ0.3㎝を計り飾りに花模様が見られる。365は剣である。先端部を欠損している。長さ10.7㎝、厚さ0.4㎝。366は刀子で長さ11.5㎝、最大幅1.5㎝、厚さ0.2㎝を計る。367は分銅で重さ227ｇを計る。368・369は錠前で筒部断面形は方形である。370～372は鋤先の一部であると思われる。370は現存最大長35.9㎝、最大幅、9.6㎝、最大厚0.3㎝を計る。371は現存最大長9.2㎝、最大幅、7.8㎝、最大厚0.3㎝を計る。372は現存最大長13.8㎝、最大幅、12.9㎝、最大厚0.5㎝を計る。373は鍬と思われる。現存最大長13.8㎝、最大幅、12.9㎝、最大厚0.5㎝を計る。374～377は鉄滓である。374は船底形を呈する。重さはそれぞれ372ｇ、204ｇ、307ｇ、71ｇである。



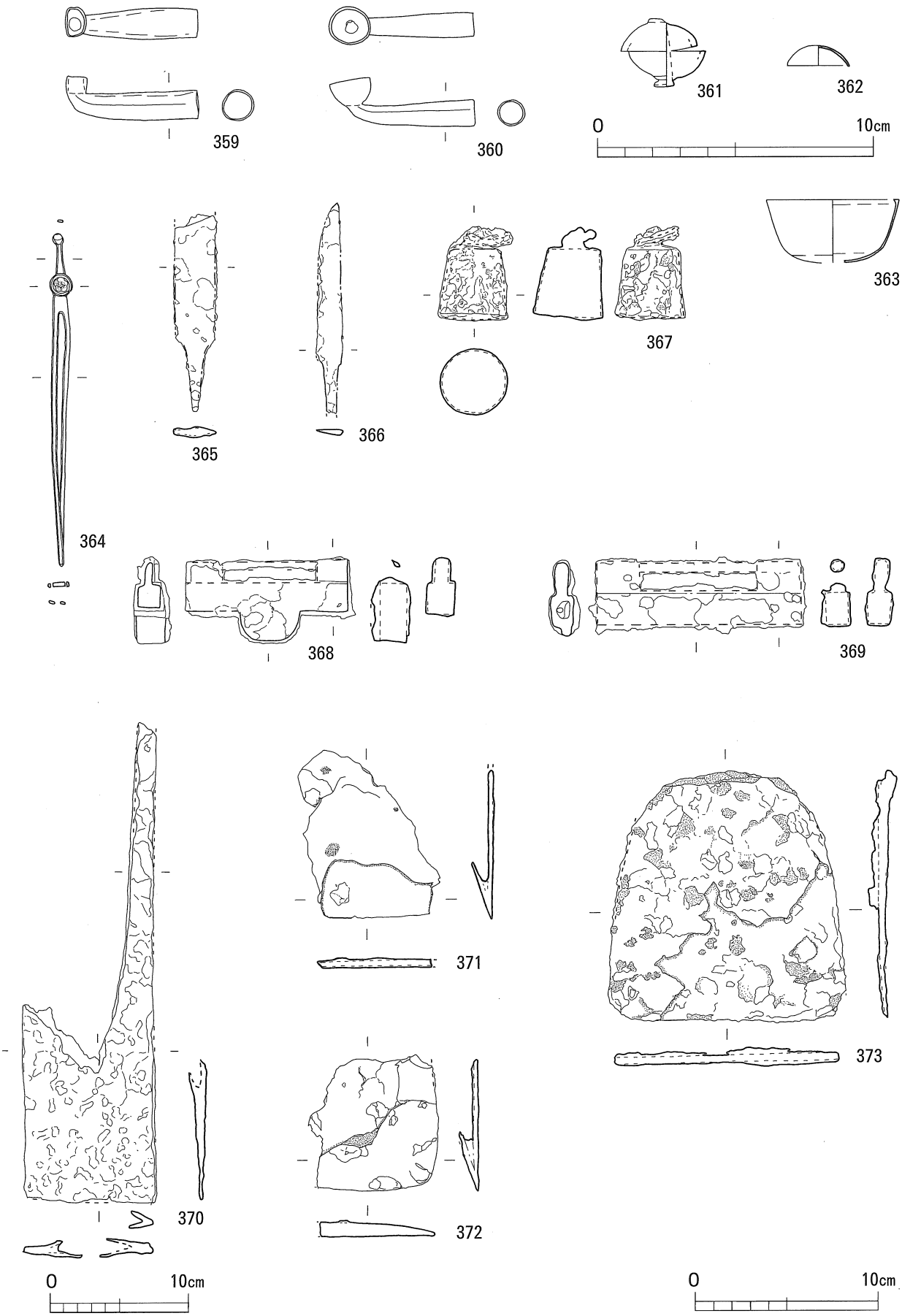
第45図　銭貨（１）(1/1)



第46図　銭貨（2）(1/1)



第47図　銭貨（３）(1/1)



第48図　金属製品実測図(359～362 1/2、363～369・371～373 1/3、370 1/4)

（4）石製品

石製品の種別と図化掲載数は、石鍋２点、石臼１点、砥石３点、軽石製品２点、駒石12点である。各個体の計測値の詳細については、第16表を参照されたい。

石鍋（第49図）

378・379は滑石製の石鍋である。378には蔓取手穴と思われる穿孔が見られる。379は口縁部直下の削り出された鍔がめぐり、胴部に細いノミによる痕跡が認められる。外面の多くに煤の付着が見られる。14世紀末～15世紀。

石臼（第49図）

380は砂岩製の石臼である。残存率は1/5程度で、重さは２kgを計る。

砥石（第49図）

381～383は砥石である。381は砂岩製で、大きく２方向に深さ0.5㎜程の断面Ｕ字形の溝を有する。382はシルト岩製で縦長である。表裏と１側面を使用している。383は泥岩製で、使用頻度のためか湾曲している部分が見られる。

軽石製品（第49図）

384・385は軽石製品で、漁撈用の浮子等の用途が想定される。384は中央部に穿孔が施され両面・縁周を整形している。385は楕円形を呈し、片面は研磨されている。

駒石（第50図）

386～397は肉薄でやや不整円形の碁石である。石材は頁岩製７点、砂岩製３点、ホルンフェルス製２点である。総数は14点出土し、そのうち12点を図化した。

（5）土製品

羽口（第50図）

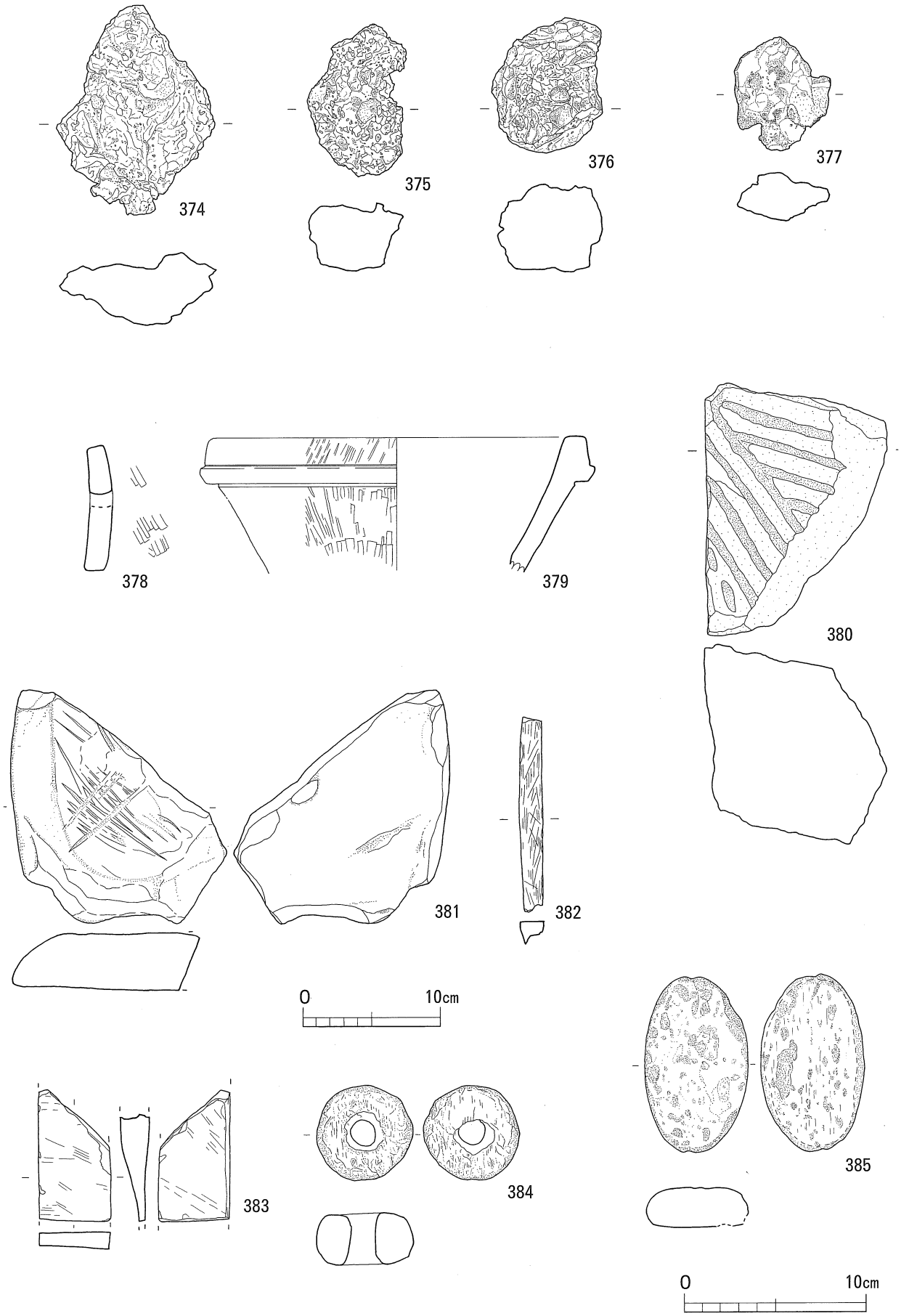
398はフイゴの羽口であり、周囲から鉄滓が出土している。端部の内外面には自然釉がガラス質になったものが付着している。

人形（第50図）

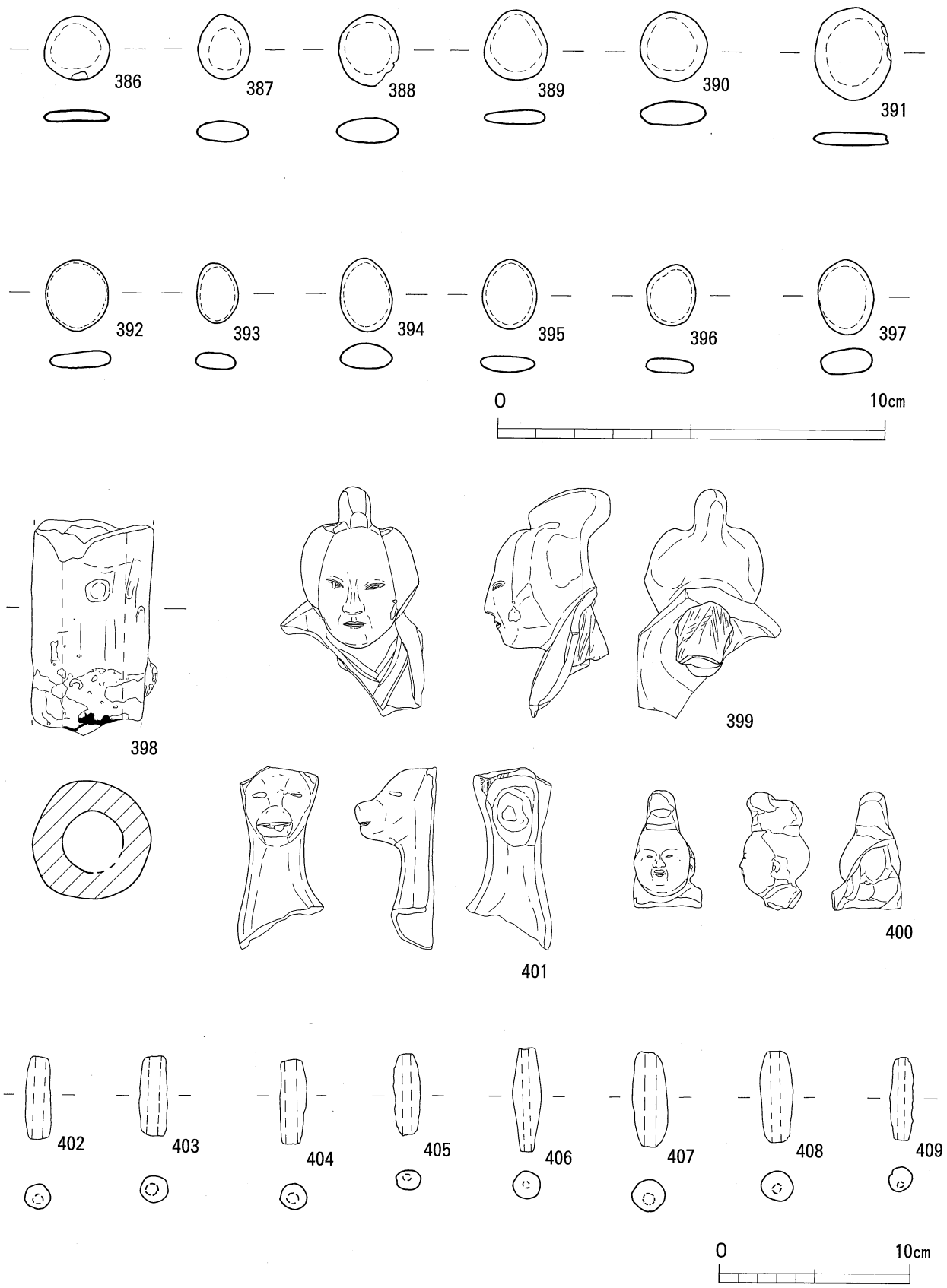
399～401は土製の型作り人形であり全てSC1の埋土上層から出土している。401は犬かと思われる。

土錘（第50図）

402～409は土師質の土錘である。出土総数は71点でそのうち８点を図化した。曲輪Ⅴと曲輪Ⅷでその９割以上を占める。各個体の計測値については、表17・18に掲載した。



第49図　金属製品・石製品実測図(381 1/4、他は1/3)



第50図　石製品・土製品実測図(381～397 2/3、398～409 1/3)

第３表　本城跡土器観察表（１）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅶ 堀切１	(10)	(6)	(3)	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ａ－１
2	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	(11)	(7)	3	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ａ－１
3	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	12	8	4	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
4	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	13	9	5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
5	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	12	9	3.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の透明な鉱物粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
6	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅷ	13	9	4	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
7	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	14	8	4	回転ナデ 後ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	１㎜以下の黒褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
8	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	13	9	4	回転ナデ	回転ナデ 黒斑	浅黄橙色 (10YR8/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
9	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	12	5	4	回転ナデ	回転ナデ	赤橙色 (10R6/6)	赤橙色 (10R6/6)	２㎜以下の灰褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
10	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	13	9	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－１
11	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	6	(5)	1	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ａ－１
12	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	1	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ａ－１
13	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－２
14	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	6	1	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－２
15	土師器	浅Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ	7	5	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－２
16	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ	8	6	－	回転ナデ	回転ナデ 粘土痕	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	2.5㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－２
17	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ	8	6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｂ－２
18	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ	7	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｃ－３
19	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ 堀切２	7	6	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｃ－３
20	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｃ－３
21	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅸ	6	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	１㎜以下の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｃ－３
22	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	6	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精良	ヘラ切り底 Ⅰ－Ｃ－３
23	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	10	8	3	回転ナデ 板目痕	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	１㎜以下の無色透明の鉱物粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ類
24	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ ＳＥ１	(13)	9	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ類
25	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ ピット２	9	7	1	回転ナデ	回転ナデ ナデ	橙色 (5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ類
26	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	14	8	3	回転ナデ スス付着	回転ナデ 黒変 指ナデ	灰褐色 (7.5YR5/2)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1.5㎜以下の茶色の粒を含む	ヘラ切り底 Ⅰ類
27	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1～3.5㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
28	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
29	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	5	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	２㎜以下 の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
30	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	回転ナデ 黒変	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	1.5㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
31	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1～4㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
32	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	１～4㎜以内 の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
33	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	明褐灰色 (7.5YR7/2)	明褐灰色 (7. 5YR7/2)	１.５㎜以下の褐色、黒色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
34	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (10YR7/3)	２㎜以下の赤褐色の砂粒、８㎜大の高師小僧がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
35	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	8	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	２㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
36	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	２㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１

第４表　本城跡土器観察表（２）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
37	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	8	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	精良　1～2㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－A－1
38	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－1
39	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	4	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	5.5㎜大の高師小僧を含む	糸切り底 Ⅱ－A－2
40	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	3	回転ナデ 水平方向に圧痕	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
41	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ 指ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
42	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1㎜以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－A－3
43	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	3	回転ナデ 水平方向に圧痕	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
44	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	3	回転ナデ 板目痕	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
45	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
46	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 (10YR5/1)	褐灰色 (10YR5/1)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
47	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	4	回転ナデ 板目痕	回転ナデ 指頭痕	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
48	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－A－3
49	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	2.5㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
50	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ やや強めの回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
51	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	5	4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
52	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	3	ナデ 回転ナデ ヨコナデ	ナデ 回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
53	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	—	4	回転ナデ	回転ナデ	灰白 (10YR7/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
54	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
55	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	5	3	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	1～4㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
56	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	4	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
57	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1～4㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
58	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	2㎜以下の褐色の粒、光沢のある半透明の粒を少量含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
59	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ やや強めの回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－2
60	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	5	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	5㎜以下で赤褐色の粒が多くみられる	糸切り底 Ⅱ－B－2
61	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR)	にぶい橙色 (7.5YR)	3㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
62	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	3㎜以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－B－2
63	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1㎜以下の茶色砂粒を僅かに含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
64	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	5㎜程度の茶色の粒、2㎜以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
65	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	3	回転ナデ	回転ナデ スス付着	浅黄橙色 (10YR8/4	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	2㎜以下の赤褐色砂粒と、2.5㎜以下の褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
66	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	5	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	1～5㎜大の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－2
67	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	8	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－3
68	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	8	4	回転ナデ 板目圧痕	回転ナデ 植物圧痕	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－B－3
69	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1～6㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－3
70	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅸ	13	8	3	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	6㎜大の褐色の粒、2㎜以下の褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－3
71	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅷ	12	8	4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	6㎜大の赤褐色の粒、2㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－B－3
72	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	4	回転ナデ	回転ナデ 斜方向のナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良　1㎜以下の茶褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－C－2

第５表　本城跡土器観察表（３）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
73	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
74	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	4	4	回転ナデ ヨコナデ	回転ナデ ヨコナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	１㎜大の赤褐色粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
75	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	１mm大の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
76	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
77	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	6	4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	１㎜以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
78	土師器	坏 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	4	5	回転ナデ ヨコナデ	回転ナデ ヨコナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	１～1.5㎜大の赤褐色粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
79	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
80	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	１㎜大の褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
81	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
82	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
83	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ 不定方向にナデ	回転ナデ ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
84	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ 強めの回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
85	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
86	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	１㎜以下の微細な粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
87	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	粗い回転ナデ ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－１
88	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ 強めの回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
89	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
90	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	１㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
91	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
92	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
93	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ 黒斑	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
94	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ａ－２
95	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ａ－３
96	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅴ	(8)	5	1	回転ナデ	回転ナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (2.5YR6/6)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－１
97	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	3mm以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－１
98	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	橙色 (7.5YR7/6)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－１
99	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	２㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－１
100	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	1	5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－１
101	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	3	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ ヨコナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	明黄褐色 (10YR7/6)	４㎜大と２～１㎜大以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
102	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	２㎜以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
103	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	６㎜大の高師小僧がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
104	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	２㎜以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
105	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	５㎜大の高師小僧を含む、2.5㎜以下の茶褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
106	土師器	Ⅲ口縁 ～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	３㎜以下の茶色の粒を少量含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
107	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	２㎜以下の茶褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
108	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	２㎜大褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２

第６表　本城跡土器観察表（４）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
109	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	4㎜以下の茶色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
110	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
111	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2㎜以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
112	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ 口縁スス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1～3.5㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
113	土師器	片口Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	3㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
114	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	2㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
115	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	5	2	回転ナデ	回転ナデ 指ナデ	橙色 (5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	2㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
116	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	7㎜以内の高師小僧を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
117	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	4㎜以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
118	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	2㎜以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
119	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	6	2	回転ナデ	回転ナデ	褐灰 (10YR6/1)	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	2㎜以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｂ－２
120	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ スス付着	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
121	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	3	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1～2.5㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
122	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	5㎜大の褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
123	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	4㎜大の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
124	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	3	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1㎜大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
125	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2.4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	橙色 (7.5YR7/6)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
126	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	1㎜大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
127	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ やや強めの回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2.5㎜以下の赤茶色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
128	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1～5㎜大の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
129	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	3㎜以下の茶色、黒色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
130	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1.5㎜大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
131	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
132	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ 板目痕	回転ナデ ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－１
133	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
134	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着 ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
135	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1㎜以下の砂粒を微量含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
136	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	2㎜大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
137	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
138	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
139	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
140	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	黄灰色 (2.5Y5/1)	1～2㎜以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
141	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	3㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
142	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	微細な赤褐色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
143	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
144	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を微量含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２

第７表　本城跡土器観察表（５）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
145	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	3㎜以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
146	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	1㎜以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
147	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (10YR7/4)	にぶい橙色 (10YR7/4)	2㎜以下の赤褐色砂粒と、1㎜以下の黒色砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
148	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
149	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
150	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ 短い縦ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
151	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ ヨコナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の砂粒を微量含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
152	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	2	5	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	内外面共にかすかにすす付着 Ⅱ－Ｃ－２
153	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	2㎜以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
154	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	6	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－２
155	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
156	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
157	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ 不定方向にナデ	回転ナデ 不定方向にナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
158	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅷ 曲輪Ⅴ	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
159	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
160	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	4	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
161	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ 不定方向にナデ	回転ナデ 不定方向にナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
162	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｃ－３
163	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	7	3	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－１
164	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	1㎜以下の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－１
165	土師器	灯明Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	3	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	灰黄褐色 (10YR6/2)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－１
166	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－１
167	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	(11)	6	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
168	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
169	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	6	2	回転ナデ 黒斑	回転ナデ 黒斑	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1㎜以下の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
170	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	4	3	やや強めの 回転ナデ	やや強めの 回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
171	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	12	6	3	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
172	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
173	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	(11)	6	3	回転ナデ 板目痕 黒斑	回転ナデ ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	1㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
174	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	11	8	2	回転ナデ 板目痕	回転ナデ ナデ	浅黄橙色 (10YR8/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	2㎜以下の赤褐色の砂粒を少量含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
175	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	(13)	7	3	回転ナデ 板目痕	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	2㎜以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
176	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	8	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	1.5㎜以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
177	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	8	4	回転ナデ 黒斑	回転ナデ ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	2㎜以下の赤褐色砂粒がみられる	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２
178	土師器	Ⅲ 口縁～底部	曲輪Ⅴ	13	7	4	回転ナデ スス付着	回転ナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精良	糸切り底 Ⅱ－Ｄ－２

第８表　本城跡出土陶磁器 観察表（１）

遺物番号	種別	器種	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
179	白磁	碗	曲輪Ⅴ	(15)	－	－	口縁部口禿げ	施釉	灰白色	灰白色	中国産　白磁 13Ｃ
180	白磁	端反碗	曲輪Ⅷ	(15)	－	－	貫入	施釉・貫入	灰白色	淡黄色	中国産　白磁
181	白磁	碗	曲輪Ⅷ	－	(4)	－	ヘラケズリ調整 底部露胎	見込み外周に線刻	明緑灰色	灰白色	中国産　白磁
182	陶器	皿	曲輪Ⅳ	－	(4)	－	全面施釉 畳付砂付着	砂目痕・貫入	灰白色	灰白色	中国産　白磁
183	青磁	碗	曲輪Ⅷ	(14)			施釉	施釉　象嵌線	灰	灰	中国産　青磁 13Ｃ前後
184	青磁	碗	曲輪ⅤⅢ層	(12)	－	－	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
185	青磁	碗	曲輪ⅤⅢ層	(15)	－	－	蓮弁文 口縁部はわずかに内傾する	釉に気泡を多く含む	灰オリーブ色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 14Ｃ後半～15Ｃ初期
186	青磁	碗	曲輪Ⅷ	(13)	－	－	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 15Ｃ～16Ｃ
187	青磁	碗	曲輪Ⅵ	(18)	－	－	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 16Ｃ後半
188	磁器	端反碗	曲輪Ⅷ・Ⅸ 堀切２	(15)	－	－	施釉	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯系
189	磁器	端反碗	曲輪Ⅴ	15	7	7	施釉　露胎 砂目有り	施釉	灰オリーブ色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯系
190	青磁	坏	曲輪Ⅴ	(10)	－	－	蓮弁文 折縁口縁　上面に重ね焼き跡？	施釉	明オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
191	青磁	坏	曲輪Ⅴ	－	－	－	蓮弁文	釉に気泡を多く含む	灰オリーブ色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 14Ｃ～15Ｃ
192	青磁	花文稜花皿	曲輪Ⅸ	(11)	(6)	(2.9)	高台内釉剥ぎ	ヘラ描き文	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
193	青磁	花文稜花皿	曲輪Ⅷ	(13)	－	－	施釉　貫入	ヘラ描き文	暗オリーブ灰色	灰色	中国産　青磁 龍泉窯？ 15Ｃ～16Ｃ
194	青磁	高台付皿	曲輪Ⅷ	14	7	4	高台内露胎 砂付着	見込み印花の草花文	灰オリーブ色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
195	青磁	高台付皿	曲輪Ⅴ	－	(5.5)	－	高台内蛇の目釉剥　畳付一部釉剥ぎ？	見込みスタンプ花文	明緑灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
196	青磁	高台付皿	曲輪Ⅴ	－	(5.3)	－	高台内蛇の目釉剥ぎ	見込みスタンプ花文	明オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
197	青磁	高台付皿	曲輪Ⅸ	11	5	4	高台内釉剥ぎ	見込みに双魚文（陰刻）	明緑灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
198	青磁	高台付皿	曲輪Ⅴ	－	6	－	高台内釉剥ぎ	見込みスタンプ双魚文	明緑灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
199	青磁	碗	曲輪Ⅷ	－	5	－	畳付露胎	見込み雲？印スタンプ象嵌	オリーブ灰色	オリーブ灰色	中国産　青磁 龍泉窯
200	青磁	高台付皿	曲輪Ⅳ	－	7	－	高台内釉剥ぎ 窯道具？跡有り	見込みにスタンプ草花文を施し、その部分を釉剥ぎ、窯道具？跡	明オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
201	白磁	碗	曲輪Ⅴ	－	5	－	高台無釉	見込み陰刻文字「福○○泰」？	灰オリーブ色	灰白色	中国産　白磁
202	青磁	蓮花文盤	曲輪Ⅴ	－	－	－	高台内蛇の目釉剥ぎ 胎土付着	見込みスタンプ花文？	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
203	青磁	台付皿（盤）	曲輪Ⅷ	－	(16)	－	全面施釉 高台内釉剥ぎ	見込みに花文（陽刻）	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯
204	青磁	盤	曲輪Ⅵ	－	－	－	口縁を輪花状に作る	口縁部にヘラ描き文 胴部に蓮花文？ 釉が厚く不明瞭	オリーブ灰色	灰色	中国産　青磁 龍泉窯 15Ｃ～16Ｃ
205	青磁	盤	曲輪Ⅷ・Ⅸ 堀切２	－	12	－	高台蛇の目釉剥ぎ	見込み花文？側面蓮花文？	オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 14Ｃ～15Ｃ
206	青磁	蓮花文盤	曲輪Ⅷ	(23)	－	－	施釉　貫入	蓮花文	灰オリーブ色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 15Ｃ～16Ｃ
207	青磁	蓮花文盤	曲輪Ⅴ	(21)	－	－	施釉	蓮花文	オリーブ灰色	橙色	中国産　青磁 龍泉窯 14Ｃ～15Ｃ
208	青磁	蓮花文盤	曲輪Ⅷ	(24)	－	－	施釉	蓮花文	明オリーブ灰色	灰白色	中国産　青磁 龍泉窯 15Ｃ～16Ｃ
209	磁器	碗	曲輪Ⅷ	－	－	－	青磁釉 口縁部に３条の線（象嵌） 下部にスタンプ印花文（象嵌）、陰刻線	貫入	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	中国産　青磁 李朝 12Ｃ～13Ｃ

第９表　本城跡出土陶磁器 観察表（２）

遺物番号	種　別	器　種	地　点	法　量(cm)			手法・調整・文様ほか		色　調		備　考
				口 径	底 径	器 高	外　面	内　面	外　面	内　面	
210	磁器	青花碗	曲輪Ⅴ	－	－	－	口縁部に１条の線鶴文	素描きの雷文	灰白色	灰白色	中国産　青花 景徳鎮 16Ｃ～17Ｃ前半
211	磁器	青花碗	曲輪Ⅷ	－	－	－	釉ちぢれ	唐草文？		灰白色	中国産　青花 明末～清初
212	磁器	青花碗	曲輪Ⅷ	(10)	－	－	口縁部に簡便化した青海波文、胴部に芭蕉葉文	口縁部に２条の圏線	明緑灰色	灰白色	中国産　青花 景徳鎮 16Ｃ前半
213	磁器	青花碗	曲輪Ⅷ	(12)	－	－	口縁部に２条の圏線　草花文	口縁部に２条の圏線を巡らす		灰白色	中国産　青花 景徳鎮 16Ｃ
214	磁器	青花皿	曲輪Ⅴ	－	4	－	碁笥底 側面に牡丹唐草文？その下に圏線２条	見込み唐人文 圏線２条	明緑灰色	灰白色	中国産　青花 景徳鎮 15Ｃ末～16Ｃ前半
215	磁器	青花皿	曲輪Ⅴ	12	4	3	碁笥底 口縁部に１条、胴部に２条巡らす　胴部に梵字	見込み唐人文 圏線２条 口縁部に１本	明緑灰色	灰白色	中国産　青花 景徳鎮 15Ｃ末～16Ｃ前半
216	陶器	甕	曲輪Ⅴ ＳＣ２	(36)	－	－	自然釉　指ナデ	ヨコナデ、自然釉 頸部に工具痕が縦に入る	淡黄色	赤褐色	備前 15Ｃ～16Ｃ
217	陶器	甕	曲輪Ⅴ ＳＣ２	(36)	－	－	自然釉　指ナデ	ヨコナデ、自然釉 頸部に工具痕が縦に入る	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	備前 15Ｃ～16Ｃ
218	陶磁器	甕	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ ＳＣ２	(33)	－	－	ヨコナデ　自然釉	ヨコナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	備前 15Ｃ～16Ｃ
219	陶器	甕	曲輪Ⅴ ＳＣ２	36	34	79	ヨコナデ、指頭痕により成形痕跡有り、叩き上粗いハケメ状痕跡	ヨコナデ、指頭痕により成形痕跡有、叩き上粗いハケメ状痕跡	黄灰色	黄灰色	備前 14Ｃ～15Ｃ
220	陶器	擂鉢	曲輪Ⅴ ＳＣ4	31	14	11	輪積み痕、指ナデ痕あり	12本１単位のクシ描き 輪積み痕有り	灰色	灰色	備前 14Ｃ代
221	陶器	擂鉢	曲輪Ⅴ	30	15	10.2	輪積み痕有り 口縁部のみ施釉？(鉄釉)	7本１単位のクシ描き	暗赤褐色	にぶい赤褐色	備前 14Ｃ代
222	陶器	擂鉢	曲輪Ⅷ 虎口	(27)	(16)	(11.1)	輪積み痕、指オサエ痕有り	下から上へ7本１単位のクシ描き	にぶい褐色	黄褐色	備前 14Ｃ後半～15Ｃ
223	陶器	擂鉢	曲輪Ⅴ	(31)	－	12.8	鉄釉 口縁部のみ施釉	クシ描き11本１単位 口縁部のみ施釉	褐灰色	褐灰色	肥前 17Ｃ中頃～後半
224	陶器	擂鉢	曲輪Ⅷ	33	11	12.8	口縁部のみ鉄釉で施釉 右糸切り痕	10～16本１単位のクシ描き 底部胎土目痕あり	暗褐色	褐灰色	肥前 17Ｃ中頃～後半
225	陶器	擂鉢	曲輪Ⅷ	(27)	－	－	鉄釉 口縁部付近から柿釉？流し掛け	クシ描き14本１単位 口縁上面に目跡有り	黒褐色	にぶい黄褐色	肥前 17Ｃ～18Ｃ前半
226	陶器	擂鉢	曲輪Ⅷ	－	(11)	－	底部糸切り痕、目跡有り	14本１単位クシ描き	明赤褐色	明赤褐色	肥前系か？
227	陶器	擂鉢	曲輪Ⅴ	(24)	－	－	横方向に砂粒の動き有り 浅い沈線	すり目の後、横ナデ　沈線　全体にすり目	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	堺・明石系
228	陶器	擂鉢	曲輪Ⅴ	22	11	6.9	形骸化した片口	８本１単位クシ描き	暗赤褐色	明赤褐色	時期・産地不明
229	陶器	擂鉢	曲輪Ⅳ	40	16	16	鉄釉　高台露胎 胴部に白化粧土装飾あり 片口（形骸化）	全面施釉 口縁上面に目跡？の窪みあり 15本1単位のクシ描き	黒色	橙色	薩摩系 17Ｃ～18Ｃ
230	陶器	擂鉢	曲輪Ⅷ	(29)	－	－	ヘラ状工具によるヨコナデ ハケ目痕	11か12本１単位クシ描き	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	時期・産地不明
231	陶器	鉢	曲輪Ⅷ	(33)	－	－	沈線 横方向に砂粒の動き有り	7本１単位のクシ描き	灰褐色	灰褐色	時期・産地不明
232	染付	大皿	曲輪Ⅴ	21	14	3.1	胴部に唐草文 高台脇に一条、高台に二条線を巡らす 畳付釉剥ぎ、ハリ跡	見込み虫花文 側面菊花文 墨弾き、ゴス	灰白色	灰白色	肥前 17Ｃ後半～18Ｃ前半
233	陶胎染付	染付大皿	曲輪Ⅴ	－	13	－	胴部に１条、高台に２条、高台内に１条線を巡らす　裏名渦福	鳥梅花文	灰白色	灰白色	漳州窯 17Ｃ

第10表　本城跡出土陶磁器 観察表（3）

遺物番号	種別	器種	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
234	染付	そば猪口	曲輪Ⅷ	8	5	5.3	菖蒲文？ 底部2条圏線 畳付露胎、砂付着	施釉	灰白色	灰白色	肥前系 18C代
235	染付	そば猪口	曲輪Ⅴ	7	(5)	5.4	竹文	施釉	灰白色	灰白色	肥前系 18C代
236	染付	碗	曲輪Ⅴ	7	3	－	青磁釉 畳付露胎、砂付着	口縁部四方襷文 見込2条圏線内に五弁花コンニャク崩れ	灰オリーブ色	灰色	肥前系 18C後半
237	染付	瓶	曲輪Ⅴ	－	7	－	竹文・畳付露胎	施釉	灰白色	灰白色	
238	染付	碗	曲輪Ⅴ	9	4	5.1	梅花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 裏銘「大明年製」崩れ 畳付露胎、砂付着	施釉・染付	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C中頃
239	染付	碗	曲輪Ⅸ	10	4	5	草花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 裏銘「大明年製」崩れ 畳付釉剥、砂付着	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前 18C後半
240	染付	碗	曲輪Ⅴ	10	4	5	草花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 裏銘「大明年製」崩れ 畳付釉剥ぎ、砂付着	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前 18C後半
241	染付	碗	曲輪Ⅴ	9	4	－	梅花文 高台脇に1条、高台に2条、高台内に1条圏線 裏銘「大明年製」崩れ 畳付無釉	砂付着	灰白色	灰白色	肥前 17C末～ 19C後半
242	染付	碗	曲輪Ⅴ	10	4	5	梅花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 裏銘「大明年製」崩れ 貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色	肥前系 18C後半
243	染付	碗	曲輪Ⅴ	12	4	－	草花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 畳付露胎、砂付着	見込みを蛇の目状に釉剥ぎした上から再び施釉 砂付着	灰白色	灰白色	肥前系 18C後半
244	染付	碗	曲輪Ⅷ	11	5	5	折梅花文 高台脇に1条、高台に2条、圏線　畳付露胎、砂付着	見込み蛇の目釉剥ぎのちその箇所に再び施釉（泥漿？） 砂付着	灰白色	灰白色	肥前系 17C後半～19C
245	染付	碗	曲輪Ⅴ	13	－	－	草文 高台脇に1条、高台に1条？圏線	口縁部に文様帯（ねじり文？）、その下に1条、胴部に2条圏線 見込み蛇の目釉剥ぎ	灰白色	灰白色	肥前系 17C後半～19C
246	染付	碗	曲輪Ⅷ 曲輪Ⅸ	11	4	5	折梅花文 高台脇に1条、高台に2条、圏線　畳付露胎、砂付着	見込み蛇の目釉剥ぎのちその箇所に再び施釉（泥漿？） 砂付着	明オリーブ灰色	灰白色	肥前系 1700～1750年代
247	染付	碗	曲輪Ⅴ	14	5	7	草花文 高台脇に1条、高台に2条圏線 畳付釉剥ぎ 砂付着	見込み蛇の目釉剥ぎのちその箇所に再び施釉（泥漿？） 砂付着	明オリーブ灰色	灰白色	肥前系 1700～1750年代
248	染付	碗	曲輪Ⅷ	10	4	5	二重網目文 高台脇に1条、高台に2条、線を巡らす 裏名渦福	一重網目文 見込み圏線二条内に菊花文	明緑灰色	灰白色	肥前系 1700～1750年代
249	染付	碗	曲輪Ⅴ	10	－	－	二重網目文	一重網目文	灰白色	灰白色	肥前系 18C前半
250	染付	碗	曲輪Ⅴ	9	4	4	二重網目文 畳付露胎	見込み圏線2条その中に五弁花コンニャク印判	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C前半～18C中頃

第11表　本城跡出土陶磁器 観察表（4）

遺物番号	種別	器種	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
251	染付	碗	曲輪Ⅴ	10	4	5	胴部に松文コンニャク印判、高台脇に1条、高台に2条圏線 畳付露胎、砂付着	施釉・砂目痕	明緑灰色	灰白色	肥前系 18後半
252	染付	碗	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ	10	4	5	胴部コンニャク印判 蔦文と丸文（内に蔦文）を交互に配置 高台脇に1条、高台に2条圏線 裏銘「渦福」崩れ畳付露胎、砂付着	施釉・染付・コンニャク印判	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C後半
253	染付	碗	曲輪Ⅴ	－	4	－	丸文・蛍文 飛びガンナ2条胴部に巡らす 高台脇に1条、高台に1条圏線 畳付露胎、砂付着	見込み五弁花コンニャク印判 蛇の目釉剥ぎのち鉄漿 砂付着	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 18C後半
254	染付	碗	曲輪Ⅴ	11	4	5	丸文、蛍文 高台脇1条、高台1条圏線 畳付露胎、砂付着	胴部1条圏線 見込み五弁花コンニャク印判 蛇の目釉剥ぎのち鉄漿 砂付着	明青灰色	灰白色	肥前系 18C後半～19C
255	染付	碗	曲輪Ⅷ	11	4	5	丸文、蛍文 高台脇1条、高台1条圏線 畳付露胎、砂付着	胴部2条圏線 見込み螢文？蛇の目釉剥ぎのち鉄漿？砂付着	明青灰色	灰白色	肥前系 18C後半～19C
256	染付	碗	曲輪Ⅸ	－	4	－	青磁釉 高台内のみ染付釉 裏銘「二重方形枠内渦福」 畳付露胎、砂付着	見込み2条圏線内に五弁花文	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 1760～1780年代
257	染付	青磁染付蓋	曲輪Ⅴ	10	4	3	青磁釉 高台内のみ染付釉 畳付露胎、砂付着	口縁部四方襷文 見込み2条圏線内に五弁花コンニャク印判	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 18C後半
258	染付	青磁染付蓋	曲輪Ⅴ	8	4	2.9	青磁釉 高台内のみ染付釉 畳付露胎、砂付着	口縁部四方襷文 見込み2条圏線内に五弁花コンニャク印判	灰色	灰色	肥前系 1760～1780年代
259	染付	広東碗　蓋	曲輪Ⅴ	10	3.3	3	高台圏線2条 天井部に圏線1条肩部に草花文	草花文	明青灰色	灰白色	肥前？ 18C半ば～18C後半
260	染付	広東碗	曲輪Ⅷ	11	6	6	区画割りした中に山水文を描く 高台に1条圏線 畳付釉剥ぎ	口縁部2条圏線 胴部1条圏線 見込み鷺文崩れ	明青灰色	灰白色	肥前？ 18C半ば～18C後半
261	染付	青磁染付碗	曲輪Ⅷ	11	4	6	青磁釉 高台内のみ染付釉	口縁部四方襷文 見込2条圏線内に五弁花コンニャク印判	明オリーブ色	灰白色	肥前系 18C半ば～18C後半
262	染付	碗	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ	10	(3)	6	変形字	施釉	明オリーブ灰色	灰白色	肥前 19C前半
263	陶器	端反碗	曲輪Ⅴ	12	5	8	銅緑釉　底部露胎	施釉	緑灰色	灰色	嬉野内野山 17C後半
264	陶器	碗	曲輪Ⅴ	12	5	7	銅緑釉　底部露胎	透明釉	緑灰色	灰白色	嬉野内野山 17C末～18C
265	陶器	碗	曲輪Ⅳ	11	5	8	透明釉 畳付露胎、砂付着　貫入	施釉・貫入	浅黄色	灰白色	京焼か？ 17C末
266	陶器	碗	曲輪Ⅴ	13	5	6	透明釉 畳付露胎、砂付着　貫入	施釉・貫入	浅黄色	灰白色	京焼風 17C末
267	磁器	碗	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ	13	5.1	5.2	白磁釉 釉ちぢれ有り 畳付露胎、砂付着	見込み蛇の目釉剥ぎ 砂付着	灰白色	灰白色	肥前系 （在地？） 18C代
268	陶器	碗	曲輪Ⅷ	11	(4)	4	透明釉 高台露胎　貫入	見込み蛇の目釉剥ぎ	灰白色	灰白色	肥前 18C前半
269	磁器	朝顔型碗	曲輪Ⅷ	12	5	6	畳付釉剥ぎ 砂付着	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前系 （在地？） 18C前半

第12表　本城跡出土陶磁器 観察表（5）

遺物番号	種別	器種	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
270	陶器	碗	曲輪Ⅷ	13	4	5	透明釉？ 貫入	施釉・貫入	黄褐色	灰黄色	肥前系 18C前半
271	陶器	碗	曲輪Ⅴ	11	4	4	透明釉 高台露胎 貫入	見込み蛇の目釉剥ぎ	にぶい黄色	灰白色	肥前系 18C前半
272	陶器	溝縁皿	曲輪Ⅴ	(12)	－	－	灰釉　貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色	肥前 1610～1630年代
273	陶器	溝縁皿	曲輪Ⅷ	(22)	－	－	透明釉 貫入	施釉・貫入	灰オリーブ色	灰白色	肥前 1610～1630年代
274	陶器	溝縁皿	曲輪Ⅷ	－	－	－	灰釉・貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色	肥前 1610～1630年代
275	陶器	皿	曲輪Ⅴ	13	4	4	畳付砂目痕4	胴部に化粧土刷毛目 見込みにスタンプ印花象嵌 砂目痕4	灰褐色	にぶい赤褐色	肥前　三島唐津 17C前半
276	陶器	皿	曲輪Ⅴ	－	(5)	－	畳付釉剥ぎ	胴部に化粧土刷毛目 見込みにスタンプ印花象嵌 砂目痕4	オリーブ黒色	オリーブ黒色	肥前　三島唐津 17C前半
277	陶器	皿	曲輪Ⅴ	－	－	－	象嵌	施釉	褐灰色	にぶい赤褐色	肥前　三島唐津
278	陶器	皿	曲輪Ⅴ	－	13	－	施釉　露胎	施釉・象嵌・砂目痕	黒褐色	暗灰黄色	肥前　三島唐津
279	陶器	皿	曲輪Ⅴ	－	21	－	高台畳付以外は施釉 高台内面も一部施釉	象嵌（スタンプ印花文など） 見込み砂目痕	オリーブ黒色	暗褐色	肥前　三島唐津 17C後半
280	陶器	皿	曲輪Ⅳ 曲輪Ⅴ	－	12	－	胴部～高台脇に薄く鉄釉（鉄漿？）、口縁部付近は飴釉を施す	側面にスタンプ印花文による象嵌	灰オリーブ色	灰オリーブ色	肥前　三島唐津 17C後半
281	陶器	輪花皿	曲輪Ⅴ	19	8	7	口縁～胴部、化粧土刷毛目のち施釉 高台脇～高台内白化粧土を施す	全体に白化粧土 見込み蛇の目釉剥ぎ	淡黄色	赤褐色	肥前　唐津 17C後～18C前
282	陶器	皿	曲輪Ⅴ	19	7	6	高台露胎	側面白化粧土 見込み蛇の目釉剥ぎのち鉄漿を塗る	褐色	にぶい橙色	肥前　唐津 18C前
283	陶器	火入	曲輪Ⅴ	(23)	－	－	化粧土刷毛目 その上から飴釉 口唇部釉剥ぎ	薄く施釉	黒褐色	黒褐色	火入れ 17C後半
284	陶器	甕	曲輪Ⅷ	29	－	－	口縁上面無釉	自然釉	灰黄褐色	灰黄褐色	肥前系 17C前半
285	陶器	甕	曲輪Ⅴ	31	－	－	貼付突帯、口縁上部無釉	無釉 格子目タタキ痕	暗赤灰色	にぶい褐色	肥前系 17C前半
286	陶器	甕	曲輪Ⅴ	38	－	－	肩部に縄文突帯 口縁上部無釉	格子目のタタキ文	灰赤色	灰赤色	肥前系 17C後半
287	陶器	甕	曲輪Ⅴ	32	－	－	ヨコナデ　自然釉	ヨコナデ	暗赤褐色	赤褐色	肥前系 17C後半
288	陶器	壺	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ SC21	12	－	－	飴釉	細かいロクロ痕が残る	黒褐色	灰黄褐色	薩摩系 18C後半
289	陶器	壺	曲輪Ⅴ	11	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色	橙色	壺屋焼（沖縄） 18C半ば～19C
290	陶器	壺	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ	－	－	－	指オサエ痕 上下にナデ 肩部に把手を横位に貼り付ける その下に2条の圏線を施す	指オサエ痕	灰褐色	明赤褐色	壺屋焼（沖縄） 18C半ば～19C
291	陶器	壺	曲輪Ⅷ	－	21	－	ロクロ成形 底部（露胎）に砂付着	薄く施釉（ドベ釉？）	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	壺屋焼(沖縄) 18C半頃
292	陶器	鉢	曲輪Ⅴ	(37)	－	－	口縁下に取手 指オサエ痕有り	ヨコナデ・横方向の掻目	灰赤色	明赤褐色	
293	陶器	片口鉢	曲輪Ⅴ	(11)	(7)	(5)	鉄釉を薄く施釉 その上に自然釉がかかっている 高台露胎	施釉	灰黄褐色	にぶい黄褐色	肥前系 16C末～17C
294	陶器	土瓶(蓋)	曲輪Ⅴ	－	－	－	鉄釉施釉、自然釉付着	無釉	灰褐色	灰褐色	
295	陶器	土瓶(蓋)	曲輪Ⅴ	6	3	－	飴釉？施釉	無釉	暗オリーブ褐色	灰赤色	
296	陶器	土瓶(蓋)	曲輪Ⅷ	6	－	4	飴釉	無釉	極暗褐色	赤褐色	

第13表　本城跡出土陶磁器 観察表（6）

遺物番号	種別	器種	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
297	陶器	土瓶(蓋)	曲輪Ⅴ	7	－	5	鉄釉	無釉	黒褐色	灰黄褐色	
298	陶器	土瓶(蓋)	曲輪Ⅴ	10	－	4	施釉	無釉	オリーブ黒色	赤褐色	
299	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	鉄釉	施釉 注ぎ孔３個	暗褐色	黒色	
300	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	8	－	－	飴釉 口縁部釉剥ぎ 全体に自然釉付着	口縁部釉剥ぎ 注ぎ孔３個	黒褐色	黒褐色	
301	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	鉄釉	灰かぶり 注ぎ孔３個	黒褐色	にぶい赤褐色	
302	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	鉄釉	施釉 注ぎ孔３個	暗赤褐色	褐色	
303	陶器	土瓶	曲輪Ⅷ	－	－	－	飴釉 貫入	施釉ムラ有り 注ぎ孔３個	オリーブ褐色	にぶい赤褐色	
304	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	飴釉 貫入	口縁部以外施釉 注ぎ孔３個	暗オリーブ褐色	褐色	
305	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	7	－	－	露胎・煤付着	一部無釉 口縁部釉剥ぎ	黒褐色	黒褐色	佐賀県　塩田町 志田窯
306	陶器	土瓶	曲輪ⅤⅡ層	9	－	－	施釉	施釉 注ぎ孔１個	オリーブ黒色	暗オリーブ褐色	17C後半
307	陶器	土瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	底部露胎 煤付着	自然釉付着	黒褐色	灰褐色	肥前か薩摩？
308	陶器	土瓶	曲輪Ⅷ	－	－	－	飴釉 底部露胎 煤付着 胎土に亀裂有り	自然釉か？	オリーブ黒	灰白色	
309	陶器	土瓶	曲輪ⅤⅢ層	－	4	－	鉄釉施釉 底部露胎 三足付	施釉	黒褐色	黒褐色	
310	土師質	焙烙	曲輪Ⅴ	(31)	－	－	穿孔　ヨコナデ 粗いヨコナデ 薄い煤付着	ヨコナデ 穿孔	にぶい橙色	にぶい橙色	
311	土師質	焙烙	曲輪Ⅴ	－	－	－	ヨコナデ 煤付着	ヨコナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	
312	土師質	焙烙	曲輪Ⅴ	(33)	－	－	穿孔 濃い煤付着 ヨコナデ	穿孔 薄い煤付着 ヨコナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	
313	土師質	焙烙	曲輪Ⅴ	－	－	－	ヨコナデ　穿孔 煤付着	ヨコナデ　穿孔 一部黒変	橙色	橙色	
314	陶器	高台付皿	曲輪Ⅳ 曲輪Ⅴ 曲輪Ⅷ 曲輪Ⅸ	－	8	－	透明釉 畳付露胎 砂付着 貫入	見込み蛇の目釉剥ぎ	黄褐色	灰黄色	肥前系　志田窯 17C末～18C前半
315	陶器	灯明皿	曲輪Ⅴ	7	3	2	露胎 右糸切り痕	煤付着	にぶい浅黄色	明赤褐色	肥前 18C～19C
316	陶器	灯明皿	曲輪Ⅴ	7	3	2	露胎 右糸切り痕	煤付着	浅黄色	橙色	18C～19C
317	陶器	灯明皿	曲輪Ⅴ	10	4	2	口縁部以外は露胎	施釉・貫入・袖がうすくなっている	明オリーブ灰色	灰白色	瀬戸
318	陶器	蓋	曲輪Ⅳ	8	－	－	透明釉	無釉	浅黄色	淡黄色	
319	陶器	天目碗	曲輪Ⅴ	(12)	－	－	鉄釉の上から別の釉（天目釉？）掛け流し 底部露胎	鉄釉の上から別の釉（天目釉？）掛け流し	暗褐色	灰色	瀬戸美濃
320	陶器	天目碗	曲輪Ⅴ	－	－	－	黒釉（天目釉）	黒釉（天目釉）	黒色	明オリーブ灰色	瀬戸美濃
321	陶器	天目碗	曲輪Ⅴ	(11)	－	－	天目釉	天目釉	褐色	灰黄色	瀬戸美濃
322	陶器	仏花瓶	曲輪Ⅴ	22	－	－	口縁部上部に白化粧土、その上から飴釉	口縁部以外は露胎	オリーブ褐色	暗赤灰色	肥前系 18C代
323	陶器	仏花瓶	曲輪Ⅴ	－	9	－	透明釉を畳付以外に施釉、その上から飴釉を胴部より上に施す	底部中央に自然釉	褐色	暗赤灰色	肥前系 18C代
324	磁器	青磁仏花瓶	曲輪Ⅴ	－	6	－	頸部に把手（鳥?）を横位に貼り付ける 畳付露胎 砂付着	頸部までは薄く施釉	緑灰色	灰白色	肥前 18C代
325	陶器	瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	頸部黒釉 胴部は白化粧土刷毛目	回転ナデ 一部、釉だれが見られる	黒色	灰褐色	武雄系 17C末～18C前半
326	陶器	瓶	曲輪Ⅴ	－	－	－	白化粧土刷毛目 高台釉剥ぎ 砂付着	回転ナデ	浅黄色	灰褐色	武雄系 17C末～18C前半
327	磁器	香炉	曲輪Ⅴ	12	11	7	青磁釉 高台部分には鉄漿　胎土付着	口縁部のみ施釉 底部砂付着	明緑灰色	灰白色	肥前系 17C中頃
328	瓦質	火鉢	曲輪Ⅴ	(17)	－	－	スタンプ印花	回転ナデ	灰色	灰白色	
329	瓦質	火鉢	曲輪Ⅷ	(37)	－	－	突帯　スタンプ印花　透し窓	ナデ 面取	灰色	灰色	

第14表　本城跡出土銭貨観察表

遺物番号	銭貨名	出土地点	銭径(cm)	銭孔径(cm)	量目(g)	国名年号	鋳造年号間	背　文	備　考
330	開元通宝	曲輪Ⅴ	2.55	0.7	1.6	南唐	960－	月	
331	天聖元宝	曲輪Ⅴ	2.5	0.7	3.3	北宋	1023－		
332	皇宋通宝	曲輪Ⅷ	2.45	0.75	2.4	北宋	1038－39		
333	至和元宝	曲輪Ⅷ	2.4	0.6	2.2	北宋	1054－		
334	嘉祐通宝	曲輪Ⅷ	2.4	0.75	2.2	北宋	1056－		
335	熙寧元宝	曲輪Ⅴ	2.45	0.65	1.9	北宋	1068－77		
336	熙寧元宝	曲輪Ⅷ	2.35	0.55	3.6	北宋	1068－77		
337	熙寧元宝	曲輪Ⅷ	2.4	0.65	2.7	北宋	1068－77		
338	元豊通宝	曲輪Ⅴ	2.55	0.7	2.8	北宋	1078－		
339	元祐通宝	曲輪Ⅷ	2.5	0.7	3.0	北宋	1086－93		
340	元祐通宝	曲輪Ⅷ	2.5	0.7	2.5	北宋	1086－93		
341	元符通宝	曲輪Ⅴ	2.5	0.65	1.9	北宋	1098－		
342	政和通宝	曲輪Ⅴ	2.4	0.65	2.4	北宋	1111－		
343	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.6	3.0	明	1368－93		
344	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.55	2.6	明	1368－93		
345	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.6	2.3	明	1368－93		
346	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.6	2.8	明	1368－93	治	
347	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.55	1.9	明	1368－93		
348	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.55	2.5	明	1368－93	治	
349	洪武通宝	曲輪Ⅴ	2.3	0.55	2.5	明	1368－93		
350	寛永通宝	曲輪Ⅴ	2.55	0.6	3.3	寛永	1636－59	文	
351	寛永通宝	曲輪Ⅴ	2.2	0.65	1.9	寛永	1636－59		
352	寛永通宝	曲輪Ⅴ	2.5	0.55	3.1	寛永	1636－59		
353	寛永通宝	曲輪Ⅴ	2.25	0.65	2.2	寛永	1636－59		
354	寛永通宝	曲輪Ⅴ	2.45	0.65	2.1	寛永	1636－59		
355	寛永通宝	曲輪Ⅷ	2.3	0.65	2.5	寛永	1636－59		
356	寛永通宝	曲輪Ⅷ	2.3	0.65	2.4	寛永	1636－59		
357	半銭貨	曲輪Ⅷ	2.2	－	3.3				
358	一銭貨	曲輪Ⅳ	2.8	－	6.9		1874		
	紹聖元宝	曲輪Ⅷ	2.5	0.75	1.0	北宋	1094		

第15表　本城跡出土金属製品計測表

遺物番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備　考
359	煙管	曲輪Ⅴ	5.3	火皿1.0 小口径1.0	－	銅製
360	煙管	曲輪Ⅷ	4.8	火皿1.5 小口径0.8	－	銅製
361	仏具	曲輪Ⅴ	2.5	3.1	－	銅製
362	仏具	曲輪Ⅴ	2.3	2.3	－	銅製
363	六器	曲輪Ⅴ	－	－	－	銅製　推定口径7.3cm
364	簪	曲輪Ⅷ	18.3	1.2	0.3	銅製
365	剣	曲輪Ⅴ	10.7	2.4	0.4	鉄製
366	刀子	曲輪Ⅴ	11.5	1.5	0.2	鉄製
367	分銅	曲輪Ⅴ	5.1	4.1	3.6	鉄製
368	錠前	曲輪Ⅴ	4.8	9.3	1.6	鉄製
369	錠前	曲輪Ⅴ	4.2	11.9	1.4	鉄製
370	鋤	曲輪Ⅴ	35.9	9.6	1.2	鉄製
371	鋤	曲輪Ⅴ	9.2	7.8	0.3	鉄製
372	鋤	曲輪Ⅴ	7.5	7.0	0.3	鉄製
373	鍬	曲輪Ⅴ	13.8	12.9	0.5	鉄製

第16表　本城跡出土石製品計測表

遺物番号	実測番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　材
380		石臼	曲輪Ⅴ	13.9	10.0	10.3	2000.0	砂岩
381		砥石	曲輪Ⅴ	17.2	15.8	4.2	1200.0	砂岩
382		砥石	曲輪Ⅳ	10.7	1.3	1.3	23.4	シルト岩
383		砥石	曲輪Ⅴ	7.2	4.0	1.6	47.6	泥岩
384		軽石製品	曲輪Ⅷ	5.2	5.3	2.9	19.5	軽石
385		軽石製品	曲輪Ⅴ	9.6	5.7	2.2	41.5	軽石
386		駒石	曲輪Ⅴ	1.8	1.7	0.4	1.6	頁岩
387		駒石	曲輪Ⅴ	1.7	1.4	0.6	1.9	ホルンフェルス
388		駒石	曲輪Ⅴ	1.8	1.6	0.7	2.6	頁岩
389		駒石	曲輪Ⅴ	1.9	1.7	0.4	1.9	頁岩
390		駒石	曲輪Ⅴ	1.8	1.8	0.7	3.1	砂岩
391		駒石	曲輪Ⅴ	2.4	2.0	0.4	2.7	頁岩
392		駒石	曲輪Ⅷ	1.8	1.7	0.4	1.7	頁岩
393		駒石	曲輪Ⅷ	1.6	1.1	0.4	0.9	頁岩
394		駒石	曲輪Ⅷ	1.9	1.4	0.7	2.5	砂岩
395		駒石	曲輪Ⅷ	1.8	1.5	0.4	1.4	頁岩
396		駒石	曲輪Ⅷ	1.6	1.3	0.4	1.0	砂岩
397		駒石	曲輪Ⅷ	1.9	1.5	0.6	2.3	ホルンフェルス
	1332	駒石	曲輪Ⅷ	1.8	1.3	0.6	1.9	頁岩
	1334	駒石	曲輪Ⅷ	2.0	1.9	0.5	2.3	頁岩

第17表　本城跡出土土錘計測表（1）

遺物番号	実測番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	孔　径(cm)	備　考
402		土錘	曲輪Ⅴ	4.4	1.3	1.4	8.1	0.5	
403		土錘	曲輪Ⅴ	4.2	1.5	1.4	7.6	0.7	
404		土錘	曲輪Ⅴ	4.4	1.4	1.4	7.3	0.7	
405		土錘	曲輪Ⅴ	4.3	1.4	1.1	6.3	0.4	
406		土錘	曲輪Ⅷ	5.0	1.8	1.7	12.9	0.6	
407		土錘	曲輪Ⅷ	4.8	1.8	1.6	11.7	0.5	
408		土錘	曲輪Ⅸ	4.4	1.3	1.3	6.1	0.4	
409		土錘	曲輪Ⅷ	4.4	1.3	1.3	6.1	0.3	
	1121	土錘	曲輪Ⅳ	3.1	1.3	1.1	4.0	0.4	
	1137	土錘	曲輪Ⅳ	4.5	1.5	1.4	9.7	0.3	
	1138	土錘	曲輪Ⅳ	4.2	1.3	1.2	6.0	0.3	
	1101	土錘	曲輪Ⅴ	3.2	1.6	1.4	6.9	0.6	
	1102	土錘	曲輪Ⅴ	4.3	1.2	1.1	5.1	0.5	
	1104	土錘	曲輪Ⅴ	4.0	1.5	1.4	6.1	0.5	
	1105	土錘	曲輪Ⅴ	5.0	1.6	1.5	10.2	0.4	
	1106	土錘	曲輪Ⅴ	4.8	1.3	1.3	8.5	0.4	
	1107	土錘	曲輪Ⅴ	4.7	1.5	1.4	9.1	0.7	
	1108	土錘	曲輪Ⅴ	4.4	1.5	1.4	8.1	0.6	
	1109	土錘	曲輪Ⅴ	4.9	2.0	1.7	12.9	0.5	
	1110	土錘	曲輪Ⅴ	3.4	1.6	1.3	6.3	0.6	
	1111	土錘	曲輪Ⅴ	4.3	1.3	1.2	5.4	0.3	
	1112	土錘	曲輪Ⅴ	3.6	1.5	1.4	7.5	0.4	
	1113	土錘	曲輪Ⅴ	2.8	1.4	0.5	3.2	0.6	
	1114	土錘	曲輪Ⅴ	6.7	1.7	1.4	13.2	0.3	
	1115	土錘	曲輪Ⅴ	5.7	1.5	1.4	10.6	0.5	
	1116	土錘	曲輪Ⅴ	4.8	1.7	1.5	10.6	0.5	
	1117	土錘	曲輪Ⅴ	4.1	1.6	1.5	8.9	0.5	
	1118	土錘	曲輪Ⅴ	3.0	1.6	1.3	5.9	0.4	
	1119	土錘	曲輪Ⅴ	3.4	1.4	1.3	4.0	0.6	
	1120	土錘	曲輪Ⅴ	2.8	1.5	1.4	4.7	0.3	
	1122	土錘	曲輪Ⅴ	3.9	1.6	1.6	8.6	0.6	
	1123	土錘	曲輪Ⅴ	3.8	1.6	1.5	7.3	0.5	
	1124	土錘	曲輪Ⅴ	3.6	1.6	1.6	8.6	0.5	
	1125	土錘	曲輪Ⅴ	2.5	1.4	1.4	4.5	0.5	
	1127	土錘	曲輪Ⅴ	3.1	1.3	1.0	3.1	0.6	
	1128	土錘	曲輪Ⅴ	3.9	1.4	1.2	4.6	0.5	
	1129	土錘	曲輪Ⅴ	4.1	1.7	1.8	8.1	0.9	

第18表　本城跡出土土錘計測表（2）

遺物番号	実測番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	孔　径(cm)	備　考
	1130	土錘	曲輪Ⅴ	4.3	1.3	1.2	5.6	0.4	
	1133	土錘	曲輪Ⅴ	4.2	1.6	1.6	7.9	0.4	
	1134	土錘	曲輪Ⅴ	2.0	1.4	1.4	4.3	0.4	
	1135	土錘	曲輪Ⅴ	4.9	1.5	1.4	9.1	0.4	
	1136	土錘	曲輪Ⅴ	4.6	1.4	1.2	6.1	0.4	
	1140	土錘	曲輪Ⅴ	5.1	1.2	1.2	6.8	0.4	
	1141	土錘	曲輪Ⅴ	3.5	1.2	1.1	3.9	0.3	
	1139	土錘	曲輪Ⅵ	2.2	1.4	1.4	3.8	0.5	
	1142	土錘	曲輪Ⅷ	4.8	1.4	1.3	8.1	0.4	
	1143	土錘	曲輪Ⅷ	4.8	1.6	1.3	7.7	0.3	
	1144	土錘	曲輪Ⅷ	4.7	1.3	1.3	6.6	0.3	
	1145	土錘	曲輪Ⅷ	3.0	1.3	1.2	3.8	0.4	
	1146	土錘	曲輪Ⅷ	3.9	1.2	1.1	4.3	0.5	
	1147	土錘	曲輪Ⅷ	3.6	1.3	1.2	4.6	0.4	
	1148	土錘	曲輪Ⅷ	5.0	1.6	1.5	12.0	0.4	
	1149	土錘	曲輪Ⅷ	5.1	1.7	1.6	13.0	0.5	
	1150	土錘	曲輪Ⅷ	4.9	1.6	1.5	11.3	0.5	
	1151	土錘	曲輪Ⅷ	4.7	1.6	1.6	9.2	0.5	
	1152	土錘	曲輪Ⅷ	4.3	1.3	1.3	6.1	0.3	
	1153	土錘	曲輪Ⅷ	4.1	1.6	1.5	8.8	0.5	
	1154	土錘	曲輪Ⅷ	4.9	2.0	1.5	10.0	0.5	
	1155	土錘	曲輪Ⅷ	4.8	2.0	1.6	11.0	0.4	
	1156	土錘	曲輪Ⅷ	4.5	1.4	1.4	7.2	0.4	
	1157	土錘	曲輪Ⅷ	5.3	1.3	1.3	8.0	0.4	
	1158	土錘	曲輪Ⅷ	3.8	1.6	1.5	8.6	0.5	
	1159	土錘	曲輪Ⅷ	3.4	1.3	1.2	5.1	0.5	
	1161	土錘	曲輪Ⅷ	3.8	1.9	1.8	11.5	0.5	
	1162	土錘	曲輪Ⅷ	1.8	1.2	0.9	1.2	0.6	
	1163	土錘	曲輪Ⅷ	4.4	1.3	1.3	6.1	0.4	
	1164	土錘	曲輪Ⅷ	4.8	1.3	1.3	5.6	0.4	
	1165	土錘	曲輪Ⅷ	5.5	1.5	1.6	9.4	0.4	
	1166	土錘	曲輪Ⅷ	5.4	1.4	1.4	9.1	0.3	
	1168	土錘	曲輪Ⅷ	4.9	1.5	1.2	7.9	0.3	
	1169	土錘	曲輪Ⅷ	2.5	1.3	1.1	2.7	0.4	
	1171	土錘	曲輪Ⅸ	4.5	1.7	1.5	10.0	0.5	

第３節　城跡に関わらない遺構・遺物

縄文時代

集石遺構（第51図）

早期の集石遺構が、曲輪Ⅳの西縁辺部で３基確認された。集石は全て砂岩によって構成されている。遺物を伴っているのはＳＩ１の１基のみである。

ＳＩ１

0.93ｍ×0.95ｍのほぼ円形の掘り込みを有し、床面に扁平な礫による配石をもつ。配石の周囲から炭化物が認められた。遺物は尾鈴山酸性岩製の磨石（第53図19）が１点出土している。

ＳＩ２

礫の重なりはほとんど認められず、数10個の砂岩礫が疎に配されている。礫の赤化は認められるが炭化物は確認されなかった。掘り込みは認められない。

ＳＩ３

10個程度の比較的大きく扁平な砂岩によって構成されている。礫の全てに顕著な赤変がみられる。

土器（第52図）

縄文時代の早期に位置づけられる土器が５点出土し、そのうち４点を図化した。すべて遺構に伴うものではない。１は前平式土器で、口縁外面に棒状の工具による刺突がみられる。２は手向山式の深鉢である。３・４は塞ノ神式土器である。３は外面に２条の沈線と縦位の撚糸文が施され、４は縦位の貝殻復縁による刺突がみられる。

弥生～古代の土器（第52図）

５～８は弥生時代後期中葉～後葉にかけての土器である。５～７は甕で、底部が外反し上げ底になる。８は壺で内外面ともにハケ目がみられる。９・10は古代の甕であり、外面に横方向のハケ目、内面にヘラ削りが施される。

石器（第52図 第20表）

石鏃（11～13）

11は小型の石鏃であり、 石材はチャート。12は黒曜石製、13が頁岩製である。

楔形石器（14・15）

14は相対する両辺にツブレが観察でき、15は両端に剥離が見られる。14が日東産と推定される黒曜石製、15がチャート製の楔形石器である。

磨製石斧（16）

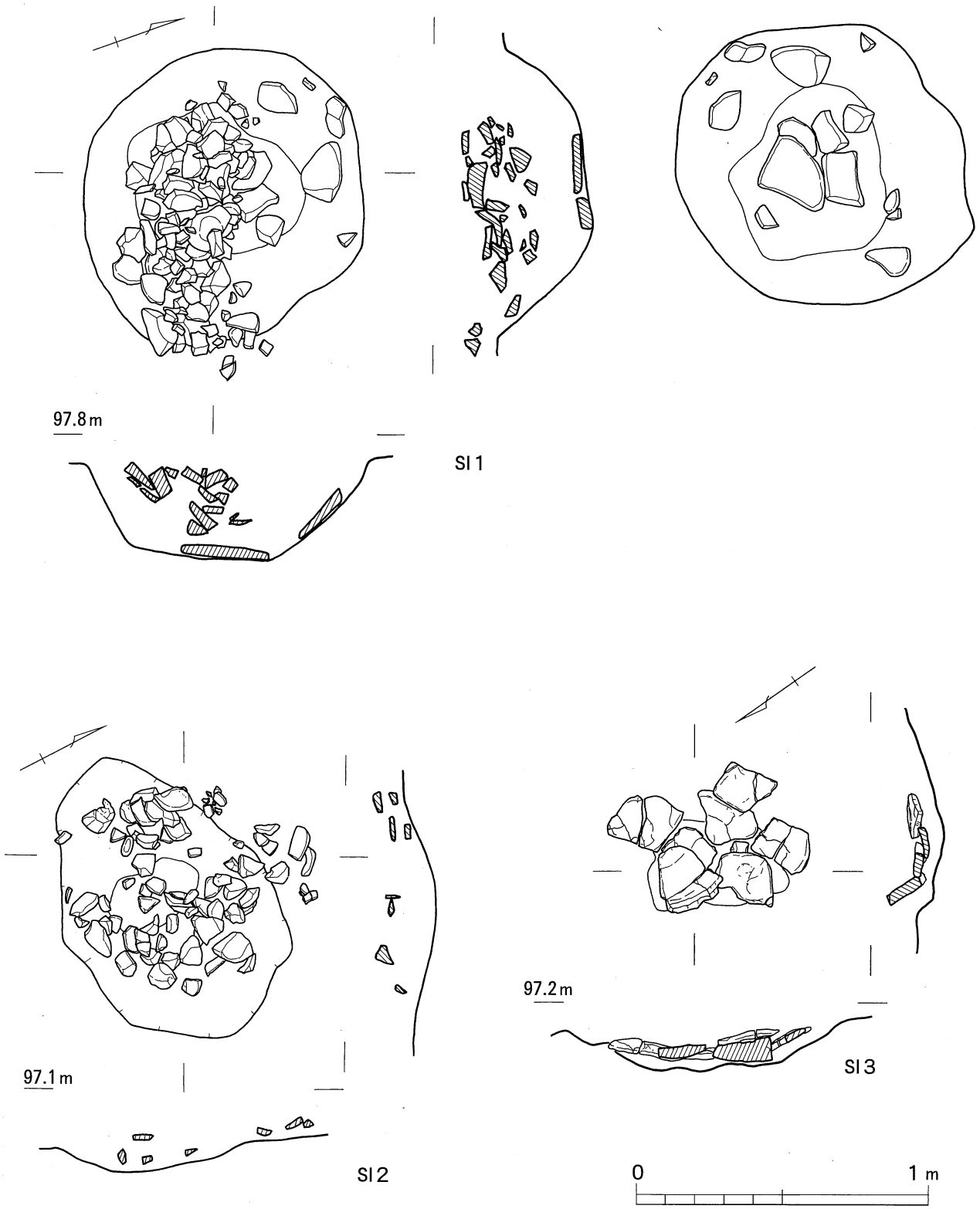
16は磨製石斧で、石材はホルンフェルスである。刃部は両刃で丁寧に研磨されている。側面に敲打による成形を行った後、研磨を施している。

凹石（17）

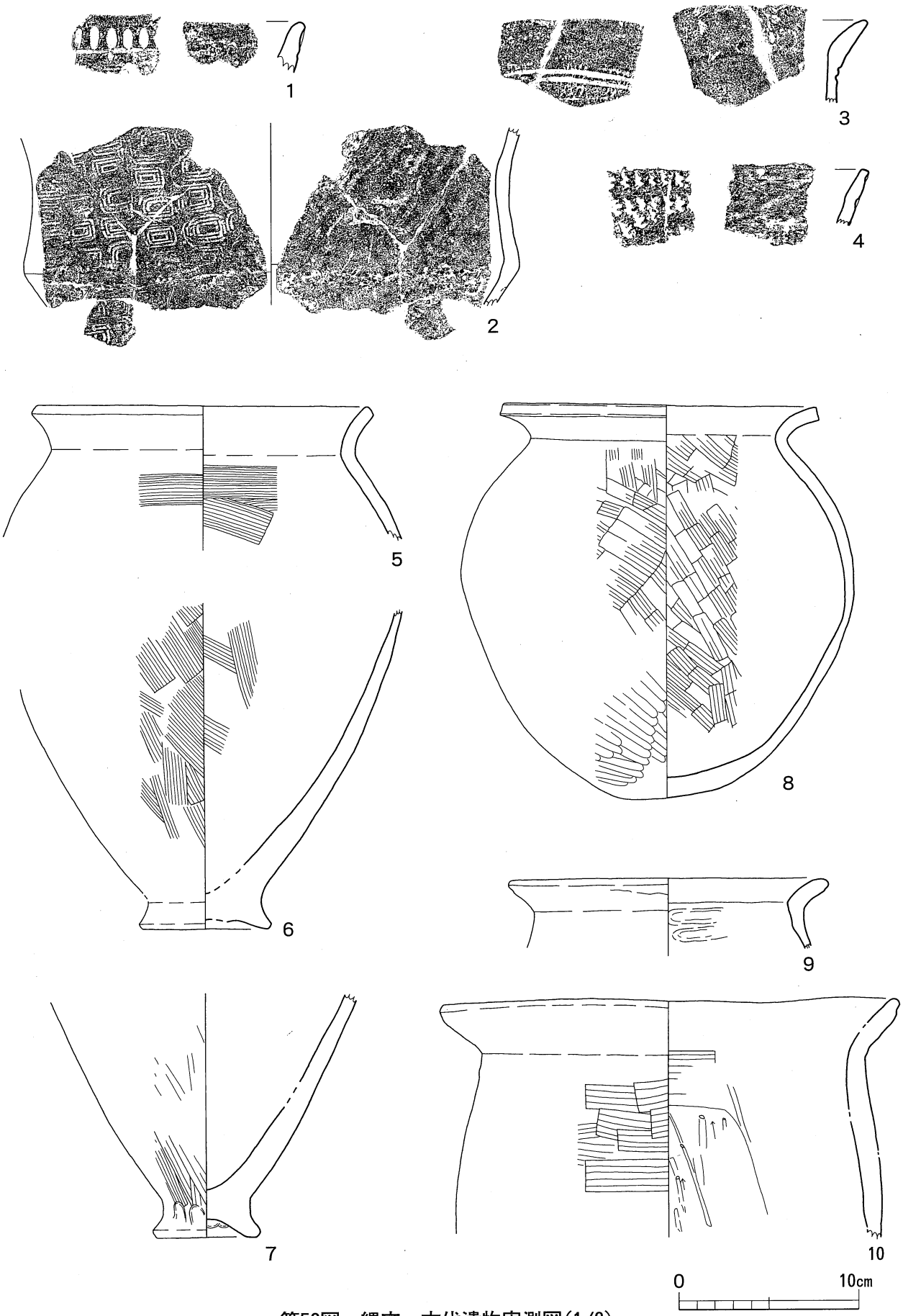
17は砂岩製の凹石である。敲打痕による凹みが表裏両面中央にみられる。

磨石（18～21）

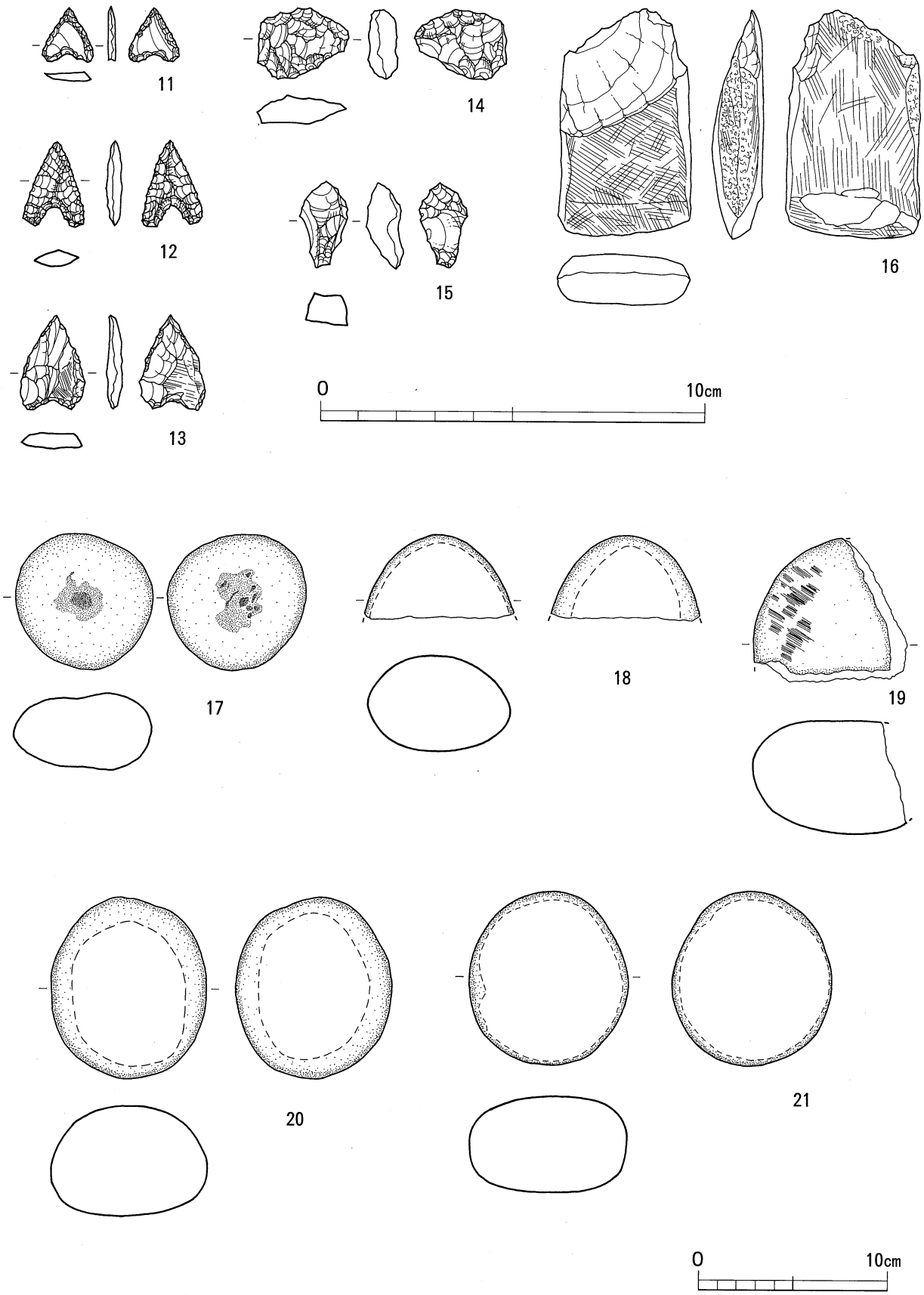
18・20は砂岩製で、19・21は尾鈴山酸性岩製の磨石である。いずれも平面形態はほぼ円形で、表裏両面に磨痕が観察される。



第51図　SI 1 ～SI 3 (1/20)



第52図　縄文～古代遺物実測図(1/3)



第53図　石器実測図(11～16　2/3、17～21　1/3)

第19表　本城跡出土土器 観察表（6）

遺物番号	種別	器種部位	地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪Ⅴ	—	—	—	ナデ 貝殻条痕文 連続押圧文 沈線有り	横方向のナデ	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	1㎜～1.5㎜大の無色透明・白色の鉱物粒を含む。	
2	縄文土器	深鉢 頸部～胴部	曲輪Ⅴ	—	—	—	同心楕円押型文	斜め方向のナデ	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	光沢のある2㎜以下の粒、1㎜以上の白色粒、1.5㎜以下の黒色粒を含む	
3	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪Ⅸ	—	—	—	貝殻腹縁 横方向刺突文の上から沈線文	ナデ全体的に風化	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	微細な白色不透明の鉱物粒、1㎜大の無色透明の鉱物粒	
4	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪Ⅴ	—	—	—	貝殻腹縁刺突文	ナデ	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	1㎜以下の黒色粒、白色粒を含む	
5	弥生土器	甕	曲輪Ⅴ	18	—	—	ハケメ ヨコナデ ススス付着	ヨコナデ 横方向のハケメ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	灰(7.5Y5/1)	2.5㎜以下の灰色、黒色、褐色粒を含む	
6	弥生土器	甕	曲輪Ⅴ	—	7	—	縦・斜方向のハケメ ヨコナデ ススス付着	縦・斜方向のハケメ斜方向のハケメ ヨコナデ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	灰(7.5Y5/1)	4.5㎜以下の灰色、黒色、褐色の粒含む	
7	弥生土器	甕 口縁～胴部	曲輪Ⅴ	25	—	—	強めのヨコナデ 横方向のハケメ	横方向のハケメ 下から上へケズリ	橙色 (5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	1～4㎜大で赤褐色砂粒、1～7㎜大で灰褐色の岩片、3～10㎜大でにぶい赤褐色砂粒を含む	
8	弥生土器	壺 口縁～底部	曲輪Ⅴ	17	8	22	ヨコナデ 斜方向にハケ目後粗い磨き風ナデ 黒斑	ヨコナデ斜方向にハケ目 黒斑	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	1㎜程の黒い粒と1～2㎜の光沢粒を含む	
9	土師器	甕 胴部～底部	曲輪Ⅴ	—	(5)	—	ハケメ ナデ 指押さえ ススス付着	ナデ全体的に風化ススス付着	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	浅黄橙色 (10YR8/4)	3㎜以下の砂粒と2㎜以下のガラス質の鉱物粒を多く含む	
10	土師器	甕 口縁～頸部	曲輪Ⅸ	17	—	—	ヨコナデ 斜方向にナデ ススス付着	ヨコナデ 横方向に指頭によるナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	1～4㎜程の灰褐色の粒、1～3㎜程の灰白色粒を含む	

第20表　本城跡出土石器計測表

遺物番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
11	石鏃	曲輪Ⅴ	1.4	1.3	0.2	0.3	チャート
12	石鏃	曲輪Ⅴ	2.2	1.6	0.4	0.9	黒曜石
13	石鏃	曲輪Ⅷ	2.5	1.7	0.4	1.2	頁岩
14	楔形石器	曲輪Ⅷ	1.8	2.4	0.7	3.1	黒曜石(日東産)
15	楔形石器	曲輪Ⅴ	2.3	1.3	0.9	2.1	チャート
16	磨製石斧	曲輪Ⅳ	6.0	3.5	1.3	37.8	ホルンフェルス
17	凹石	曲輪Ⅴ	71.5	7.2	4.0	234.8	砂岩
18	磨石	曲輪Ⅳ	(4.5)	(7.8)	5.1	222.3	砂岩
19	磨石	曲輪Ⅳ・SI1	(7.6)	(8.1)	6.0	502.2	尾鈴山酸性岩
20	磨石	曲輪Ⅳ	9.6	8.2	5.9	654.6	砂岩
21	磨石	曲輪Ⅷ	9.1	8.3	5.0	596.1	尾鈴山酸性岩

第４章　まとめ

本城跡は平成５年度から始まった中近世城館跡緊急分布調査で、中世から近世にわたる城館跡として認知されていた。今回の調査は主郭部分にはあたらないものの、６カ所の曲輪が対象となった。調査区の多くの面積を占める曲輪Ⅳから曲輪Ⅵは、現在の古城の集落が昭和初期まで営まれており、中世から近世を主体とするが、縄文時代早期から近現代までの時代幅の多岐にわたる遺物が混在して検出された。ここでは、発掘調査と縄張り調査等の成果から遺跡の性格を考えることでまとめにかえたい。

遺構について

多岐にわたる遺物とその出土量からみると検出された遺構は少なく、掘立柱建物と土坑および柱穴群が主体である。建物は曲輪Ⅳで４棟確認されＳＢ１のみ主軸が大きく東へふれるが、ＳＢ２～ＳＢ４は、主軸Ｎ７°Ｅ付近であり、同時期の作事によると推定される。腰曲輪と考えられる曲輪Ⅵでは、北側による位置で２棟の掘立柱建物が検出された。もっとも遺物出土量の多かった曲輪Ｖでは柱穴や土坑は確認されるものの、建物は１棟も確認できなかった。この結果は、削平に起因するものか本来建物の空白地帯であったか判じ難い。曲輪の性格から考えると前者の可能性を指摘したい。曲輪Ⅷについては調査区の東端で柱穴の並びが一部確認できたが、建物の主体は東側に延びると推定される。

遺物について

出土遺物は日常雑器としての土師皿と国産陶磁器が優勢で、輸入陶磁器の割合は少ない。

土師器は坏・皿がほとんどで、約250点ほど出土している。ヘラ切り底の土師器と糸切り底の土師器の割合は１：９の比率である。遺構などの一括資料として扱えるものはほとんどないため、確実に年代のはっきりするものはない。ヘラ切りを（Ⅰ類）、糸切りを（Ⅱ類）として形態分類をおこなった。その結果、総数に占める割合は、Ⅰ類の坏が５％、皿が５％でⅡ類の坏が21％、皿が69％である。圧倒的多数をしめるⅡ類の皿の中で、Ⅱ－Ｃ類（口径7.4～8.2㎝、器高1.8～2.4㎝、底径3.8～5.4㎝）が50％であり、以下Ⅱ－Ａ類20％、Ⅱ－Ｂ類20％、Ⅱ－Ｄ類10％と続く。『山内石塔群』の年代観にしたがえば、14世紀後半頃と推定される。

陶磁器は、先述したとおり輸入陶磁器は量的には少なく、13世紀代の白磁皿、14世紀～15世紀前半代の青磁碗、15世紀末～16世紀の青花などが曲輪Ｖを中心として出土している。

国産陶磁器については、SC２出土の備前の甕に代表される14世紀～15世紀の時期（間壁氏編年のⅢ期後半からⅣ期）と17世紀～18世紀の肥前産を中心とした遺物が出土している。分布の中心は曲輪Ｖや曲輪Ⅷで碗や小皿、擂鉢や71点にも及ぶ土錘・水甕と考えられる国産陶器など、曲輪の上で営まれた生活の様子が感じられる遺物が出土している。

銭貨については、北宋銭と明銭の２種に大別できる。出土は、その全てが曲輪Ｖないし曲輪Ⅷからで、曲輪Ⅷからは北宋銭のみが確認できる。銭貨の鋳造年代と城の活動期が重ならない部分もあり、年代（鋳造年代）より下がり、貨幣として本邦銭と同時に流通してい可能性もあると思われる。

本城跡の城域について

本城跡は、先述のとおり中近世城館跡緊急分布調査で城跡と推定され、千田嘉博氏の縄張り調査によってその存在が補強された。調査対象になっている標高約110ｍの最高所に位置する曲輪Ｉから西にのびる３段の曲輪で、曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ間には堀切の可能性も指摘されていた。しかし今回の調査では、痕跡を確認することができなかった。曲輪Ⅳ～曲輪Ⅵと南の城とも言うべき曲輪Ⅶ～曲輪Ⅸの間は、谷を隔てて様相を異にしている。 曲輪Ｉが主郭と推定されるが、求心性としては、北に延びる複数の曲輪をもち、見張り台的な施設を有する曲輪Ⅷも重要な役割りを果たしたと考えられる。調査区域外であるが曲輪Ⅸの南側に、地形的に掘りきったような痕跡が認められる。

『日向地誌』には、本城跡と周囲の城跡についての記述が見られる。

宮崎郡　古城村　古跡

本城址本村ノ西北字時雨ノ東北七八町ニアリ按スルニ此本城ト名ヅク蓋シ上古本城砦アリシヨリ起コリシ名ナリトミユ元禄十一年戊寅十月川崎祐盛其主伊東氏ニ建白セシ書中ニ若シ世間ノ大変トナリ各国動乱ニ及ヒ候ハ〃中野ノ城ヲ本城トナシ時雨村ノ古城ヲ取立テ戍兵ヲ置キ申スヘシト云云ハ是ナリ 山ノ城址本城ノ東二十町許独立ノ山嶺ニアリ今一段許ノ畦圃トナル左右皆林奔ナリ蓋シ此地本城砦アリ故ニ今地名トナル伊東古系ヲ考フルニ伊東祐時ノ第七子門川祐景ノ子孫十三族アリ山ノ城ヲ氏トスル其一ニ居ル今伊東氏ノ旧臣ニ存ス蓋シ其先此地ヨリ出シナリ古城ノ址山ノ城ノ東十町許西ヨリ東ニ連亘セシ山嶺ニアリ広凡七段南ヨリ西又北ニ環リ幅三四間ノ帯ヒ郭ヲ構エ唯東一面旧今福寺ニ連ナル山ノ尾アリ今人家九戸其嶺ニアリ蓋シ中古曽井城ノ未タ築カサル以前此地古城アリ故ニ今村名トナル今福寺址真言宗古城址の北麓ニアリ広凡一町余明治三年庚午廃ス但大塚村長久寺同宗ナルヲ以テ寺僧長久寺ヲ改テ今福寺トナス故ニ本名ハ今大塚村ニ存ス

今福寺（旧太田城址）や山ノ城址・古城址との位置関係からすると、記載の「本城址」と今回の調査地の本城跡とは同一箇所ないし、かなり近辺を指すものと考えられる。

以上のことから、本城跡の存続期間を想定するのは困難であるが、伊東氏と島津氏の攻防が盛んな14世紀末～15世紀前半には、城（砦）としての役割を果たしていたものと考えられる。

＜参考・引用文献＞
平部嶠南 『日向地誌』 1929
間壁忠彦 「備前」世界陶磁全集３ 1977
谷口武範 「第４節土師器に関する二・三の問題について」『山内石塔群』宮崎県教育委員会 1982

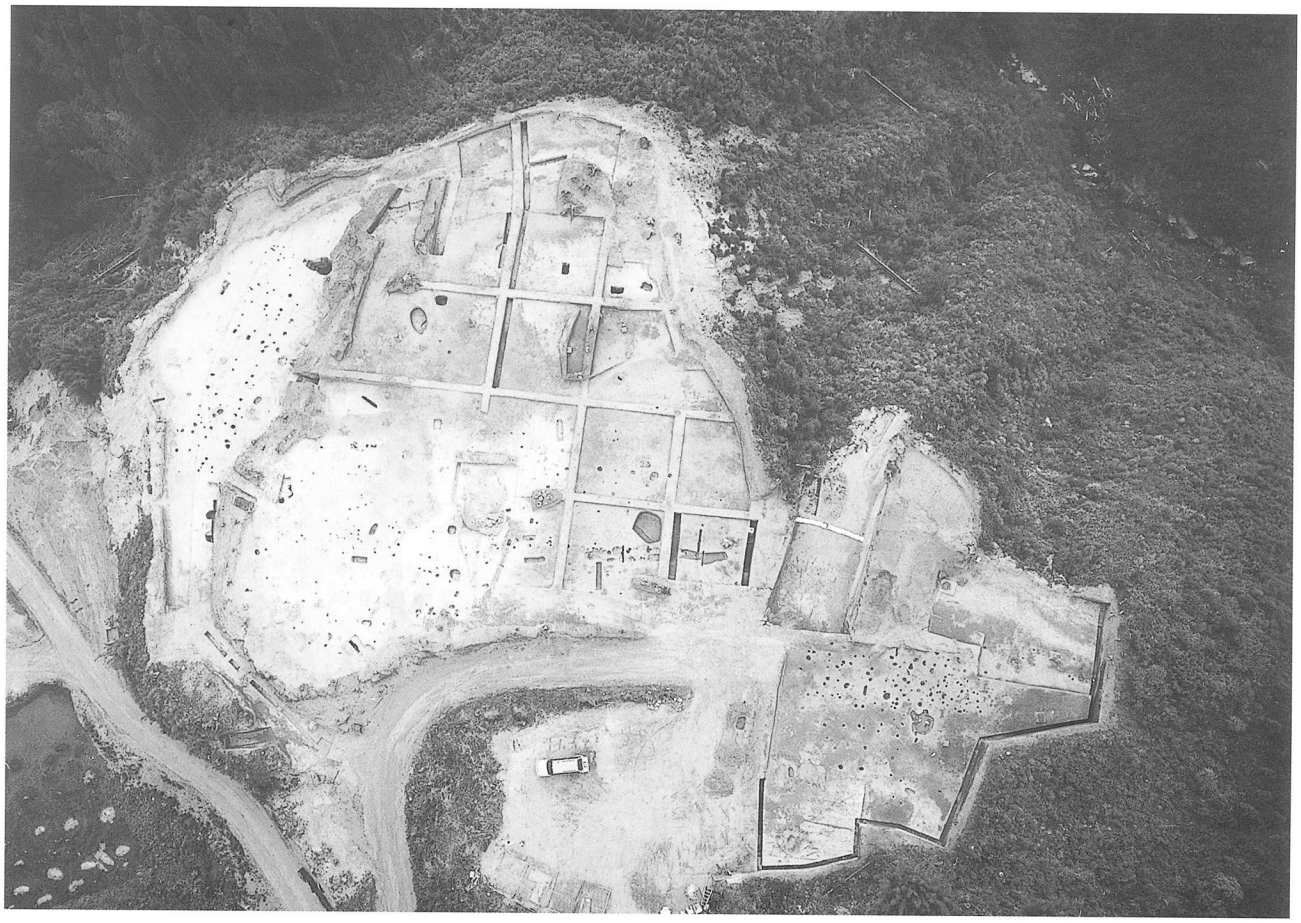
おわりに

今回の調査では、時代が多岐にわたることや遺物が複雑なためと、城跡の評価についてわからないことが多く、筆者の力量の不足を痛切に感じた。調査や整理作業の中で想起した問題点について、今後深化させたい。また、多くの方の御指導・御協力を頂いた。文末ながら記して謝意を表したい。

崎田一郎　菅付和樹　鈴木公子　千田嘉博　谷口武範　中井均　永友良典　浜砂雅子
日高広人　福田泰典　北郷泰道　柳田晴子　吉本正典（敬称略・五十音順）

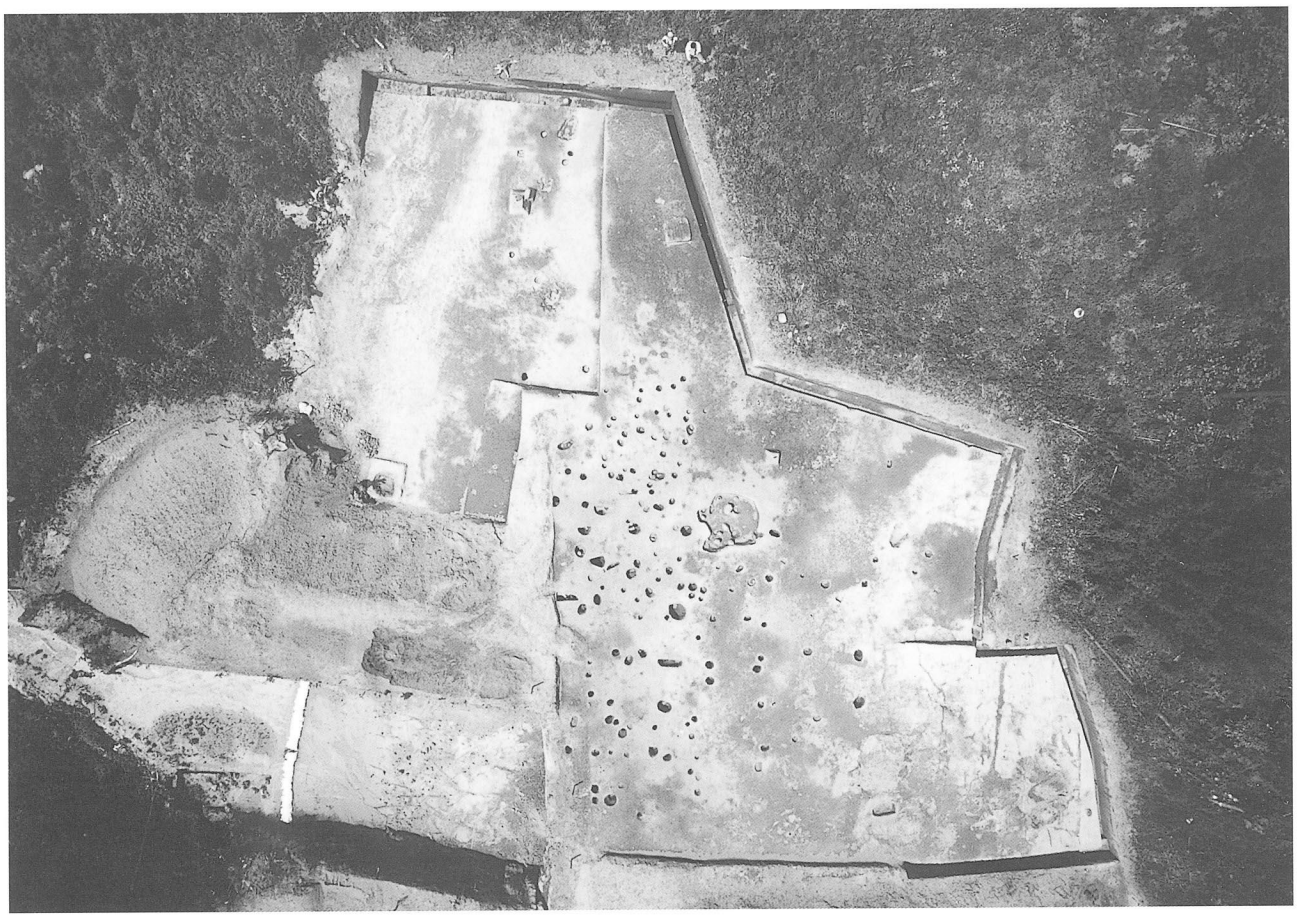
図　　版

曲輪Ⅳ～Ⅵ（南から）

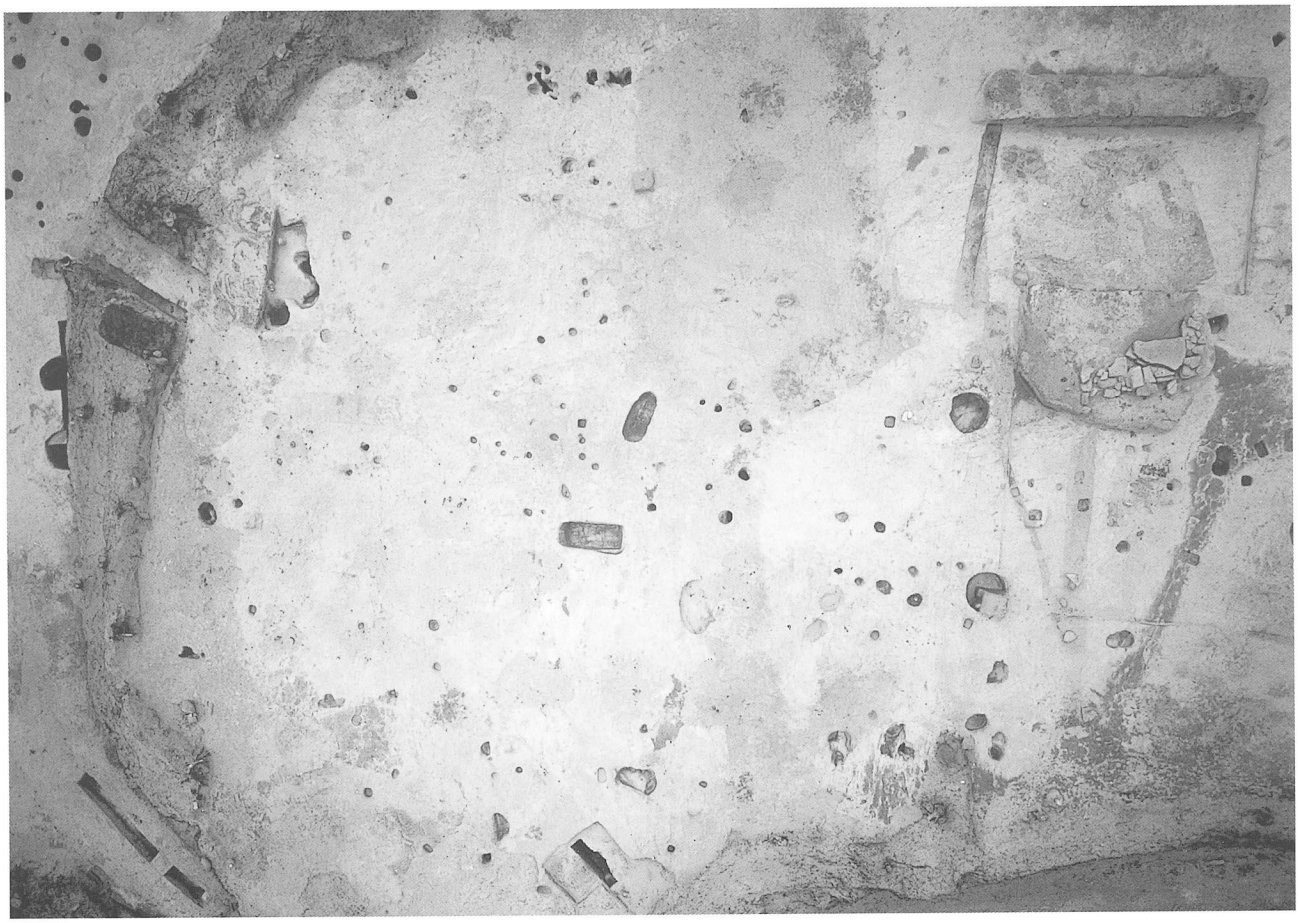


曲輪Ⅳ～Ⅵ（真上から）

図版2



曲輪Ⅳ（真上から）



曲輪Ⅴ（真上から）